# 中村・外垣外・磐畑遺跡

——茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書——

2004.3

茅野市教育委員会

NAKAMURA・SOTOGAITO・GANIBATA　SITE

# 中村・外垣外・磐畑遺跡

――茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書――

２００４.３

茅野市教育委員会

# 序　　文

このたび、茅野市西茅野土地区画整理事業の実施に伴い、緊急発掘調査を茅野市教育委員会が行いました。

茅野市には非常の多くの縄文時代の遺跡がありますが、これまで発掘された遺跡のほとんどは八ヶ岳山麓ばかりでした。近年、開発が守屋山麓にもおよび、これまであまり知られていなかった遺跡の状況が若干ではありますが解明することができました。

茅野地区は「千野氏」発祥の地とも言われ、千野氏居館址の存在が期待されました。調査の結果、中村遺跡から中世の掘立柱建物址や溝址が確認できましたが、明確に居館址と思われる遺構は発見できませんでした。

遺跡の主体をなす時期は、平安時代の集落で、３遺跡あわせて11軒もの住居址を発見することができました。そのうちの１軒は、宮川沿いの沖積地から発見され、沖積地における集落のあり方について、重要な資料と思われます。

また、蟹畑遺跡からは戦国時代の地下式坑が６基検出され、そのうちの１基からは古瀬戸の香炉が出土し、地下式坑の用途を考える上で、非常に貴重な資料であるといえます。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの関係諸機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成16年３月

茅野市教育委員会

教育長　両角　源美

# 例　　言

1．本書は、茅野市西茅野土地区画整理組合理事長 五味政義と茅野市長 矢崎和広との間で締結した「茅野市西茅野土地区画整理事業中村遺跡発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成12・14・15年度茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う、長野県茅野市宮川中村・外垣外・蟹畑遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は茅野市西茅野土地区画整理組合よりの委託金を得て、茅野市教育委員会が平成12・14・15年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第1節5として記載してある。

3．発掘調査は、平成12年度は4月10日から7月24日まで、平成14年度は9月9日から10月28日まで、平成15年度は5月6日から6月18日、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成16年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。

4．本書作成の作業分担は第Ⅰ章第1節3に記してある。

5．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

6．土層に色調については『新版標準土色帳』の表示に基づいて示した。

7．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。

# 凡　　例

本書の図で用いたスクリーントーンや記号の意味は下記のとおりである。

**遺構**

- 焼土
- 粘土
- 堅緻な面

**遺構内のドット**

縄文時代
- 土器
- 黒耀石

平安時代
- 土師器
- 黒色土器
- 須恵器
- 灰釉陶器

**遺物**

縄文時代
- 繊維土器

平安時代
- 土師器
- 黒色土器(みこみ部)
- 須恵器
- 灰釉陶器(断面)
- 緑釉陶器

中世
- 土師質土器
- 陶器
- 磁器

# 目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会教育長　両角 源美
例　言・凡　例

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第１節　発掘調査の経過……1
　　１．発掘調査の事務経過……1
　　２．調査区の設定……1
　　３．発掘調査の経過……1
　　４．調査日誌（抄）……2
　　５．調査組織……3
第Ⅱ章　遺跡の概要……4
　第１節　遺跡の立地と地理的環境……4
　第２節　遺跡の歴史的環境……4
　第３節　遺跡の研究史……6
　第４節　周辺の遺跡……7
第Ⅲ章　遺跡の層序……10
　第１節　中村・外垣外遺跡の基本層序……10
　第２節　蟹畑遺跡の基本層序……10
第Ⅳ章　中 村 遺 跡……12
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……12
　　１．縄文時代の遺構……12
　　２．縄文時代の遺物……21
　第２節　平安時代の遺構と遺物……22
　　１．住居址……22
　　２．土　坑……25
　　３．遺構外の遺物……26
　第３節　中世以降の遺構と遺物……26
　　１．掘立柱建物址……26
　　２．溝　址……35
　　３．土　坑……35
　　４．方形竪穴……36
　　５．中世以降の遺物……36
第Ⅴ章　外垣外遺跡……37
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……37
　　１．縄文時代の遺構……37

２．縄文時代の遺物……37
第Ⅵ章　蟹 畑 遺 跡……40
第１節　縄文時代の遺構と遺物……40
１．縄文時代の遺構……40
２．縄文時代の遺物……47
第２節　古墳時代の遺物……50
第３節　平安時代の遺構と遺物……51
１．住居址……51
２．土　坑……64
第４節　中世以降の遺構と遺物……65
１．土　坑……65
２．地下式坑……65
第Ⅶ章　発掘の成果と課題……72
第１節　中村・外垣外・蟹畑遺跡の縄文時代の様相……72
第２節　中村・蟹畑遺跡の平安時代の様相……74
１．集落の様相……74
２．遺物の特徴……74
３．遺跡の概観……74
４．周辺の遺跡との関係……75
５．今後の課題……75
第３節　中村・蟹畑遺跡の中世の様相……76
１．中村遺跡の中世遺構……76
２．蟹畑遺跡の中世遺構……76
３．中世の中村・蟹畑遺跡……77
第Ⅷ章　結　　語……78

付　　表……80
写真図版
抄　　録

# 第Ⅰ章　発掘調査の概要

## 第１節　発掘調査の経過

### 1. 発掘調査の事務経過

・平成12年度

平成12年４月10日　「茅野市西茅野土地区画整理事業中村遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市土地区画整理組合理事長 五味政義との間で締結し、委託金16,000,000円で発掘調査を行うことになった。

平成12年９月８日　遺跡規模が縮小したため、事業費を5,600,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

・平成14年度

平成14年９月９日　「茅野市西茅野土地区画整理事業外垣外遺跡他発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市土地区画整理組合理事長 五味政義との間で締結し、委託金6,500,000円で発掘調査を行うことになった。

平成14年12月５日　外垣外遺跡他の一部を平成15年度に発掘を行うことになり、報告書を平成15年度に刊行することになり、事業費を3,170,000円に変更し、変更委託契約書を提出。

・平成15年度

平成15年４月30日　「茅野市西茅野土地区画整理事業蟹畑遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市土地区画整理組合理事長 五味政義との間で締結し、委託金7,500,000円で発掘調査を行うことになった。

平成16年１月28日　当初予定より遺跡の密度が薄かったため、計画より発掘調査日数が短縮になり、事業費を4,750,000円に変更し、変更契約書を提出。

### 2. 調査区の設定

調査に先立ち、平成10年11月から12月にかけて茅野市西茅野土地区画整理事業地内の現地踏査を行った結果、中村・外垣外・蟹畑の３遺跡を発見した。これに併せて、同年12月６日から13日まで平成12年度調査予定の中村遺跡の試掘調査を行い、発掘調査範囲を確定した。この時、遺構は建物址の一部と思われる柱穴が確認され、遺物は黒耀石剥片や平安時代灰釉陶器片・土師器片、中世の捏鉢片・土師質土器片を検出している。平成11年１月14日に長野県教育委員会文化課と茅野市都市整備課・茅野市西茅野土地区画整理組合との間で協議がもたれ、大半が埋土になることがわかり、工事により削平されることが予想される道路敷部分の発掘調査を行うことになった。調査面積は中村（中村・外垣外）遺跡2,500㎡、外垣外（蟹畑）遺跡800㎡、蟹畑遺跡1,000㎡である。

グリッドについては調査範囲内に設定し、遺跡の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、中村（中村・外垣外）遺跡が公共座標x＝－2320.619・y＝30614.708、外垣外（蟹畑）遺跡は公共座標x＝－2220.542・y＝30607.740を基準点とし、この基準点から、中村（中村・外垣外）遺跡は一辺６m、外垣外・蟹畑（蟹畑）遺跡は一辺５mのグリッドを設定した。ベンチマークは中村・外垣外遺跡は787.765m・蟹畑遺跡は788.039mである。

### 3. 発掘調査の経過

・平成12年度

表土剥ぎを４月10日から開始し、発掘調査を終了したのは７月24日だった。遺跡は遺跡後背部の山から押し出されてきた崩落土や宮川から供給される河原石で遺跡の大部分を構成しており、遺構の検出は困難を極めた。発掘の測量は空中写真測量の他に日常的な測量方法としてやり方や平板測量を状況に応じて行った。遺跡の記録は柳川・武居・田中・野澤・大宮が行った。空中写真測量は６月15日にセントラル航空測量株式会社山梨支社によって行われた。測量後、区画整理組合に現場を引き渡した。

・平成13年度

７月26日に蟹畑遺跡の一部を西茅野土地区画整理組合・地権者・茅野市都市整備課職員立ち会いのもと茅野市教育委員会文化財課の守矢が試掘調査を行い、試掘対象地には遺構は存在しないことが判明し、そのまま工事を実施することになった。

・平成14年度

４月18日に外垣外遺跡の調査対象地の残りの部分を西茅野土地区画整理組合・地権者・茅野市都市整備課職員立ち会いのもと茅野市教育委員会文化財課の柳川が試掘調査を行い、試掘対象地には遺構は存在しないことが判明し、そのまま工事を実施することになった。

９月９日に蟹畑遺跡の発掘を開始し、10月29日には現場を終了し、区画整理組合に現場を引き渡した。

・平成15年度

５月６日に平成14年度に引き続き、蟹畑遺跡の調査を行う。６月18日には現場を終了し、区画整理組合に現場を引き渡した。

報告書作成は、平成12年度より、発掘調査と平行して行う。報告書の執筆分担は下記の通りである。

編集・本文執筆　守矢昌文（第Ⅳ章第１節２・第Ⅴ章第１節２・第Ⅵ第１節１の縄文時代の遺物と２・第Ⅶ章第１節）・柳川英司（その他）

## 4. 調査日誌（抄）

・平成12年度

４月10日　中村遺跡の表土剥ぎを始める。

４月19日　都市整備課の両角敏行技師と協議し、続けて外垣外遺跡を行うことになった。

４月24日　外垣外遺跡の遺構確認を行う。

５月15日　調査区ｂの遺構確認を始める。

５月16日　基準杭測量の入札を行い、株式会社両角測量に決まる。

５月19日　基準杭測量を行う。遺跡全体図を作り始める。

５月25日　外垣外遺跡の遺物を取り上げる。

５月26日　外垣外遺跡の発掘終了。

６月８日　空中写真測量の入札を行い、セントラル航空測量株式会社山梨支社が落札。

６月15日　ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行う。

６月16日　発掘機材の撤収を行う。

６月24日　遺跡見学会を行う。

・平成14年度

４月18日　外垣外遺跡の調査対象地の残りの部分の試掘調査を行い、試掘対象地には遺構は存在しないことが判明した。

９月12日　蟹畑遺跡の表土剥ぎを始める。

９月26日　５号住居址の発掘を始める。住居址中央部から２号地下式坑が検出される。３号住居址内から、麻皮剥器が出土。

９月27日　６号住居址の発掘を始める。縄文時代の住居址と判明。

10月３日　番組「諏訪の歴史」作成のため、地元ケーブルテレビ会社、ＬＣＶ株式会社が撮影。

10月４日　２号住居址から灰釉陶器瓶が出土する。

また、3号住居址から紡錘車が出土する。

10月28日　4号地下式坑の発掘が終わる。3号地下式坑の入口部分から、古瀬戸香炉が出土する。

10月29日　すべての作業が終了し、撤収作業を行う。区画整理組合に現場を引き渡して終了。

・平成15年度

5月6日　蟹畑遺跡の表土剥ぎを始める。

5月12日　9号住居址の発掘を始める。

5月13日　焼土址の発掘を始めるが、時期は不明。5号地下式坑の発掘を始める。

5月14日　10号住居址の発掘を始める。

5月26日　調査区北側の柱穴群の発掘を始める。

6月2日　68号土坑から条痕文土器が出土。

6月4日　遺構確認を行う。最南部から加曽利B式土器が出土する。

6月16日　12号住居址の柱穴を検出する。

6月18日　発掘機材の撤収作業を行い、区画整理組合に現場を引き渡す。

## 5. 調査組織

・平成12年度～平成15年度

調査主体者　両角源美（教育長）

事　務　局　宮坂泰文（教育次長）（～平成13年3月）

伊藤修平（教育部長）（平成13年4月～平成15年3月）

宮坂耕一（教育部長）（平成15年4月～）

文化財課　矢嶋秀一（課長）（～平成14年3月）　小平廣泰（平成14年4月～）

文化財係　鵜飼幸雄（係長）（～平成13年3月）　守矢昌文（平成13年4月～）

小池岳史　百瀬一郎　小林健治（～平成15年9月）　柳川英司

金井美代子（平成13年4月～平成14年3月）

大月三千代（～平成13年3月・平成14年4月～）

調査担当者　柳川英司（平成12・14・15年）・守矢昌文（平成13年）

調査補助員　武居八千代

発掘調査・整理作業協力者

青沼滋喜　鵜飼澄雄　大宮　文　小池花織　小海栄子　五味　稔　五味勇次　五味芳英　清水里苗　高木貞子　田中達朗　野澤みさ子　花岡照友　原　徳治　北條嘉久男　増木三訓　柳沢　宏　若林洋平　藤森すみれ　森　浩子

基準点測量：株式会社　両角測量（平成12・14・15年）

遺構測量委託：セントラル航空測量株式会社山梨支社（平成12年）

発掘調査期間及び遺物整理期間中、茅野市西茅野土地区画整理組合ならびに地権者の方々にご助力をいただき、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事原明芳氏・平林彰氏・上田典男氏をはじめ、下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

宮坂光昭　百瀬長秀　藤原直人　会田　進　小坂英文　山田武文　宮坂　清　田中慎太郎　高見俊樹　青木正洋　五味裕史　小林純子　中島　透　小松隆史　小松有希子　小林光男

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　遺跡の立地と地理的環境

中村遺跡（323）・外垣外遺跡（324）・蟹畑遺跡（325）は茅野市宮川西茅野6424番地他に所在する。この地は茅野駅から約２kmに位置している。中村・外垣外遺跡は守屋山麓の沖積地上に、蟹畑遺跡は、西山から伸びる尾根状台地上にある。遺跡の北東側には宮川が流れている。宮川を挟んで北側に御社宮司遺跡がある。中村・外垣外遺跡は守屋山系より流れ出る浦の沢川や麻浸（おして）川から押し出された土砂によって形成された扇状地と宮川によって運ばれた土砂によって形成された河原地の接点に位置する沖積地である。蟹畑遺跡は遺跡東側にある火燈（ひとぼし）山の山裾に位置する。中村・外垣外遺跡内のほとんどの場所は礫地ではあるが遺跡の中心部は礫のない褐色土になっていた。遺構のほとんどはこの場所より検出された。地山の中に守屋山系中に含まれる緑色岩が多く含まれていたが、中には少量ではあるが閃緑花崗岩が確認される。現在は、礫層の上部にかなりの盛り土をして耕地に利用している。そのため遺構確認面まではかなりの深さがあった。

## 第２節　遺跡の歴史的環境

**鎌倉時代**　西茅野地区は古文書に古くから見えており、最古は治承４年（1180）の吾妻鏡の記述である。中村・外垣外という小字に隣接して「イモリ沢」（茅野市教育委員会　1990）という小字があるが、史料１の「庵沢」はこの地であると考えられている（諏訪史談会　1958）。『茅野市史　中巻』によると、時代は不明だが千野氏の居館の最初が御社宮司遺跡の所にあり、次に宮川を挟んで中村遺跡に移り、更に西茅野の集落付近の「式部屋敷」という場所に移転したという伝承を載せている。千野氏は『前田家本神氏系図』によると千野郷が名字の地であると記され居住していたとされるが、いつの頃からか大熊へ本拠地を移したと言われている。御社宮司遺跡は鎌倉時代後期から室町時代が主体をなす遺跡で、瓶子が数多く出土するなどかなり特殊な遺跡と考えることができる。千野氏は源平合戦時に木曽義仲の有力家臣として活躍したことが知られており、千野氏の居館址として適当な地と考えられる。次に居住したと言われている中村遺跡は、平安時代後期の住居址や遺物と室町時代の遺物が出土しているが、非常に遺構の分布が薄いため遺物の性格を判断することは難しい。

他に室町時代に作成されたと思われる「諏訪十郷日記」や嘉禎３年（1237）の「祝詞段」に「千野」や「茅野」の記述がある。

（史料１）　治承四年（1180）九月　「吾妻鏡」巻一

十月己未、甲斐国源氏、武田太郎信義・一条次郎忠頼以下、聞石橋山合戦、奉尋武衛、欲参向于駿河国、而平氏方人等在信濃国云々、仍先発向後彼国、去夜止宿于諏方上宮庵沢之辺、及深更、青女一人来于一条次郎忠頼之陣云々、

**室町時代**　室町時代は守矢文書中に多くの記載が見られるが、文書の性質上、諏訪神社の祭礼関係で頻出する。主に「千野神主（こうぬし）」と「千野河明神」に関する記述である。史料２は大祝に職位（即位）したときの儀式を記録した「大祝職位事書」記載のものである。神主は「村代神主」と呼ばれる上社所領の基礎となる郷村の代表者が勤めていたようだ。神主が世襲であったかどうかは不明である。史料中の「十四仁（人）小社祝」というのが村代神主のことであろう。千野神主の特徴的な職務として、大祝が鶏冠社の石の上に着座するとき、敷く葦を調達することである。これは川に近いことが関係しているからだろうか。同様のことは応永４

年（1397）の有継職位時・文安５年（1448）の頼満職位時にも見られる。他に「守矢満實書留」では文明３年（1471）と文明４年には御左口神礼などに七百文を負担し、文明14年の栗林御精進始には御左口神礼三百文を負担している記述がある。室町時代後期に成立したと考えられる「年内神事次第旧記」によると、矢崎祭では他の十三郷とともに３匹の馬場へ出す犬（犬追物か）を負担している（史料４）。史料４の後半では、千野は青柳木と共同で負担することが多く、青柳木の成立と千野の縮小が考えられる。

また、職位時に「十三所参」という摂社十三社を廻る儀式があるが（史料２・３）、その中に「千野河（川）明神」があり、諏方上社の祭礼の中で重要な地域であったことがわかる。

（史料２）建武２年（1335）「大祝職位事書」 普寛頼継兵部職位

「次祭礼次第、五官祝、次十四仁小社祝と米・銭・布あつめて神事勤仕申候なり、

千野神主　　白米三升　　二百文」

「鶏冠大明神と申、その木の元ニ石有、その石上葦をしき御装束着、此あしハ千野神主役、」

「過て大宮へ御参詣有、（中略） 御門戸屋にての神事、（中略）十四人小社祝、布二ちやうつゝ、これをあつめて御門戸屋ニしき、其上ニ御穀をそなゑ大祝殿御座有、」

「一神田の内間ニ居給ふ神おハしますニ仍て、神殿と申なつけまいらせて、それにて祈念を申、（中略）、各々食出しの御酒有、溝上・前宮と久須井・大歳・千野河これまてなり、」

（史料３）文明16年（1484）12月28日 「大祝職位事書」 諏訪宮法師丸職位

「一千野河大明神御社参有、御祝殿ニ御へい・御手くら神長もたせ申、十三所行法、授職灌頂法印のつと申、御手はらハせ申也、さて御帰候也、路次之事別紙みへタリ、」

（史料４）室町時代後期か 「年内神事次第旧記」

「一御最所之お帰りに神原にて御神事次第

（中略） 千野・青柳木ニ二坏　此内四杯わ矢崎の赤御穀ニとゝまる、五杯ハてんちやうニなる、」

具体的な茅野の記述としては以下の史料５から７までが挙げられる。史料５では御射山祭に大雨によって大祝達が茅野へ御射山より下山してきた記述がある。『諏訪史蹟要項』によると御社宮司遺跡の所に御射山道が通っていることがわかるため、通り道の茅野に逗留したことがわかる。

（史料５）文明14年（1482）閏７月25日 「守矢満實書留」

「閏七月廿五日、御射山上増、大雨降、夜入テ御上有、次日モ大雨・大風吹、未時迄皆々宿吹破、社参人馬　カヨイモ絶、皆々里より下向申、然共日照上御手帛、御座有、又其夜［　］計より大風大雨降、下増の日山庵後木吹さき候、丑寅へマロフ、様々、山よりハ大祝殿・祝達、晦日にハ茅野迄御下有、御宿候、祝達少々田沢宿・五日市ハ・十日市ハ・大町大海と成、郡内成海原と、様々、」

史料６は文明15年の大祝家と惣領家の争乱後に、上原に大祝家を接収した惣領家が本拠地を置いた後の大祝職位について記述したものである。これによると家臣の矢崎肥前守が「千野天福寺」にいることが述べられている。現在天福寺については記録や伝承が全く残されていない。江戸後期に書かれた『諏訪旧跡年代記』には「当郡往昔有精舎日常官寺草創号名同于寺号慶長年年間洪水流失」とあるが、天福寺であるかどうかは不明である。

（史料６）文明16年（1484）12月28日 「大祝職位事書」 諏訪宮法師丸職位

「一十二月廿八日みすのえ子刑部大輔満政（正満御息） 御二男宮法師丸五歳ヲシテ大祝立給ふ、自高戸屋御□□□出、神長信濃守満實・矢島美作守満綱、一族にハ矢崎満継、肥前守ハ千野天福寺行ニより御ともなし、」

史料７は十三所参の時の大祝の道順について書かれたものである。千野河明神は、大歳神社より五日市場へ至り、河（上川･宮川か）を越えて、千野川（宮川か）を隔てて「明神」（上社前宮か）を向かいに拝する位置にあったという。

（史料７）文明17年（1485）「大祝職位事書」

「軈大歳大明神御立候御前ニはたけアり、其畠にみちあり、馬を南頭ニ打上、五日市場へかゝり、河をうち越し、千野河大明神江御参候、千野川をへたて申て明神をはむかひニ拝申、呪印過て御宿所へ御帰あるへく候、」

江戸時代

慶長15年（1610）に高島藩主の諏訪頼水より千野（茅野）村に対して史料８の開発文書が出されている。古村である千野村に対してこのような文書が出されているところを見ると、度重なる水害によって耕地が流出し、新たに開発を迫られていたことがわかる。史料９では翌慶長16年に御射山神戸新町の役は千野村新町同然とあり、史料８の開発が行われていたとほぼ同時期に新町の創設が行われていたことが考えられる。

（史料８）慶長15年（1610）「諏訪頼水定書」 茅野区文書

定

一当町諸役令免許之間何も望之者」可罷出候事、

一当郡中ゟ欠落之者、此町へ罷越候共、」是も諸役免許之事、

一新田畠切起之儀五ヶ年作取候べく候事、

以上

慶長十五年庚戌

七月廿六日　　頼水（花押）

千野村

（史料９）慶長16年（1611）「諏訪頼水奉書」 御射山神戸区文書

御射山神戸新町之事、千野村新町同然に役等引積之儀者、可有之由被仰出候間、致安堵、弥肝煎候而、家数多作り候様に尤に候、但し神戸古町にて役仕来候者、新町へ罷出候共役は不叶候、以上、

慶長十六年辛亥　　諏訪美作守　頼□（花押）

二月廿三日　　矢島隼人佐　□（花押）

茅野靱負尉　□（花押）

神戸村新町

善之丞

惣右エ門

## 第３節　遺跡の研究史

今回発掘した３遺跡は平成３年作成の『茅野市遺跡台帳』では確認されておらず、その後の分布調査によって確認された。しかし、中村遺跡については『諏訪史　第一巻』において安国寺の大島憲章氏所蔵資料として記載があり、打石斧と石鏃の採取がある。縄文時代の遺跡としての認識があったらしい。『諏訪史蹟要項十六　茅野市宮川篇』には茅野氏居館跡で中村遺跡の記載がある。また、昭和37年発行の『旧宮川村史編纂会　研究　其の三　茅野郷と茅野氏』には中村遺跡該当地に「中村屋形跡」とあり、「屋館跡の畑地から石器・土器・釉のある土器・朝鮮土器等簇出する」と記されている。

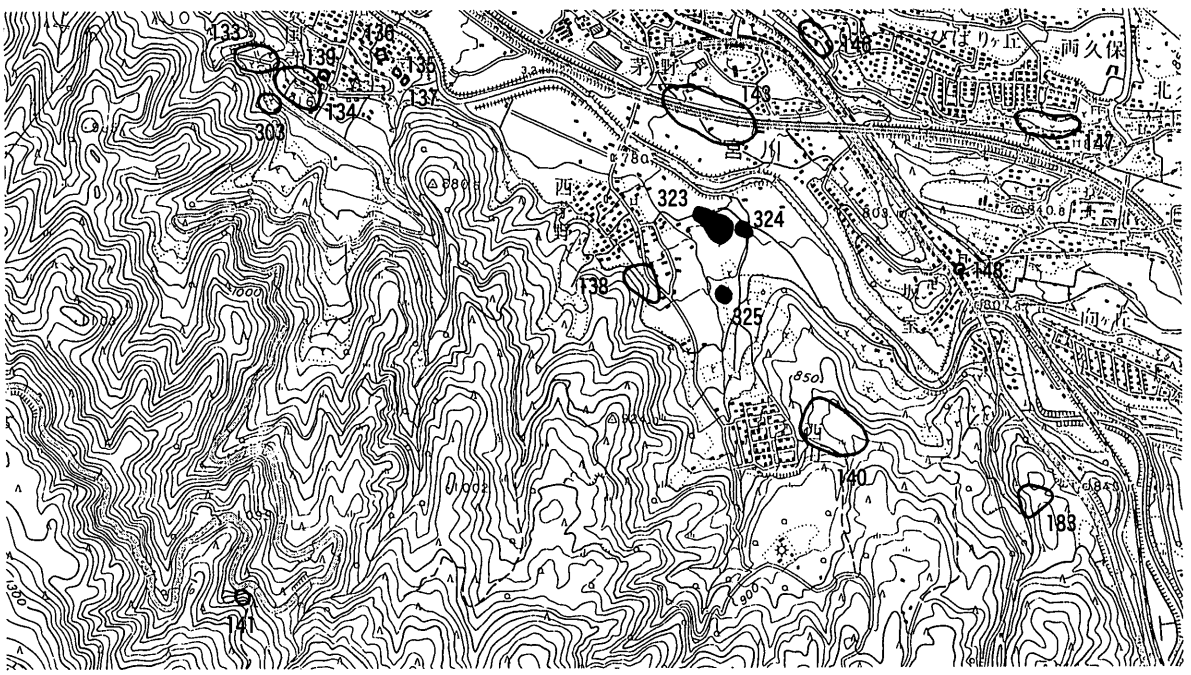
## 第４節　周辺の遺跡

西茅野地区の遺跡は、『諏訪史　第一巻』では西茅野御社宮司・中村・ボテラ平・西茅野の名が挙げられている。このうちボテラ平と西茅野の遺跡は今は伝わっていない。昭和31年発行の『信濃史料　第一巻上　考古史料篇』では、裏ノ山・横山遺跡、茅野地区で御社宮司社境内の３遺跡が確認されている。昭和33年発行の『諏訪史蹟要項　十六　茅野市宮川篇』では、山ノ神・横山・駒形城の記述があり、中村と御社宮司遺跡該当地には「茅野氏居館跡」とある。昭和37年発行の『旧宮川村史編纂会　研究　其の三　茅野郷と茅野氏』には中村遺跡該当地に「中村屋形跡」、山の神遺跡は「横山･山ノ神」とある。昭和61年発行の『茅野市　上巻　原始・古代』では山ノ神・裏ノ山・御社宮司、『茅野市　中巻　中世・近世』によると城郭では茅野城（駒形城）・御天城（御天上・御殿城）が記されている。

**裏ノ山（138）**　未発掘の遺跡で詳細はよくわかっていない。中村遺跡等がある扇状地の西側山裾が遺跡となっている。『信濃史料　第一巻上　考古史料篇』に確認された遺跡で現在に至っている。出土遺物は加曽利E式期の土器と石鏃と打石斧が確認されている。

**山の神遺跡（140）**　昭和33年、旧宮川村誌編纂会（代表　今井すみ江）の資料収集のための発掘と、昭和44年、岡谷南高校歴史部考古班が西山山塊の分布調査の中での発掘と２回の調査が行われた。昭和33年の時は、宮坂英弐が担当者となり、旧宮川村誌編纂委員や茅野高校地歴部員が協力して行い、『西茅野（山ノ神・横山）遺跡概報』として刊行された。この時の発掘で４軒の住居址を発掘し、井戸尻式期１軒・曽利Ⅱ式期１軒・曽利Ⅲ式期１軒・曽利Ⅴ式期１軒が確認された。岡谷南高校が発掘した成果は同校機関誌『縄』第一号に掲載されている。この時の発掘で３軒の住居址が確認された。時期は、曽利Ⅴ式期１軒・曽利式期２軒の住居址である。採集資料として円錐土偶が出土していることが注目される。

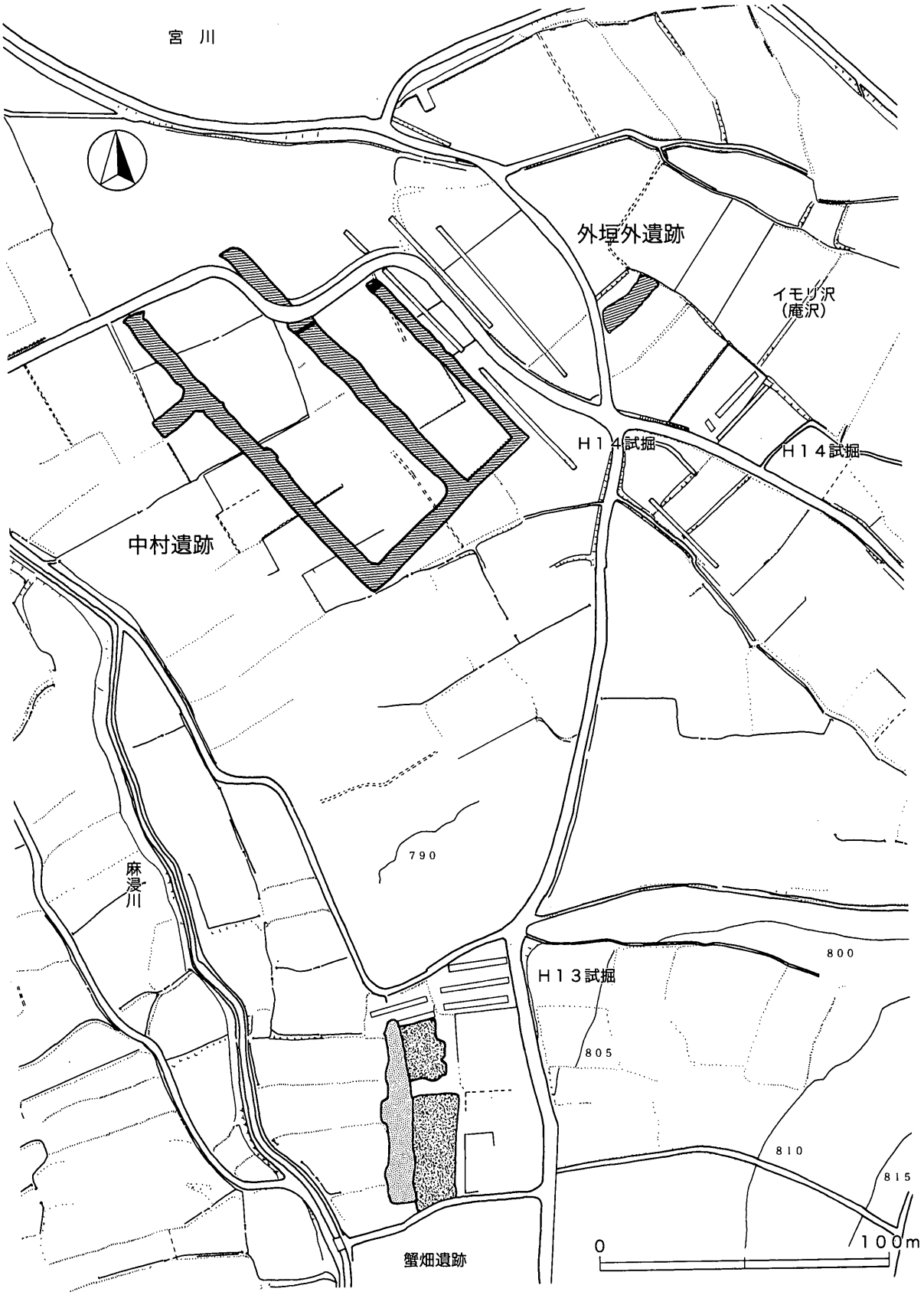
**御社宮司(143)**　昭和53年に中央自動車道建設のため発掘調査が長野県教育委員会によって行われた。中村･外垣外遺跡からは宮川を挟んで北側に位置し、宮川沿いの沖積地に立地する。この調査により縄文時代早




第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

期・前期・中期・後期・晩期・弥生時代・古墳時代前期・平安時代・中世・近世・近代の遺構と遺物が検出されている。遺跡の主体となる時期は縄文時代後期後半から晩期と中世ということになろう。

**勝山（183）** この遺跡は中村遺跡等とは火燈山（ひとぼし）を挟んで東側に位置する遺跡で、宮川の段丘上の斜面に位置する。『諏訪史蹟要項　十六　茅野市宮川篇』に記載されているが、詳細は不明である。『茅野市史　上巻　原始・古代』によると戦時中は開墾されて一時は畑となり、多くの遺物が出土したらしい。縄文中期後半の土器が出土したとの記述がある。その後、平成５年度にゴルフ練習場造成のために発掘調査が行われた。この調査では、縄文時代の住居址が83軒、平安時代の住居址13軒を検出している。縄文時代は中期初頭からの遺物が見られるが、主体は中期後半と後期前半となろう。縄文時代でも明確に時期がわかる住居址は少ないが、新道式期から井戸尻式期にいたるまでの中期中葉の住居址が２軒、曽利Ⅰ～Ⅴ式期までの住居址が23軒と多く、中期後半の集落といえるだろう。特に曽利Ⅱ式期の住居址が８軒と多い。更に、後期前半が13軒と多く検出されている。平安時代の時期は10世紀前半・後半と11世紀前半で、蟹畑遺跡の時期と重なる時期がある。




第2図　中村・外垣外・蟹畑遺跡位置図（1/2,000）

# 第Ⅲ章　遺跡の層序

## 第１節　中村・外垣外遺跡の基本層序（第３・17図）

試掘調査時には、９ヶ所に試掘グリッドを設定した。第３図では５つのグリッドの状況を取り上げる。中村・外垣外遺跡は、宮川の河原で形成する沖積地に位置している。発掘調査以前は、水田を中心とする農地であり、平坦な地形であった。

層序１は、Ⅸ層が宮川の河原によって形成されたと思われる地山の礫層であると考えられ、北西方向に遺構が落ち込んでいることがわかる。実際調査区内で表土剥ぎを行うと、グリッドU～Y－７～11は、礫層であった。Ⅲから Ⅷ層までは、砂層で一部粘土が入る状況で、宮川河原に、後世にⅠ・Ⅱ層の盛り土を行い、農地にしていたことがわかる。

層序２は、Ⅳ層が遺物包含層と考えられ、層序１のように地山に礫層は見られなかった。３層は、包含層形成後、河道になったか、洪水によるものかは不明であるが、礫層が形成され、その後盛り土を行い、農地にしたものと思われる。

層序４はⅢ・Ⅳ層は、耕作土を剥ぐと、すぐ砂礫層になっており、遺物包含層は確認できなかった。

層序３・５は、遺物包含層は確認できなかった。層序４はⅣ層に地山の砂礫層が見られ、層序５は１層に多量の礫が包含されていた。

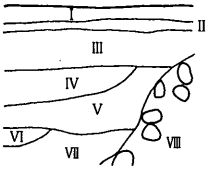
また、２号住居址の土層観察（第17図）をみると、耕作土は30㎝位で非常に薄く、Ⅳ層以下には礫層がみられない。礫が見られるのは、地表110㎝下の住居址床面である。

中村・外垣外遺跡は、遺跡の北西側と南東側、東側が礫層になっており、遺構の確認できた中央部は、二次堆積ロームが形成されており、宮川などの河道の中に、中島として取り残されていた場所と考えられる。河道と思われる場所から、打製石斧や土師器坏が検出されるなど、砂礫層の形成は、非常に古いと思われる。中村遺跡と外垣外遺跡のちょうど境界と思われる辺りは、層序５のように上部が礫層で、下部が暗褐色土層になっていて、北東方向へ傾斜が下がっているせいか、段々と深くなっていく。表土剥ぎを行った結果、非常に複雑な地形であることが判明した。

## 第２節　蟹畑遺跡の基本層序（第３図）

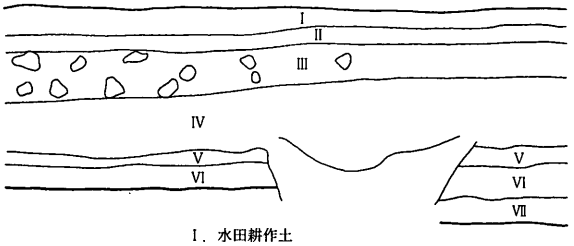
蟹畑遺跡は、中村・外垣外遺跡とは異なり、守屋山系から伸びる火燈山の山裾に位置している。層序６でわかるとおり、耕作土は５㎝から40㎝と非常に浅い。地形は、南側から北側に向かって下がっている。尾根状台地の先端部分は非常に浅く、一部ロームが見えていた。西側は麻浸川で形成された谷へ向かって落ちている。表土剥ぎ以前は平坦であったが、表土剥ぎを行ってみると、東側に谷が入り込んでおり、遺跡が立地していた場所が非常に細い尾根であったことがわかる。谷の南側グリッドe・f－11～13付近は、上部の山より崩落したと思われる礫によって埋没していた。この上部から縄文時代の遺物が見つかっているため、山の崩落も縄文時代以前に起こったと考えられる。

層序1



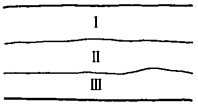

Ⅰ．水田耕作土
Ⅱ．水田床土
Ⅲ．10YR2/2、小砂若干含む
Ⅳ．10YR2/3、砂粒子(河砂)含む
Ⅴ．10YR2/2、粘性土
Ⅵ．10YR2/2、砂質土層
Ⅶ．10YR2/3、泥状
Ⅷ．10YR1.7/1、礫中に花崗岩含む

層序2



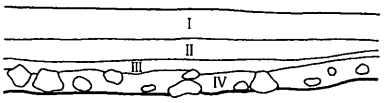

Ⅰ．水田耕作土
Ⅱ．水田床土
Ⅲ．10YR1.7/1、礫を多く含む
Ⅳ．10YR2/2、遺物若干含む
Ⅴ．10YR2/3
Ⅵ．10YR3/4、砂状
Ⅶ．10YR5/6、砂状、地山

層序3



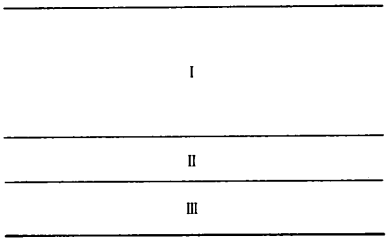

Ⅰ．水田耕作土
Ⅱ．水田床土
Ⅲ．10YR2/2、炭化物含む
　下部に鉄分沈殿

層序4

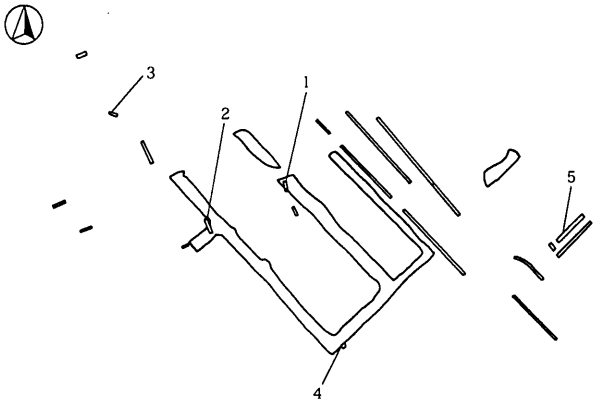



Ⅰ．水田耕作土
Ⅱ．水田床土、鉄分沈殿
Ⅲ．10YR2/2、河床礫層、礫多数、河砂含む
Ⅳ．地山、礫、砂利

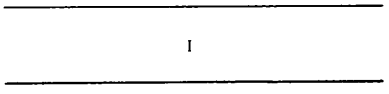
層序5



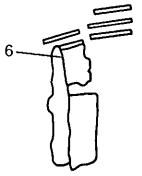

Ⅰ．耕作土、礫を多く含む
Ⅱ．10YR2/3
Ⅲ．10YR3/3



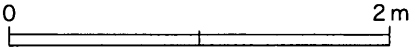

層序6




Ⅰ．耕作土




試掘トレンチの位置




第3図　遺跡の層序（1/40）

# 第Ⅳ章　中村遺跡

中村遺跡は、平成12年度に発掘調査を行った。発掘調査を行った結果、縄文時代の土坑６基、焼土址１、平安時代の住居址２軒、中世以降の掘立柱建物址７軒、他に柱穴と思われる土坑75基、土坑59基、近世の土坑が１基検出された。平成14年度に国道20号線バイパス工事に先立ち、試掘調査を行った結果、中村遺跡は外垣外遺跡と一体の遺跡であることが判明した。

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構

土坑についての詳細な記述は、表１に掲載してある。ここでは、縄文時代の遺構の一部を取り上げる。縄文時代と考えられる遺構は土坑６基と焼土址１である。このうち遺構からの遺物の出土は土坑３基と焼土址１であり、遺物の検出のない遺構は、遺構の形状と土層により判断した。また、遺構は確認できなかったが、縄文時代の遺物が集中して出土する場所があり、かつて遺構があったと思われるので、このような遺構も取り上げた。

**６号土坑**（第８図）

グリッドＲ－３・４に位置する。平面形は円形で、断面形は巾着形である。土層は３層に分かれているが埋め戻した痕か。上端長軸は132cm・上端短軸126cm・下端長軸108cm・下端短軸104cm・深さ52cmの比較的大きい土坑である。遺物の出土はなかったが、土層がいずれも堅緻であることから、縄文時代の土坑であると判断した。

**９号土坑**（第10図・図版４－２）

グリッドＱ－５に位置する。平面形は楕円形で、断面形は湾曲して上部に開く樽形で、土層は単一層である。上端長軸136cm・上端短軸116cm・下端長軸132cm・下端短軸104cmと大きい土坑だが、深さは10cmと非常に浅くなっている。14号土坑と重複している。出土遺物には打製石斧２本がある。

**10号土坑**（第10図・図版４－３）

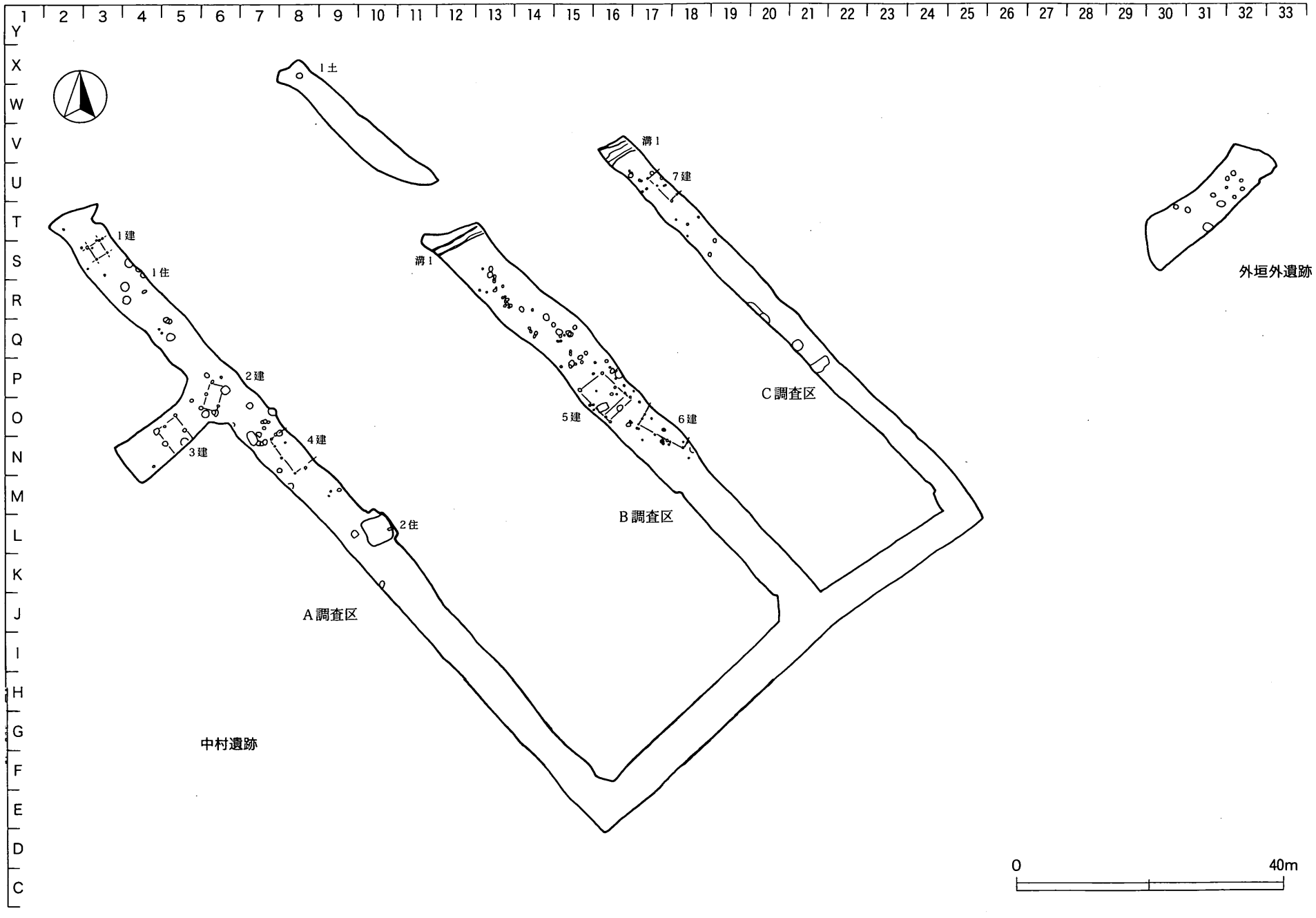
グリッドＱ・Ｒ－４・５に位置する。３つの土坑が重なり合った形で検出された。a・bは同じ遺構と考えられ、cはa・bと切りあっていると思われる。a・bは合わせると平面形が隅丸長方形になる。規模は上端長軸が90cm、上端短軸が69cmである。下端はa・bと分かれ、段差が付いている。a・bともに礫が入っており、aは細かい礫が固まって入っていたが、bは15cm大の礫を中心として、比較的大きい礫が入っていた。cは平面形が円形で、断面形が盥状である。規模はわかる範囲で78cmの直径であり、深さは18cmとしっかりしている。土坑中の土が堅緻であったことと、中世以降と思われる柱穴とは規模が異なっていたため、縄文時代の遺構とした。

**30号土坑**（第13図・図版４－６）

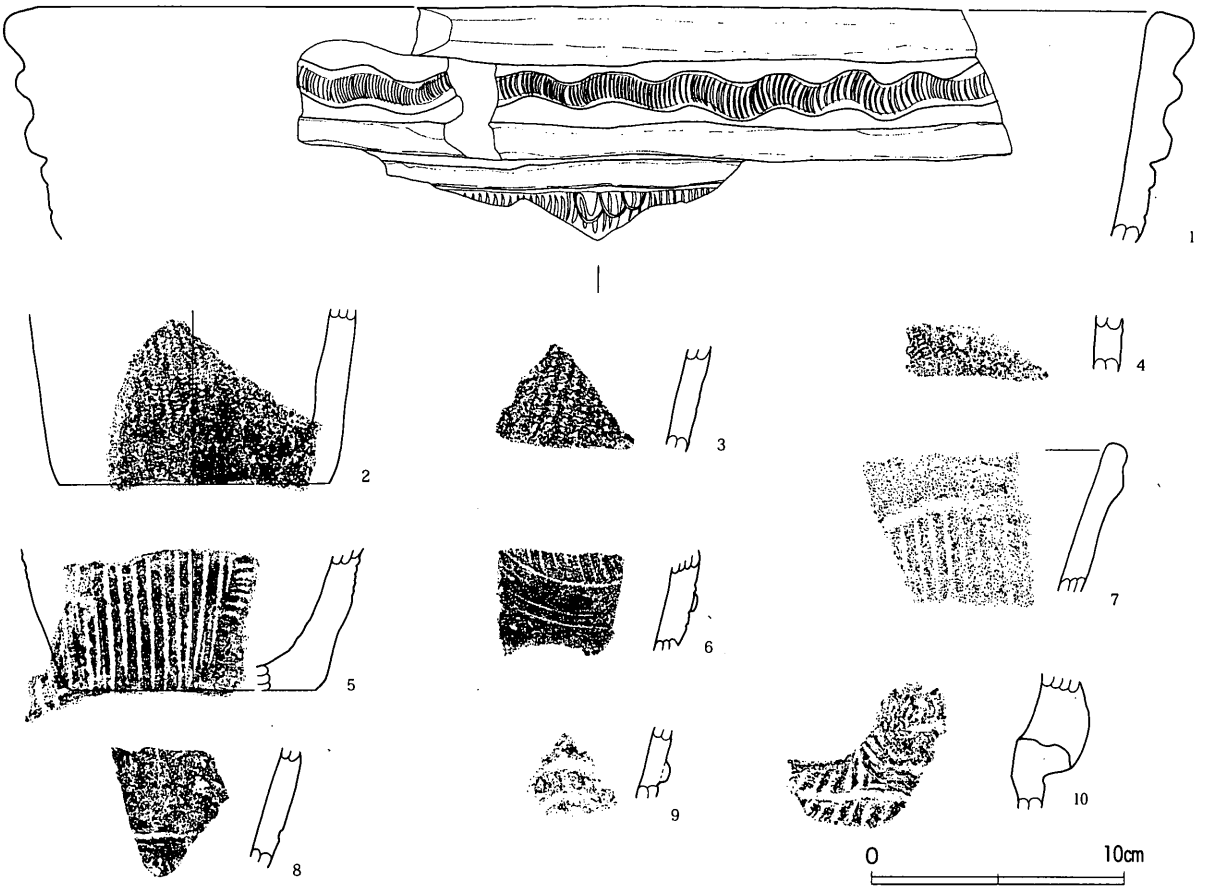
グリッド０－７に位置する。一部が調査区外に出ているため、掘り切ることは出来なかった。平面形はおそらく円形と思われ、断面形は樽形である。土層は１層である。わかっている範囲では、直径148cm、深さ23cmの比較的大きい土坑である。遺物の出土はなかったが、土層が堅緻であることから、縄文時代の土坑であると判断した。

**85号土坑**（第22図・図版４－７・８）

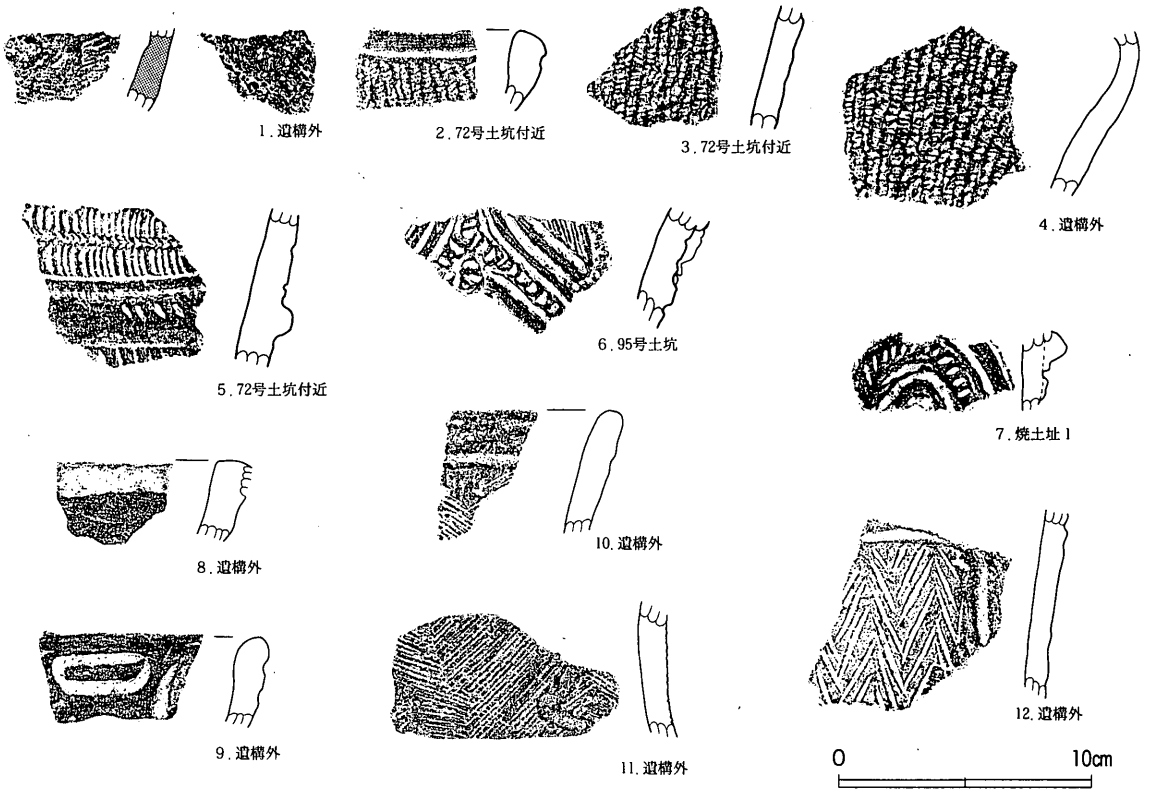
グリッド０・Ｐ－15に位置する。平面形、断面形とも不整形な土坑で、上端長軸129cm・上端短軸100cm・



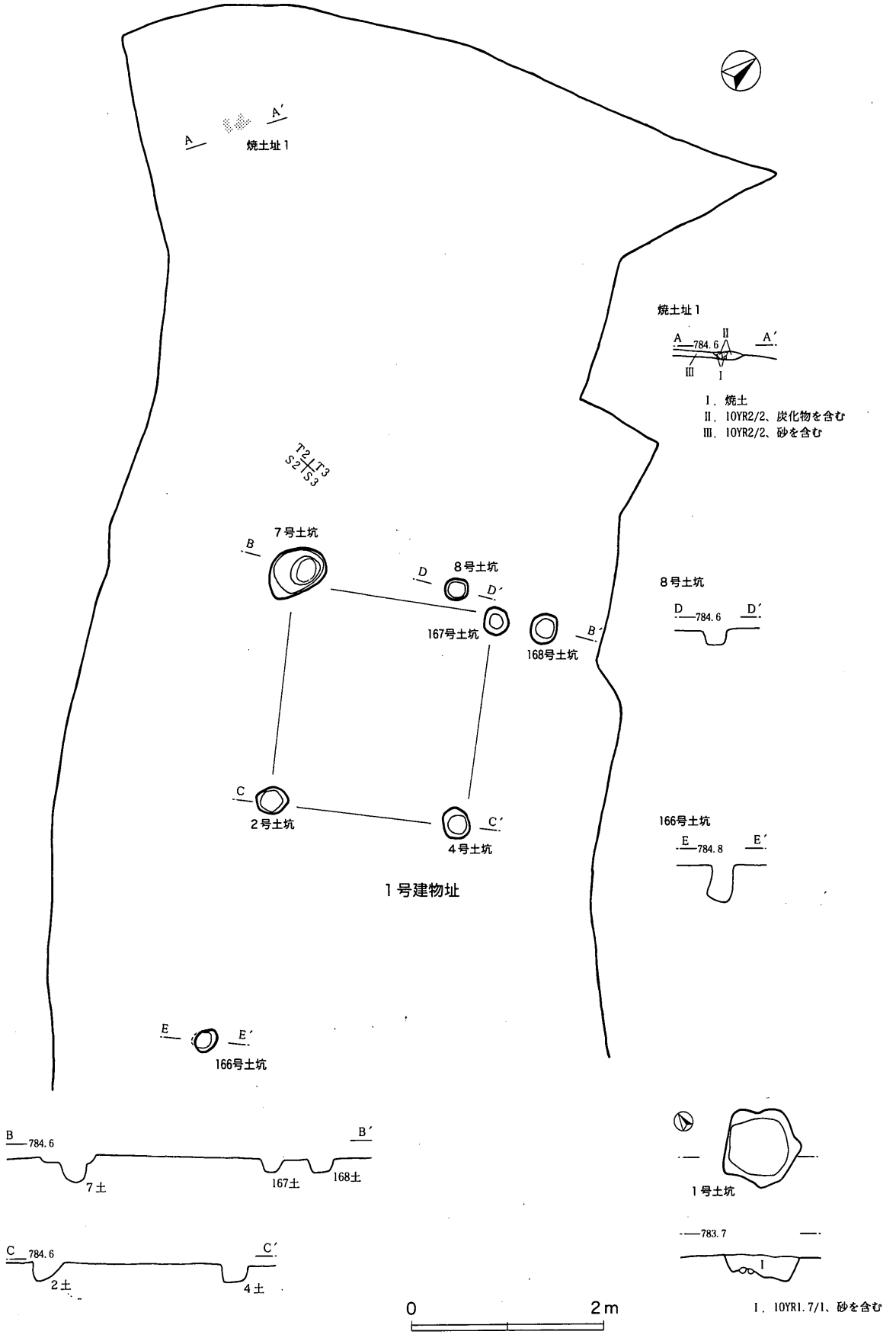

第4図　中村・外垣外・蟹畑遺跡全体図（1/800）



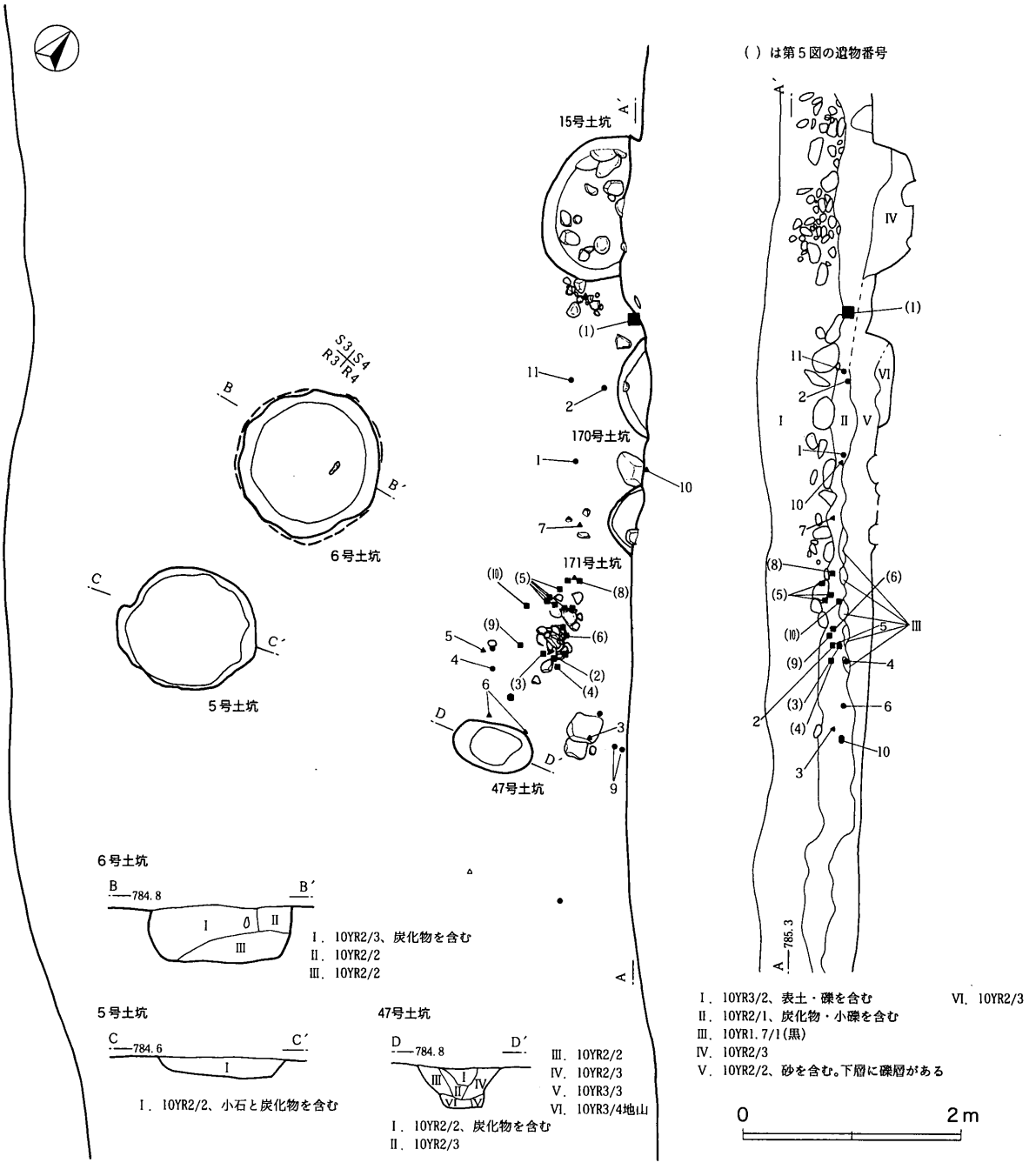

第５図　１号住居址付近縄文時代出土遺物（1/3）



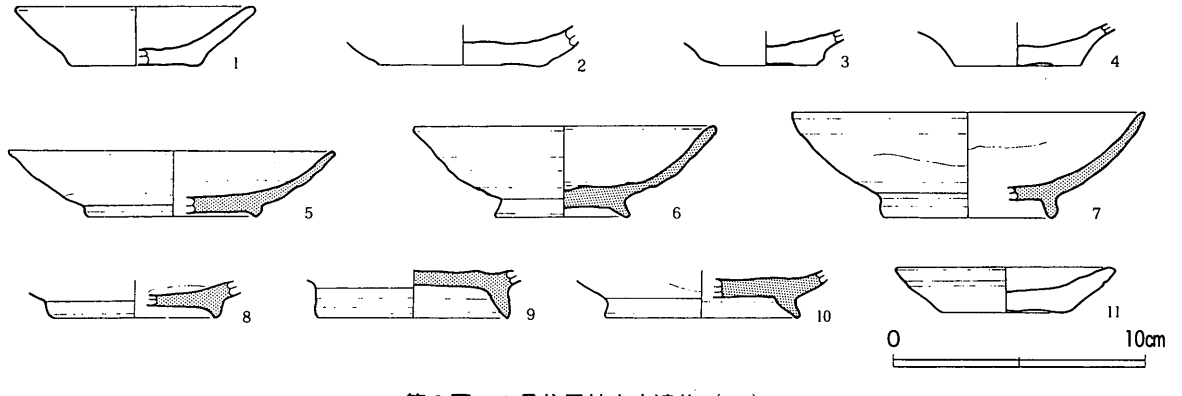

第６図　土坑・遺構外縄文時代出土遺物（1/3）



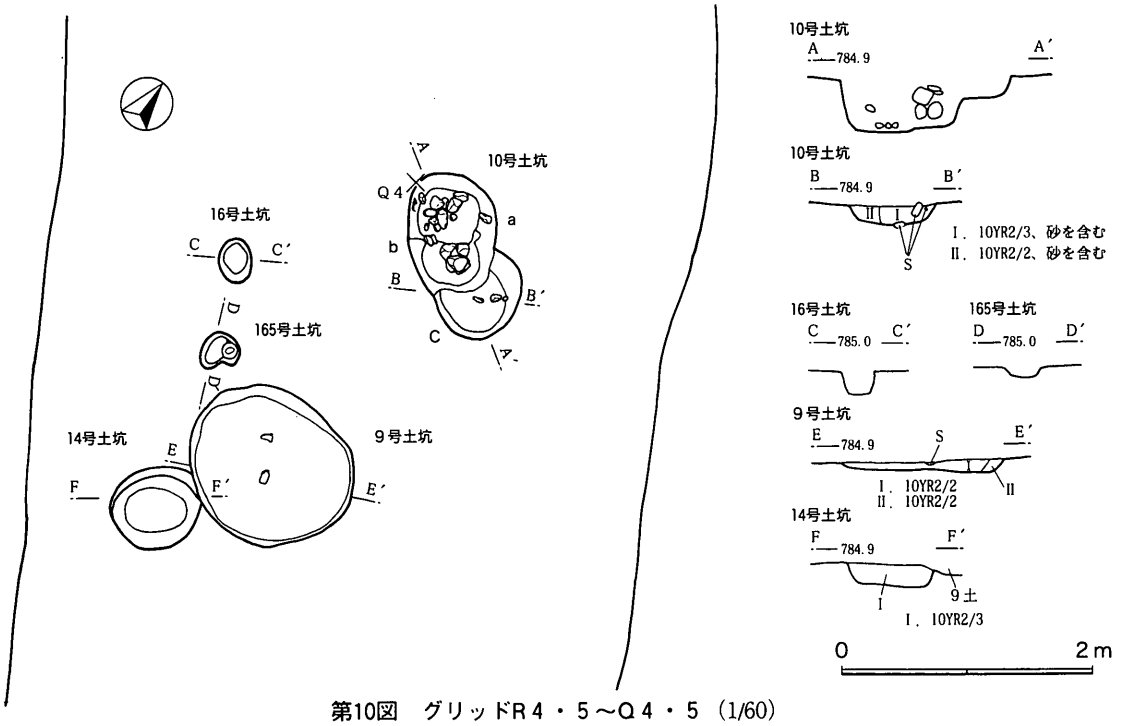

第7図　グリッド・T2・3～S2・3、1号建物址ほか（1/60）



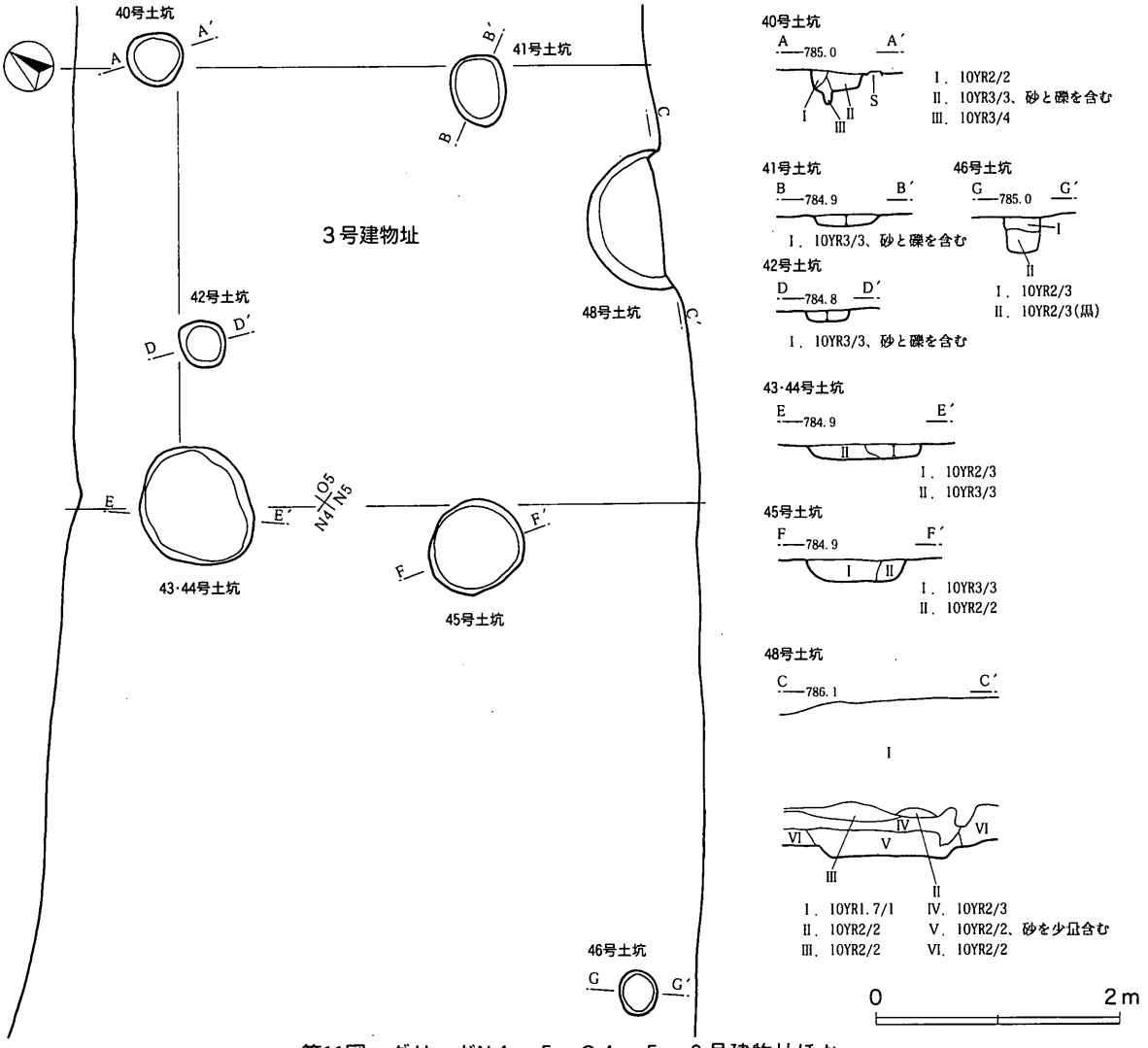

第8図　グリッドS3・4～R3・4、1号住居址ほか（1/60）



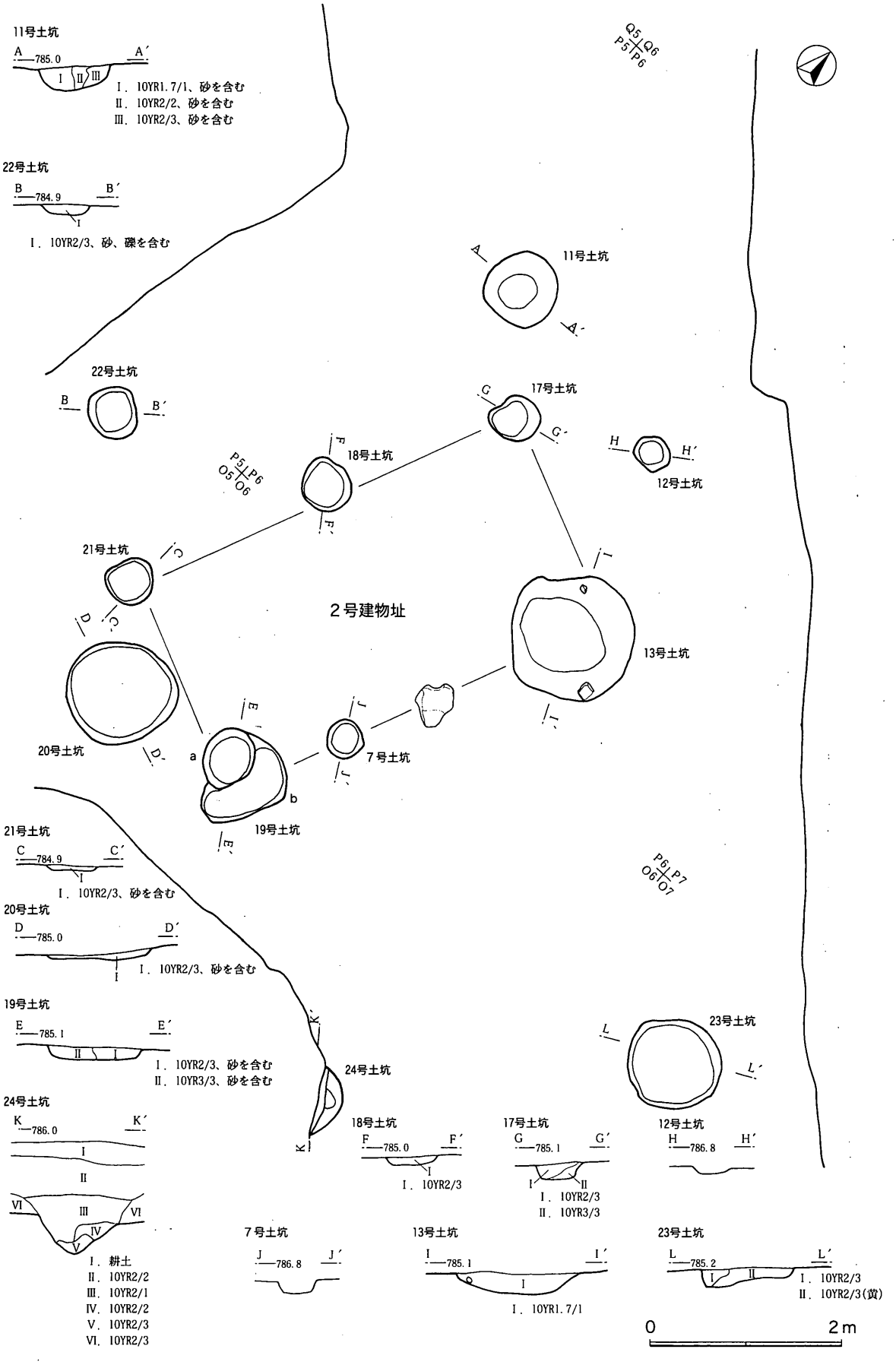

第9図　1号住居址出土遺物（1/3）



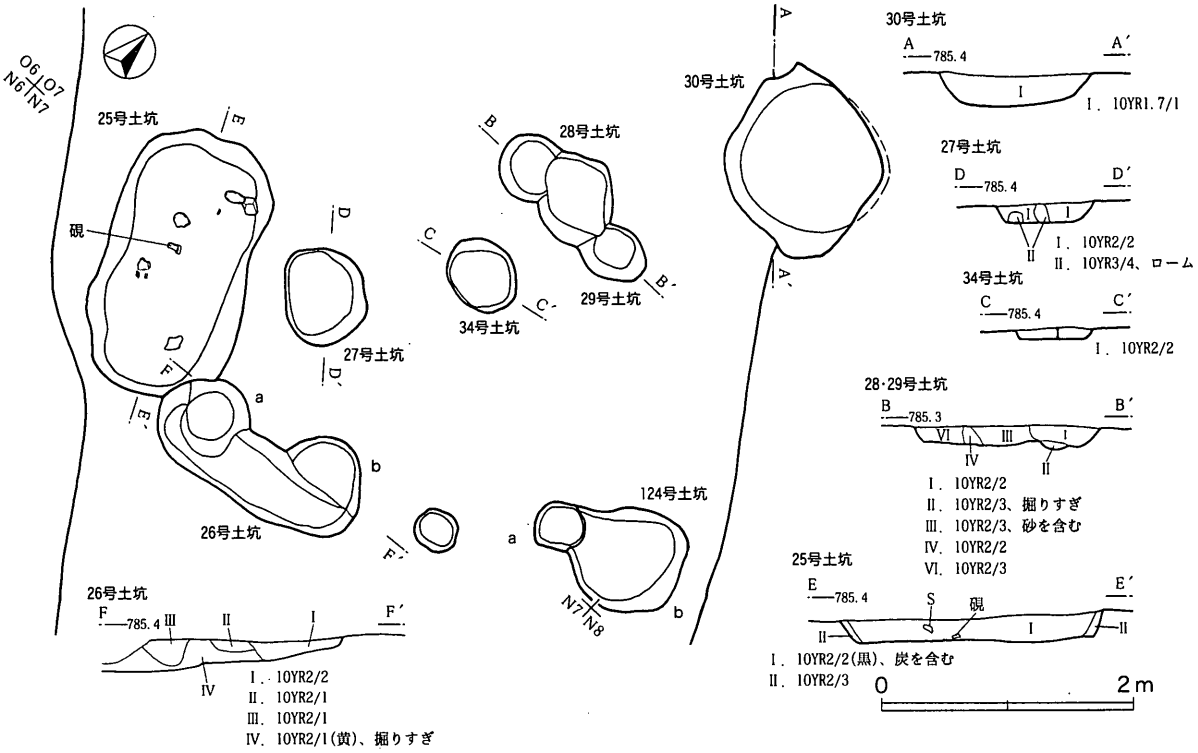

第10図　グリッドR4・5～Q4・5（1/60）



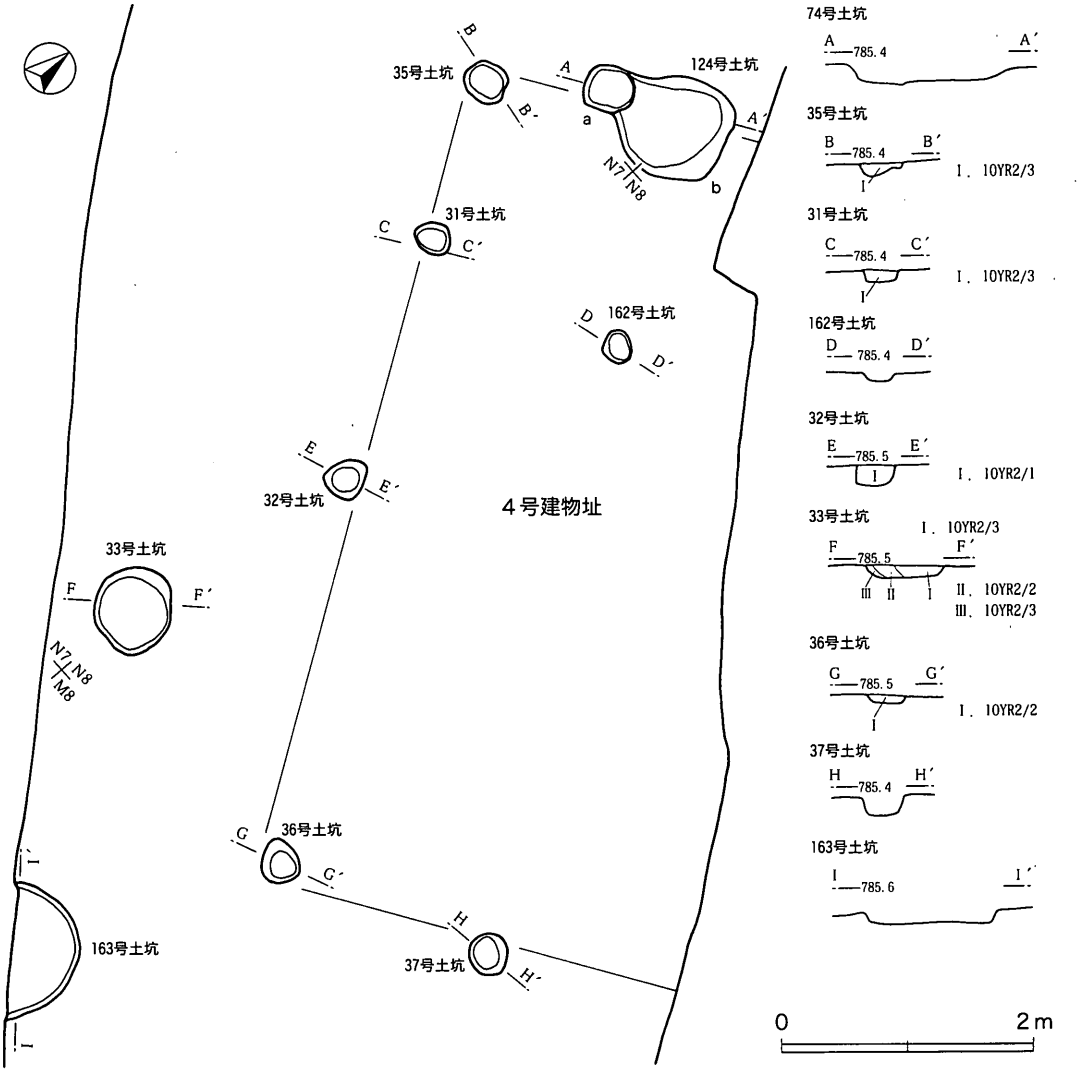

第11図　グリッドN4・5～O4・5、3号建物址ほか



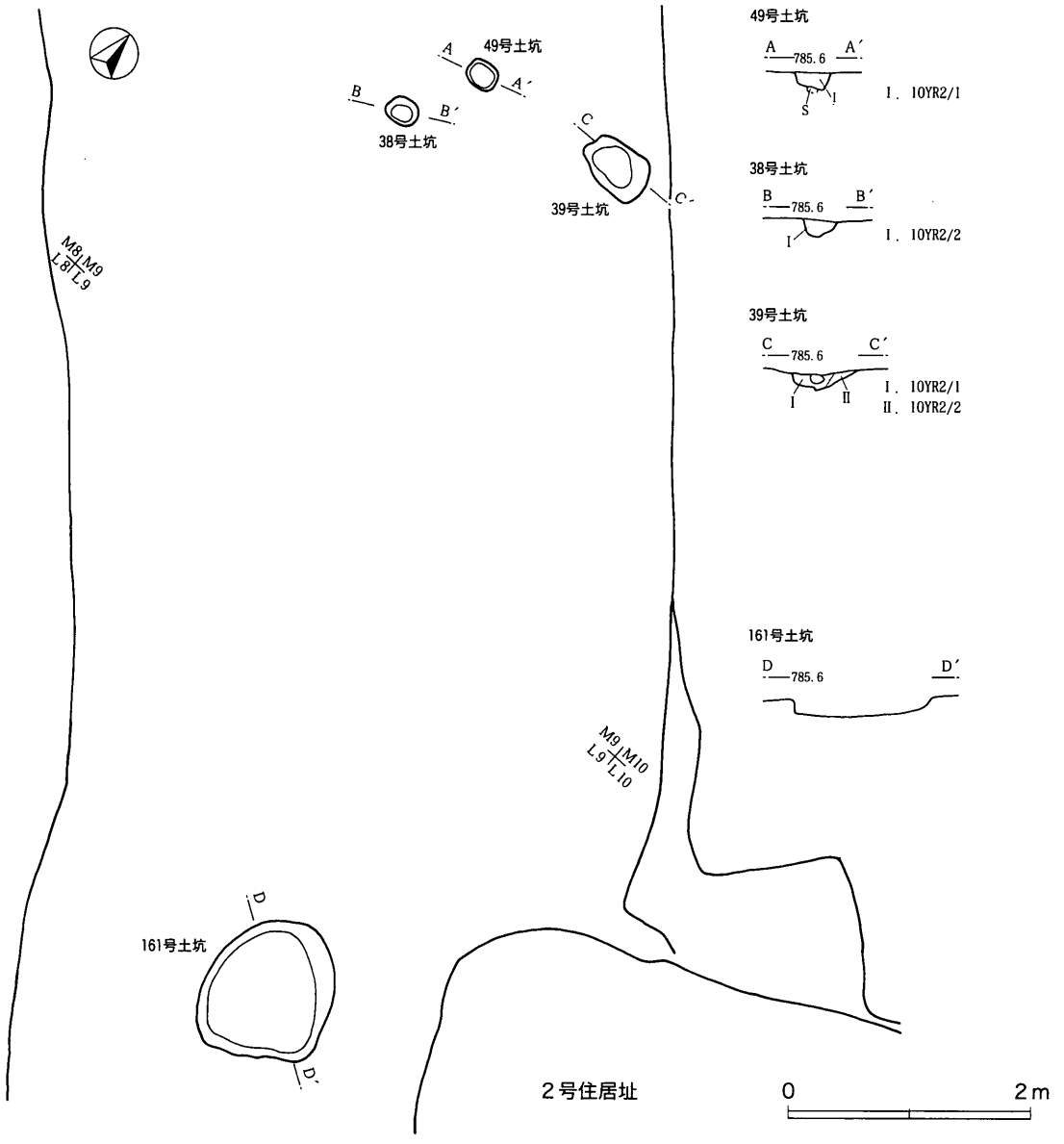

第12図　グリッドO5・6・7～P5・6・7、2号建物址ほか（1/60）



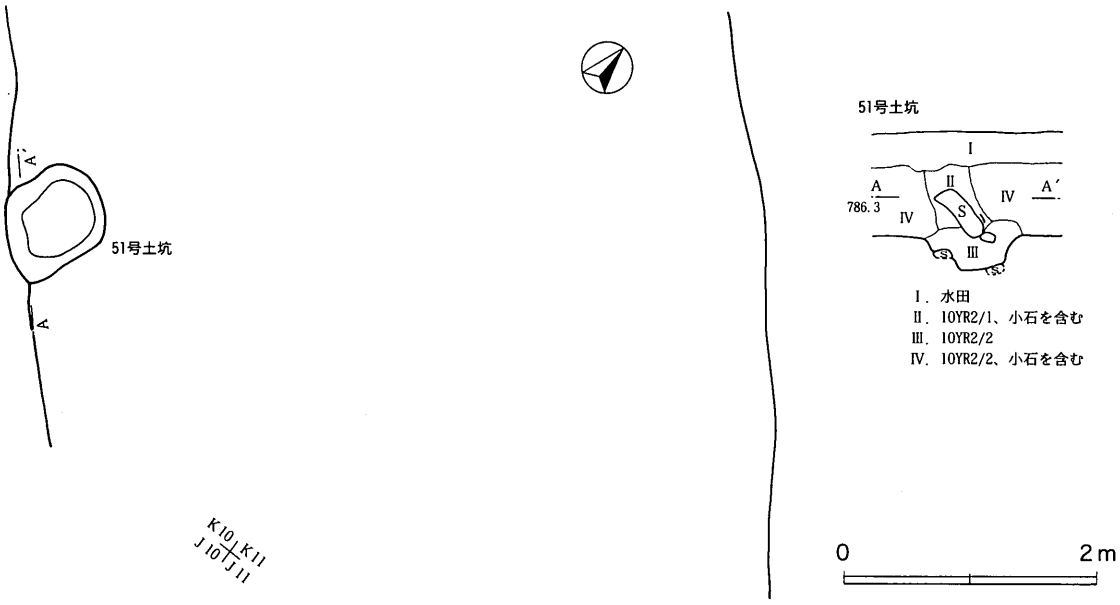

第13図　グリッドN7・8～O7・8、25号土坑ほか（1/60）




第14図　グリッドM8～O7・8、4号建物址ほか（1/60）




第15図　L８・９・10～M８・９・10、２号住居址ほか（1/60）




第16図　グリッドK10、51号土坑（1/60）

下端長軸120cm・下端短軸90cm規模はと大きいが、深さは11cmと非常に浅い。土坑中央部には、不整形な土坑があり、同じ遺構と思われる。遺構内部から縄文時代中期中葉の土器１片と黒耀石塊が出土している。

**124号土坑**（第14図）

グリッド０－７に位置する。４号建物址に付属すると思われる74号土坑と重複している。平面形は隅丸方形で、上端長軸80cm・下端長軸60cmの規模を持ち、断面形は皿状で、深さは13cmと浅い。遺構内部より、縄文時代の絡条体の土器１片が出土している。

**焼土址１**（第６・７図・図版４－１）

グリッドＴ－２に位置する。大きさは20cmほどで、焼土厚みは９cmと非常に小規模である。遺物は縄文時代中期中葉の土器１点（第６図７）が出土している。

**１号住居址・169号付近**（第５・８図・図版２－５）

グリッドＳ－４に位置する。１号住居址の土層中、１層と２層と間から藤内式期の一括土器が出土しているところから、縄文時代の遺構が重複していたことが考えられる。

**１号住居址・47号土坑付近**（第５・８図・図版２－４）

グリッドＲ－４に位置する。１号住居址の南東側、47号土坑付近から、多くの縄文時代藤内式期の遺物が出土した。これらは、１号住居址の土層、２層中の南側を中心に縄文時代の土器と黒耀石が検出されている。出土した遺物は、第５図の２～６・８・９である。付近からは平安時代の遺物も多く出土しているため、平安時代に遺構が破壊されたものと思われる。

**2. 縄文時代の遺物**

今回の調査により得られた土器片は、50点、総重量にして5,403gを測り、復原された土器はない。その内の22点を図示した。

縄文土器の時期は縄文前期初頭の含繊維縄文施文土器、中期前葉藤内式期、中期後葉曽利Ⅳ式期の土器が得られているが、前期初頭の土器は希薄で、中期前葉藤内式期の土器が主体となる。

**縄文土器の出土状態と土器群の構成**　中期前葉藤内式期の土器は１号住居址覆土上層より27点が検出されている。この資料は覆土Ⅱ層内を中心に、ある程度まとまった部分に集中し出土する傾向が看取れ、遺構の存在も考えられたが、それを明確に把握することはできなかった。

この割合出土範囲が集中する土器を第５図に示したが、１・２・５以外は器形が窺えない土器片である。器形が判明した土器片からみると全て深鉢型を呈する。１は底部から口縁に向かい直線的に開く寸胴の大形深鉢である。口唇が肥厚し１条の隆帯が、口縁部下段には２条の平行隆帯が巡り口縁部を横位に区画する。区画内には連続爪形文が施文される蛇行隆帯が横位構成で配される。下段隆帯脇には連続爪形文が施文される。これらの文様帯から推測すると、下段には重帯文構成の区画と下半部は縄文施文となるか。２～４は縄文施文がなされる一群で、全て深鉢胴部下半部の破片である。５は垂下沈線等で区画された区画内を沈線で充填する。６は弧状構成の隆帯区画内に平行沈線を充填。10は器壁が中薄手で特徴的な傾向を示す。施文は緩やかに横位蛇行する貼付隆帯が特徴的で、不鮮明ながら刻みが施される。

第６図１～12は調査区全域から得られた縄文土器の全てである。時代的には大きく三つのブロックに分けられ、縄文前期初頭、中期中葉、中期後葉の土器より構成されている。１は胎土中に割合多量の繊維を含有する脆弱な土器で、不鮮明ながら縄文が施文されている。２～７は中期中葉に帰属し、２～４は条が縦位の縄文施文となる。５～７は刻みを持つ隆帯により区画がなされ、隆帯脇は半割竹管状工具による半隆線でなぞられる。２～７は施文の状況から藤内Ⅱ式期から井戸尻Ⅰ式期に帰属しよう。９～12は中期後葉に帰属す

る。9は口縁部下に先端が丸味を持つ棒状工具による浅い沈線で、長方形区画を窓状に配している。10・12は胎土や焼成、施文から同一個体かと思われる。口縁部下に浅い沈線が1条巡り、沈線以下は櫛状工具による条線が羽状構成に施文され、羽状構成間を浅い蛇行沈線が垂下する。文様構成より曽利Ⅳ式期に帰属しよう。11は体部に棒状工具による沈線により∩形の区画を構成し、区画内にはヘラ状工具による綾杉状構成の沈線が充填される。充填沈線が規則的な綾杉文状となり、単なるハ字状に沈線を雑に施文していない点などを加味すると曽利Ⅳ式期新段階に帰属させることができよう。なお、綾杉文状の沈線はその施文具や文様構成から、所謂唐草文系の地文構成を踏襲しているものと考えることができよう。

**中村遺跡の縄文時代の特徴**　中村遺跡から今回の調査に於いて縄文前期初頭、中期前葉藤内Ⅱ式期前後、中期後葉曽利Ⅳ式期の資料が得られている。中村遺跡は宮川・麻浸川の形成する沖積地に立地する。市域に於いて近年沖積地の開発に伴い多くの調査が行われ、少量ではあるが沖積地に於ける縄文時代の様相の一部を垣間見ることができるようになってきた。縄文前期初頭では、中村遺跡と宮川を隔てて指呼の距離にある御社宮司遺跡でも含繊維縄文施文土器群が出土し、やや段丘は上がるものの大歳神社遺跡でも同期の資料が得られている。沖積地に於ける中期前葉の様相は判然とはしないが、中期後葉では曽利Ⅲ・Ⅳ式期の集落が阿弥陀堂遺跡に展開し、竪穴住居址等の明瞭な遺構は検出されていないものの、中村遺跡の在り方もこのような動向上に位置し、沖積地に展開する何らかの起因があったものと想像できる。なお、中期前葉は近隣に立地する山の神遺跡などとの関連性も考慮すべきであろう。

## 第2節　平安時代の遺構と遺物

### 1. 住居址

平成12年度の調査で検出された平安時代の遺構は、2軒検出した。1号住居址は不明瞭であったが、2号住居址はプランが確認できた。

**1号住居址**（第8・9図・図版2－4・5）

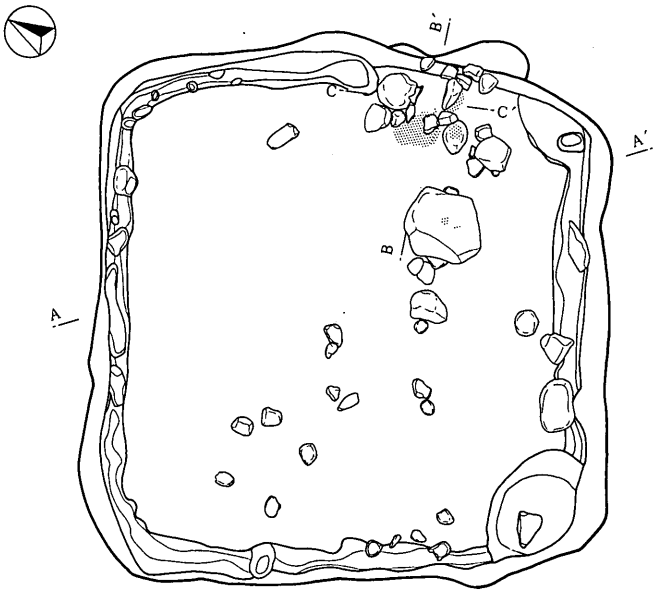
**遺構の構造**　グリッドS－4に位置する。住居址の一部分を発掘したと思われ、遺構の形状は不明であった。Ⅰ層は近年の盛り土と考えられ、礫を多く含んでいた。遺物はⅡ層とⅤ層より検出されている。Ⅱ層中の南側を中心に縄文時代の土器と黒耀石が、169号土坑上部のⅠ層とⅡ層と間から藤内Ⅰ式期の一括土器が出土しているところから、所々に縄文時代の遺構が重複していたことが考えられる。平安時代の遺物はⅡ層内に散布しており、また、15号土坑内から出土しているため、1号住居址はⅡ層内にあり、これに付属する土坑が15号土坑であったと考えられる。この場所は黒色土が深く、遺構のプランは不明である。

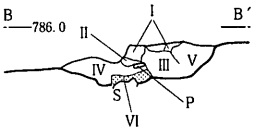
**遺物の検出状況**　土師器の破片は14点検出され、そのうちは図示できたのが4個体である。器種は、ほぼ完形が1個体、口縁部が1点、底部2点である。灰釉陶器の破片は13片検出されており、そのうち図示できたのは6点である。器種は皿1個体・椀3個体・椀底部5個体・瓶1個体である。他には須恵器甕破片1点、土師質土器2個体分がある。11は土師質土器だが、時期が異なると考えられるため、後世に混入した物と思われる。

**遺構の時期**　出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

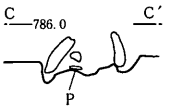
**2号住居址**（第17・18図・図版2－6・7）

**遺構の構造**　グリッドL－10に位置する。長軸428cm・短軸406cmのほぼ隅丸方形の平面形で、軸線方向はN－29°－Eを示す。住居址東側の中央部とカマド付近が若干張り出している。住居址壁面は掘り方が非常にしっかりとしており、土層観察によると遺構の掘り込みが確認できるのは地表面から28cmからである。ここ

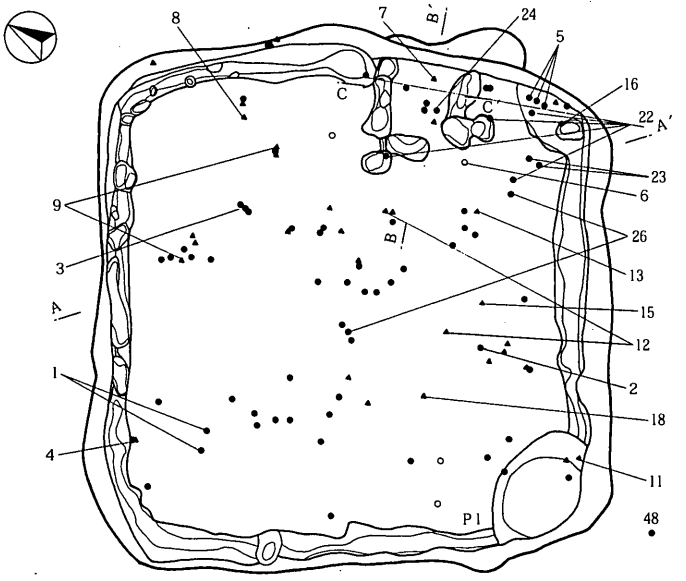


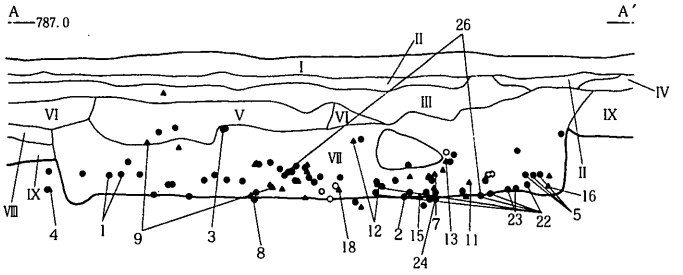




I．10YR2/2、焼土粒子、粘土粒子、炭化物含む
II．10YR2/2、焼土粒子、粘土粒子含む
III．10YR2/1、焼土粒子、粘土粒子、炭化物含む
IV．10YR2/1、焼土粒子、炭化物含む
V．10YR2/1、焼土粒子、炭化物含む
VI．焼土

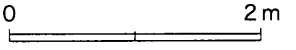



遺物出土状況

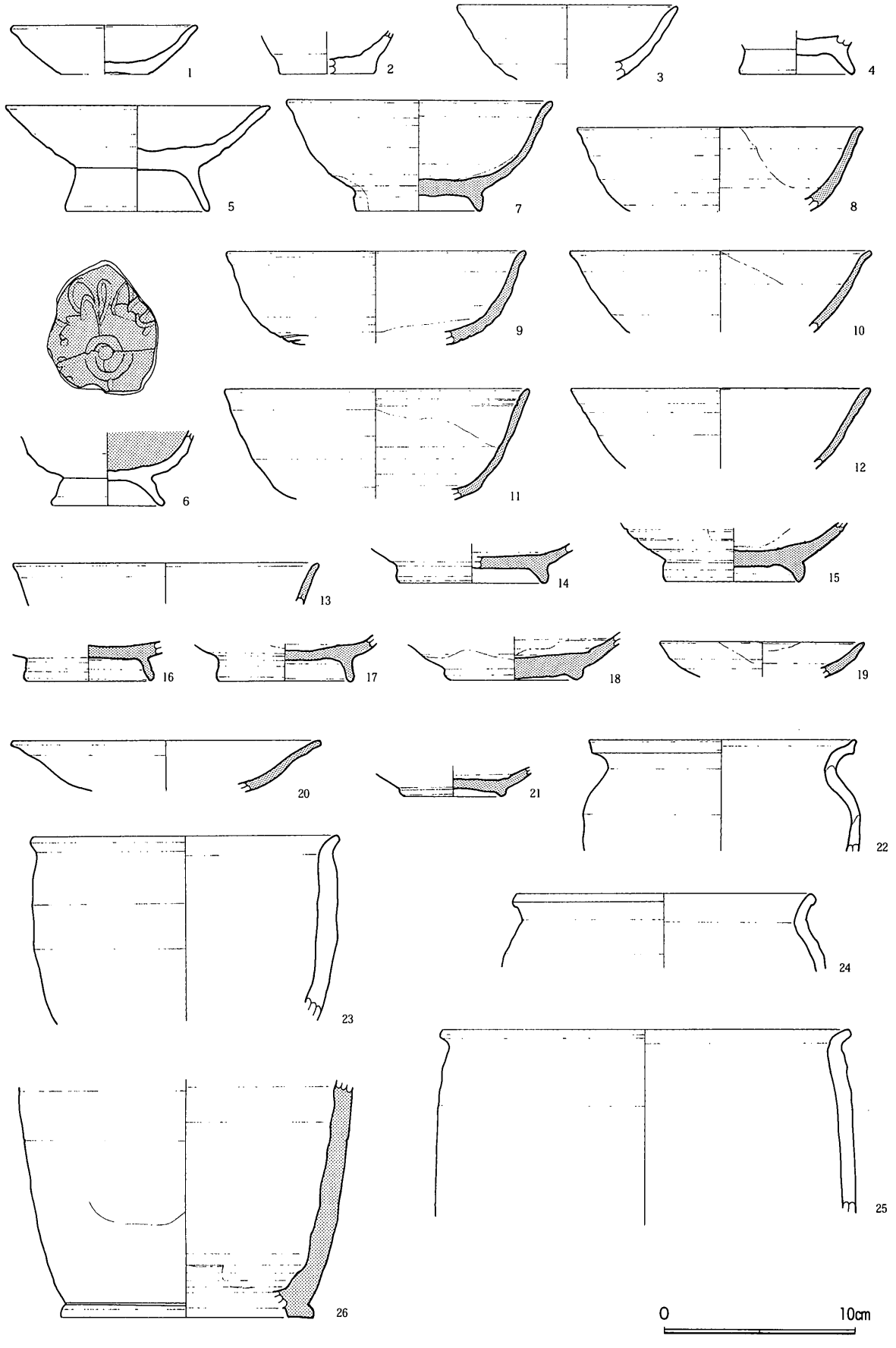



I．表土・水田
II．水田床土
III．10YR2/3、赤色粒子(小)含む
IV．10YR2/2、赤色粒子(中)含む
V．10YR1.7/1、石(15cm以下)含む
VI．10YR1.7/1
VII．10YR2/2、炭化物(小)、小石(5cm以下)含む
VIII．10YR2/1
IX．10YR2/2




第17図　2号住居址（1/60）




第18図　2号住居址出土遺物（1/3）

から住居址床面まで80cmの深さがある。確認面からの壁面は、北西側24cm・南東側48cmを測る。また、周溝がカマドを除く場所から検出されている。北西側12cm・南東側６cmの深さを測る。住居址内出土の土坑は少なく、明確にわかるものはＰ１のみである。Ｐ１は長軸104cm・短軸64cm・深さ10cmの土坑で、住居址南隅に位置する。土坑中心部より28cm大の石が検出されている。住居址内部には石が多く入り、64cm大の大きな石がカマドの前方で出土している。カマドは住居址の東側壁やや南寄りから検出されている。石組粘土カマドであるが袖石の一部が残っているのみで、カマド完掘後に検出された袖石の掘り方通りに残っているのは右奥の一枚だけであった。カマド上部にあったと思われる石は付近からは発見できなかった。カマド内部より焼土址が40cmの範囲で検出され、焼土の厚みは９cmであった。煙道は明確ではなかったが、カマド後部に張り出しが見え、煙道に関わる遺構と考えられる。カマドの軸線方向はＮ－14°－Ｅで、若干住居址の内側を向いている。

**遺物の検出状況**　出土した遺物は土師器坏半完形１・坏口縁部15・底部２・胴部18、高台付坏口縁部１・底部３、擬似高台１、器種不明底部１、土師質土器１、土師器甕胴部12・底部１、羽釜２、関西系鍋１、黒色土器坏口縁部２・胴部１、高台付坏口縁部１、須恵器瓶頸部１、灰釉陶器皿口縁部２・底部２・胴部１、椀完形１・口縁部19・底部５・胴部10・壺１・瓶１である。そのうち図示できたのは27点である。以上の土器を供膳具・煮沸具・貯蔵具の３つに分けると、供膳具が最も多い。供膳具のうち黒色土器が少なく、灰釉陶器と土師器がほぼ同比率で、他の住居址に比べて灰釉陶器の比率が高いといえる。

土師器は、ほとんど坏で、高台付坏は非常に少ない。黒色土器は前述の通り数が少ないが、１点、７の特殊な高台付坏が出土している。胎土は薄く小振りで、内面のみ黒色となっており、内面に複雑な暗文が施されている。灰釉陶器は、ほとんど椀であり、皿の比率が少ない。煮沸具には、土師器甕と羽釜、鍋がある。甕の中でやや大型と思われるのは25のみで、小型甕の比率が多い。１点、22の白色胎土の関西系と思われる小型の鍋が出土している。この鍋は、体部篦削りである。外面にタールが付着し、使用されていたことがわかる。底部は欠けていて確認できなかった。貯蔵具は下部のみであるが、26の灰釉陶器の瓶が出土している。

**遺構の時期**　出土遺物から、11世紀前葉と考えられる。

### 2. 土　坑

平安時代の土坑は、遺物が出土している事から判断した。

**15号土坑**（第８・28図）

グリッドＳ－４に位置する。１号住居址の遺物包含層下にあるため、１号住居址の一部とも考えられる。遺構の半分が調査区外にあるため、遺構の規模は不明であるが、土坑断面は樽状で、上端126cm・下端108cm・深さ42cmである。出土遺物は、土師器坏口縁部２・底部２・灰釉陶器１点出土している。そのうち土師器１点を図示した（第28図１）。

**51号土坑**（第16・28図）

グリッドＫ－10に位置する。土坑の半分は調査区外で、全体の規模は不明である。この土坑は、Ⅰ層中のすぐ下に、Ⅱ層の掘り込みが見えるところから、81cmの深さがあったことがわかる。Ⅱ層の下部に、45cm大の石が縦位置に入り込んでいた。この石の付近から、第28図５の柱状高台の土師器が検出されている。底部が柱状に残り、体部が丸い形状が特徴である。

**86号土坑**（第22・28図）

グリッドＰ－16に位置する。平面形は楕円形で、断面形は不整形である。上端長軸86cm・短軸72cm、下端長軸51cm・短軸27cm、深さ20cm、長軸方向はＮ－50°－Ｅである。この土坑より、灰釉陶器瓶の破片（第28図

6）と椀が出土している。

**3. 遺構外の平安時代の遺物**（第28図）

平安時代の遺物は、住居址や土坑以外でも検出されている。土師器は、底部に糸切り痕が残る、簡略的な製作方向をとっている。そのほか、8のように小皿になるもの、3や9のようにやや柱状高台の小皿、5のように柱状高台で、体部に丸みを持つ物が見られる。いずれも、11世紀前半以降の遺物と考えられる。黒色土器の量は非常に少なく、住居址以外では3点しか出土していない。うち2点は溝から出土しており、遺構外では図示した13だけである。13は、底部に糸切り痕が残り、口縁付近が若干内湾する形状である。灰釉陶器は、比較的多く見られ、椀主体で、他に皿と瓶が見られる。灰釉陶器の他に、緑釉陶器があるが、釉色が奈良三彩の緑釉に似た色をしており、形状は不明である。

## 第3節　中世以降の遺構と遺物

中世以降と考えられる遺構は、掘立柱建物址、溝址、柱穴群などがある。

**1. 掘立柱建物址**

掘立柱建物址を7軒検出しているが、遺物を伴う遺構がなく時期を確定できない。しかし、柱穴が円形で粗雑な点や、遺構外から少量ではあるが中世の陶磁器やカワラケなどが出土しているところから、中世の遺構と推定した。

**1号掘立柱建物址**（第7図、図版3－1）

グリッドS・T－3に位置する。柱穴を4基確認したことにより建物址と判断した。柱穴は2土・167土・4土・7土の4本で、8土・168土は関連するピットと考えられる。規模は柱穴の間はそれぞれ2.4mほどで発掘調査区が狭いため、規模の把握は難しいが規模は小さいと思われる。柱穴の大きさは2土は長軸42cm・深さ30cm、167土は長軸24cm・深さ15cm、4土は長軸39cm・深さ21cm、7土は長軸36cm・深さ33cmである。

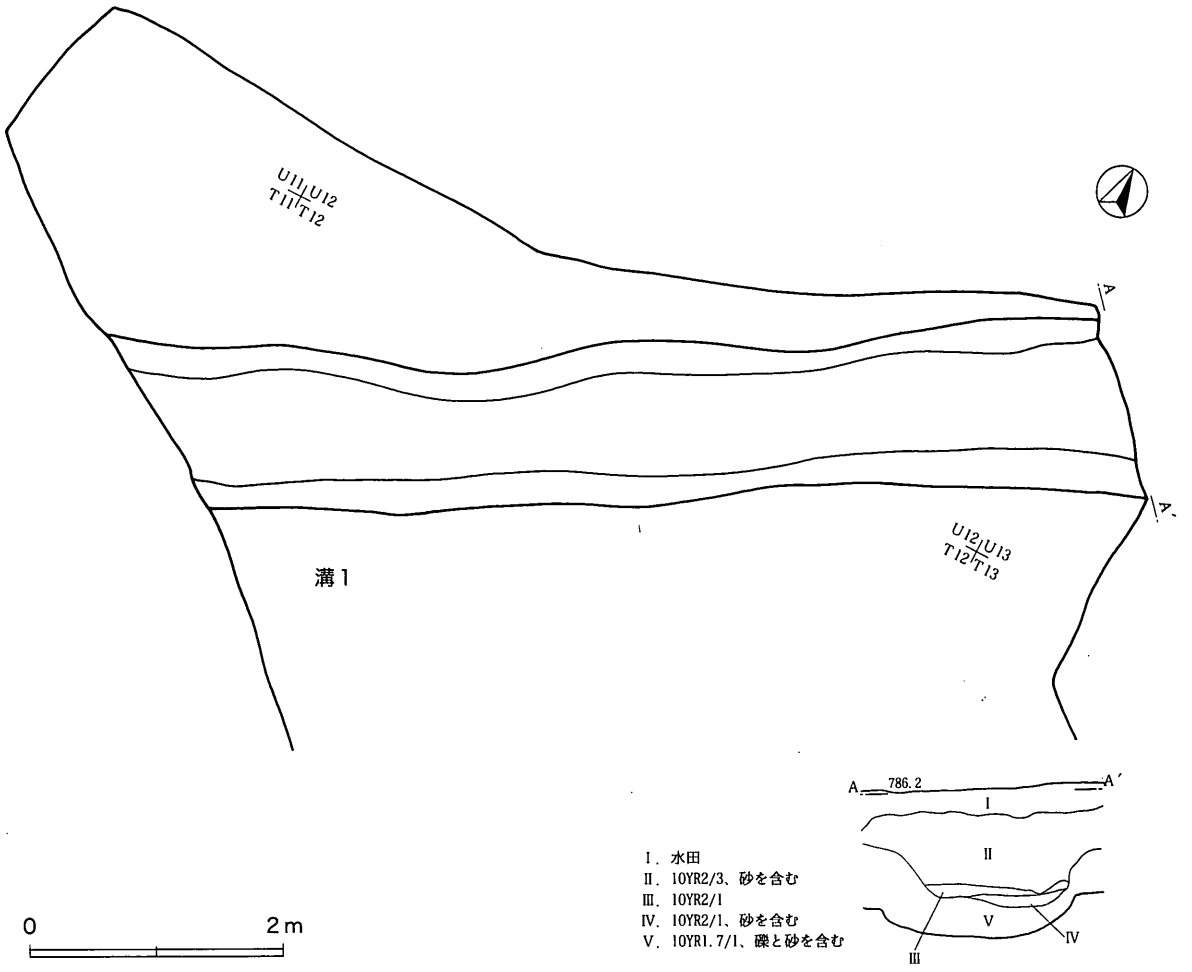
付属すると思われる8土・168土は、8土が長軸30cm・深さ15cm、168土が長軸36cm・深さ13.5cmである。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－40°－Wである。

**2号掘立柱建物址**（第12図、図版3－2）

グリッドO・P－6に位置する。柱穴が6基、礎石と思われる石を1つ検出したことにより、一応建物址として考えた。柱穴と考えられるのは21土・19土・164土・13土・17土・18土である。19土はaがbと切り合っており、bはaに切られている。13土は規模が大きいため、特殊な遺構なのか、遺構廃棄後何らかの攪乱をうけた可能性がある。また、柱穴の間隔は、21－18土間は222cm、18－17土間が210cm、17－13土間が228cm、13土－礎石間が192cm、礎石－164土間が102cm、164－19b土間が132cm、19b土－21土間が198cmである。164土と礎石は対応する土坑が18土となるが、位置がずれているために、特殊な構造になっていたのではないかと思われる。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－24°－Eである。

**3号掘立柱建物址**（第11図、図版3－3）

グリッドO・N－4・5に位置する。発掘範囲が狭いため柱穴をつなぐことは難しかったが、柱穴と思われるピットを5基確認できたこにより建物址とした。柱穴は41土・40土・42土・43土・44土・45土である。43・44・45土は規模が大きいため、特殊な遺構なのか遺構廃棄後何らかの攪乱をうけた可能性がある。48土は本址に伴う遺構と考えられる。柱穴の間隔は40－41土が240cm、40土－42土が222cm、42－43・44土が138cm、




第19図　B調査区溝（1/60）

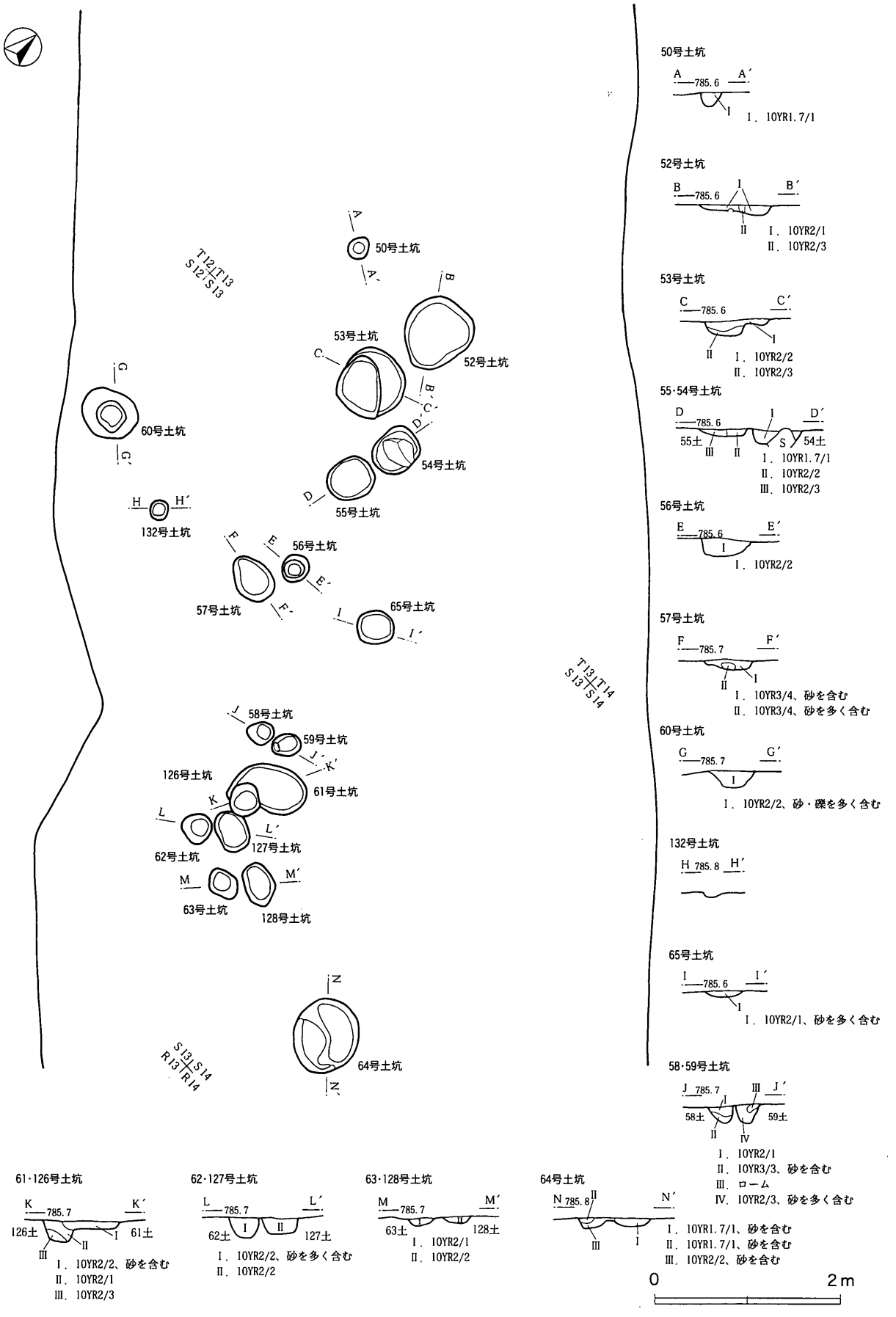
43·44－45土が240cmである。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－40°－Wである。

**4号掘立柱建物址**（第14図、図版3－4）

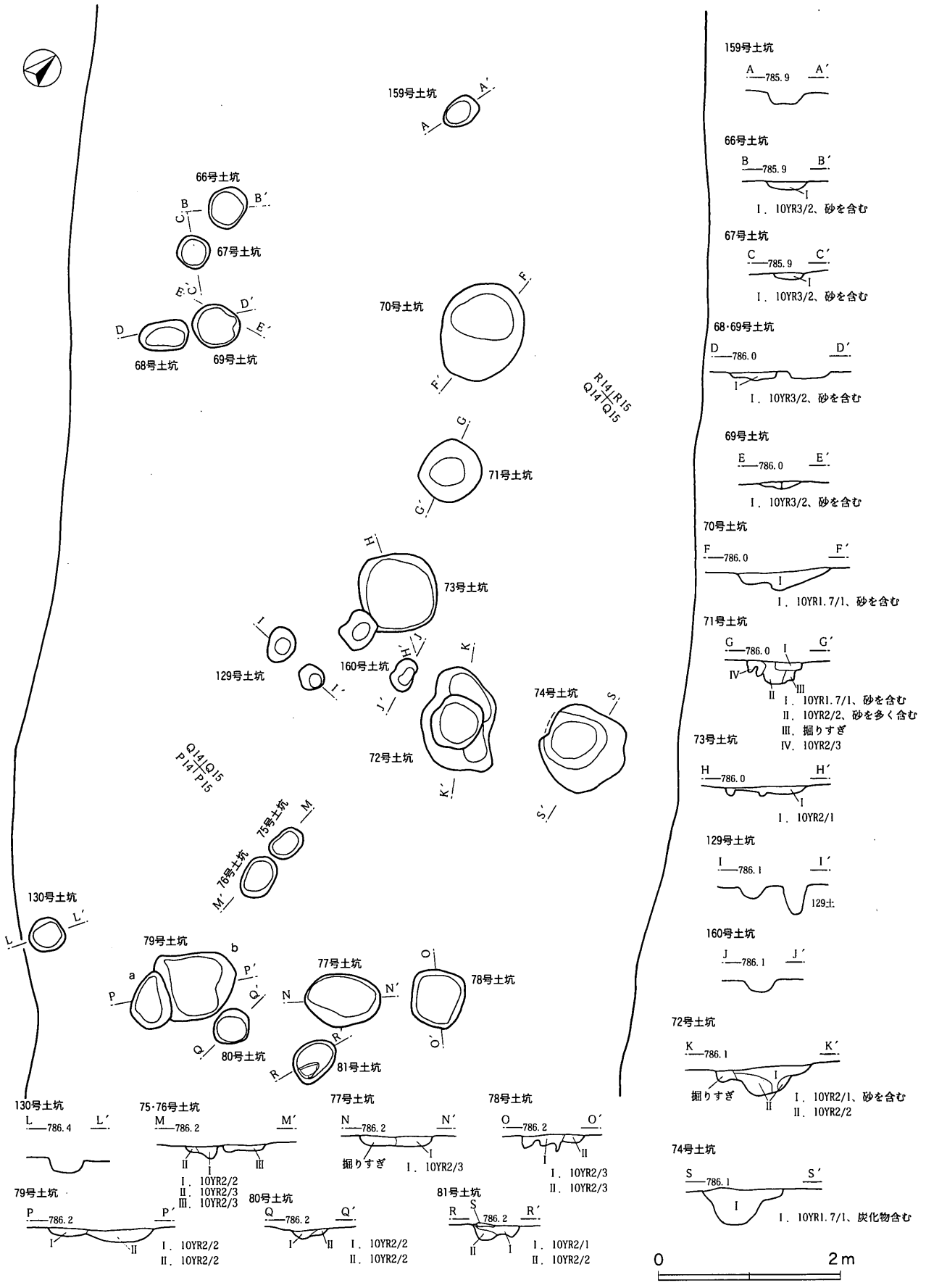
グリッドO・N－7・8に位置する。発掘範囲が狭いため、遺構の全体を把握するには至らなかった。柱穴と思われるピットは7基確認できた。柱穴の間隔は37－36土が192cm、36－32土が318cm、32－31土が198cm、31－35土が138cm、35－124a土が108cmである。36－32土間が広いため柱穴があったかと思われるが、確認はできなかった。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－34°－Wである。

**5号掘立柱建物址**（第22図、図版3－6）

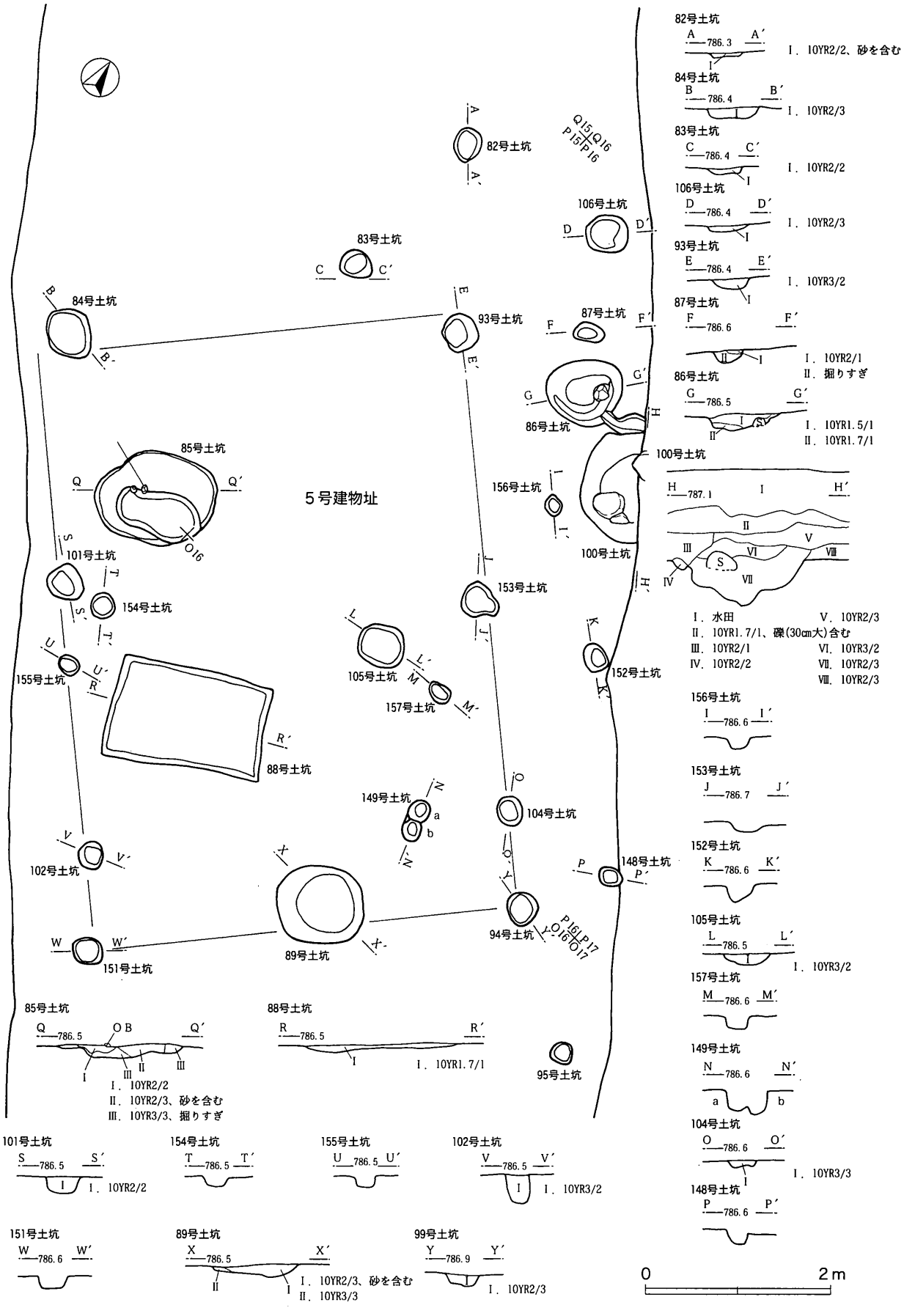
グリッドO・P－15・16に位置する。建物址の主柱穴と考えられるのは、84土・155土・151土・94土・153土・93土の6基である。柱穴間は、84－155土間が360cm、155－151号土間が310cm、93－153号土間が300cm、153－94土間が330cm、84－93土間が430cm、151－94土間が470cmである。他に、本建物址に伴うと思われる柱穴は、101土・102土・89土・149a・b土・117土・105土・154土・88土・89土がある。84－93土と151－94土間は、棟方向の柱間にくらべて、梁方向の柱間が広いため、中央に何らかの遺構があったかと思われるが、そのような遺構は見つけることができなかった。この建物址が、発掘した範囲ですべてかどうかはわからないが、これがすべてとすると、2間×1間で、棟方向650cm、梁方向460cm、軸線はN－51°－Eである。



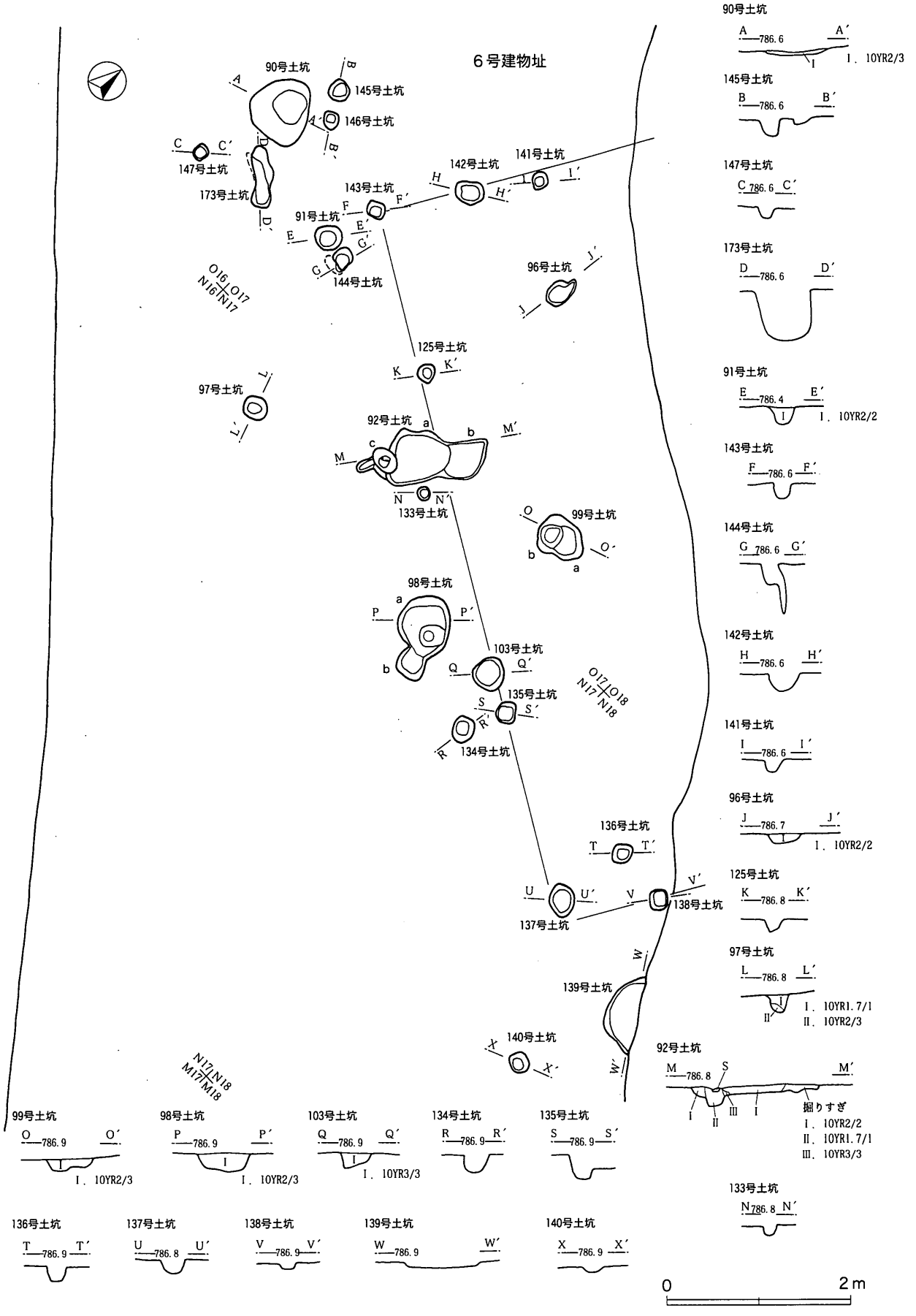

第20図　グリッドS12・13・14～T12・13・14（1/60）



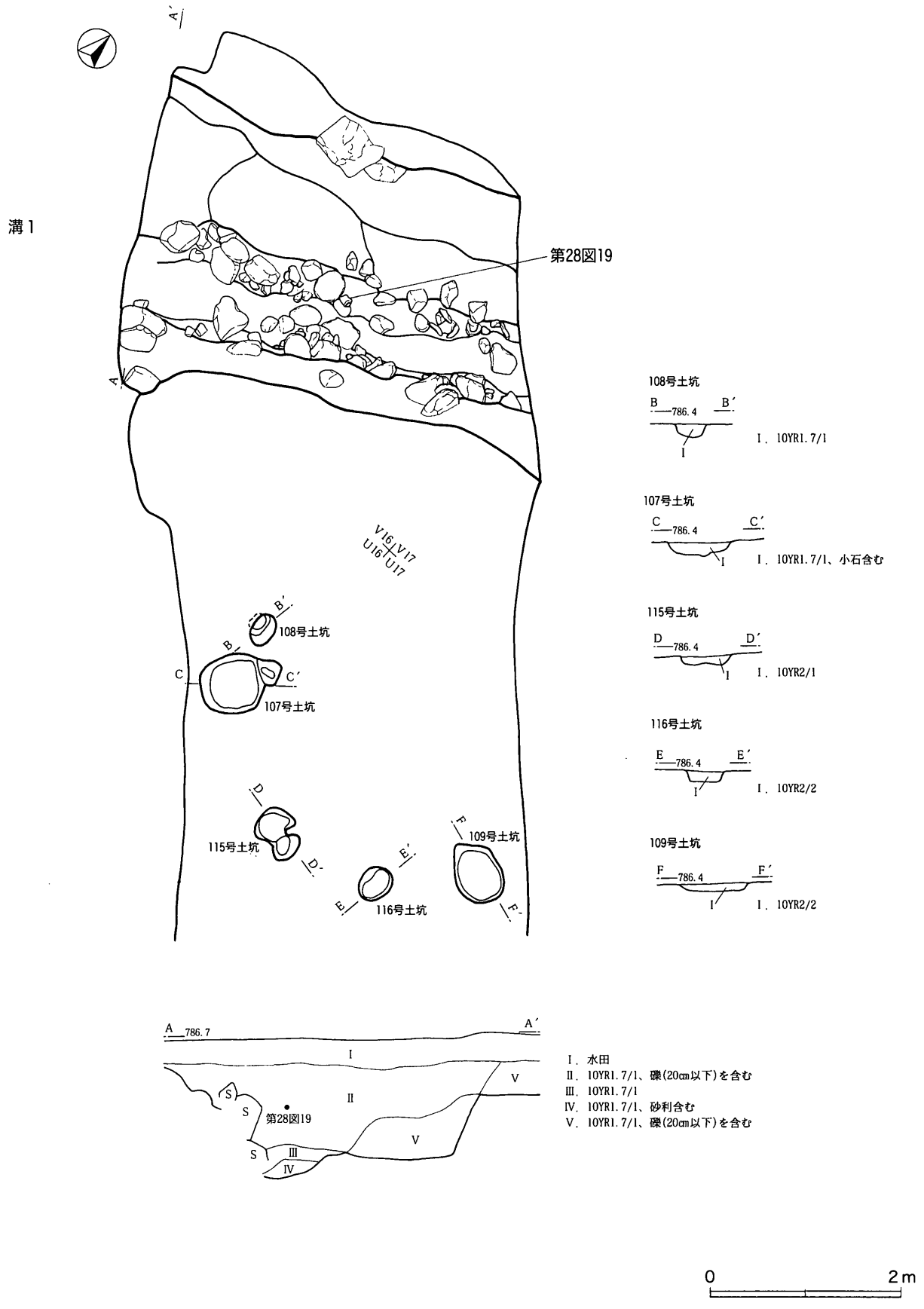

第21図　グリッドP14・15～R14・15（1/60）



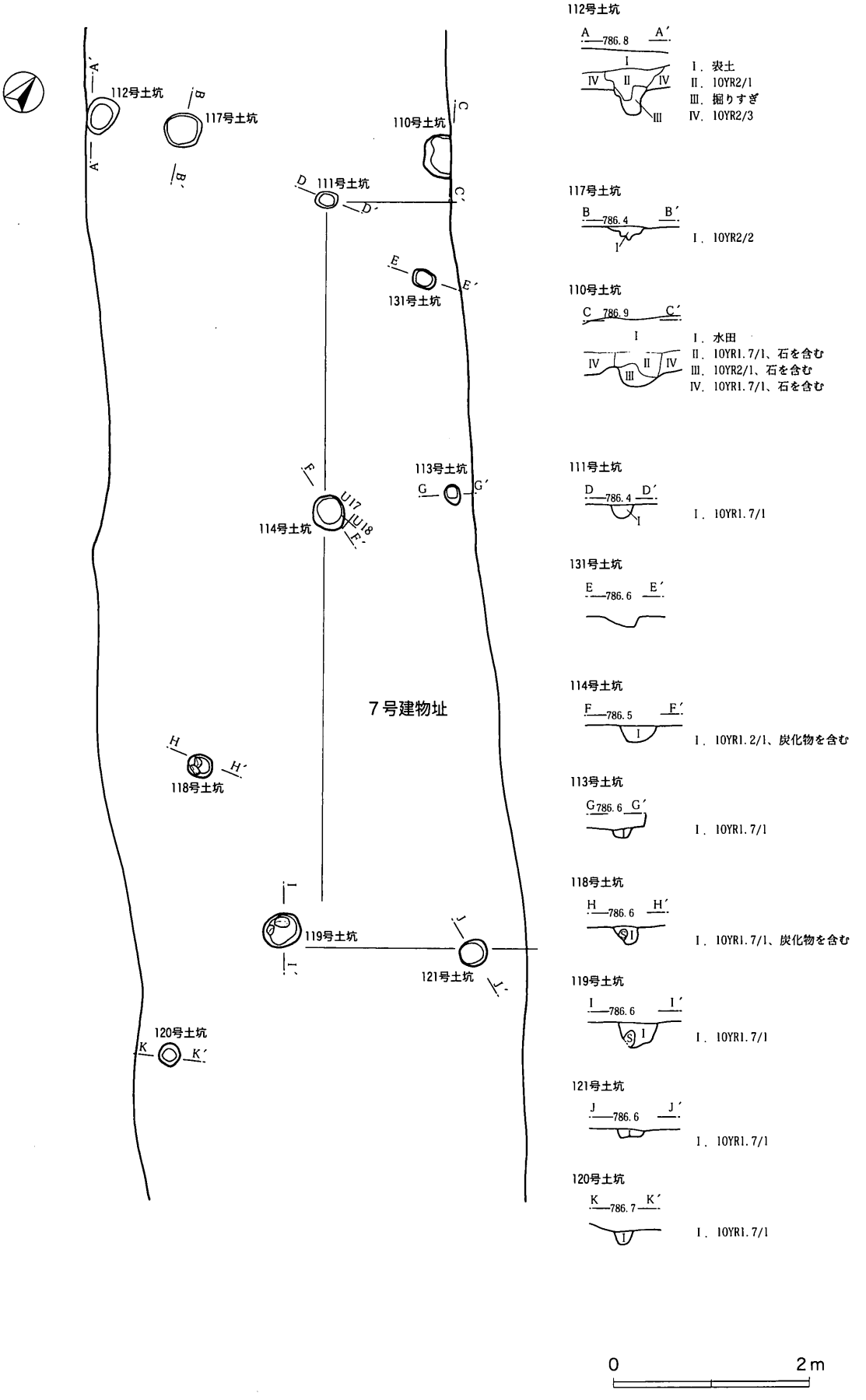

第22図　グリッドO15・16・17～Q15・16、5号建物址ほか（1/60）



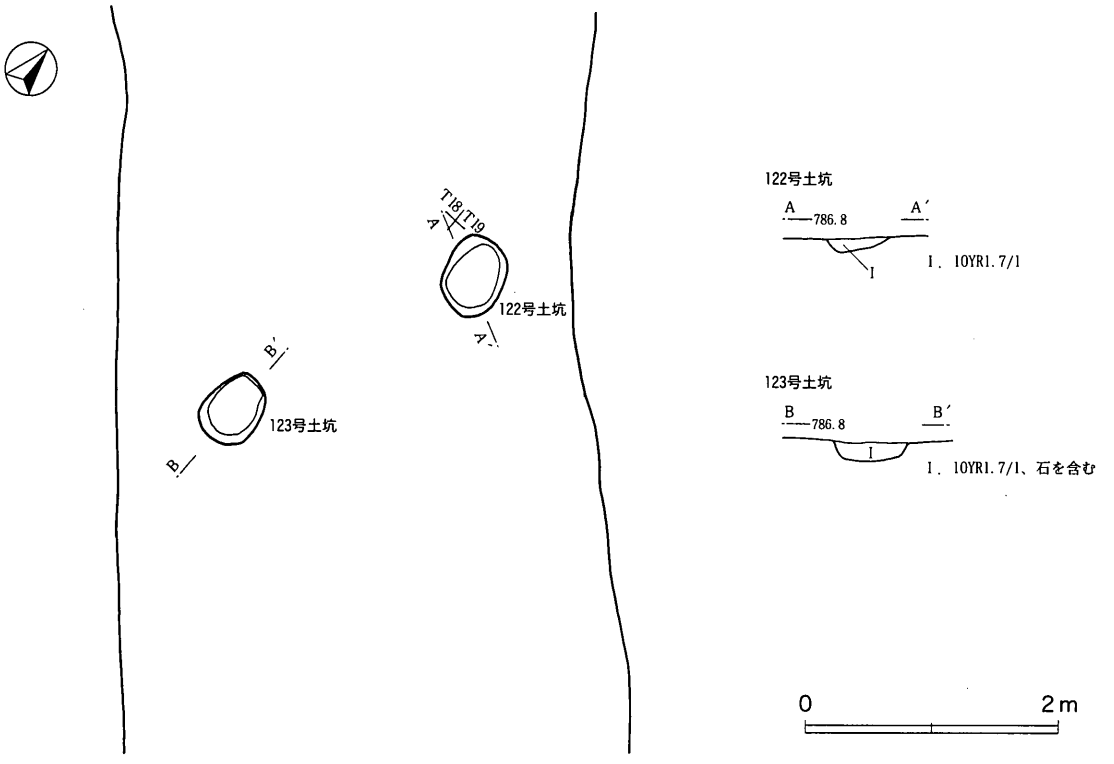

第23図　N16・17・18～O16・17・18、6号建物址ほか（1/60）



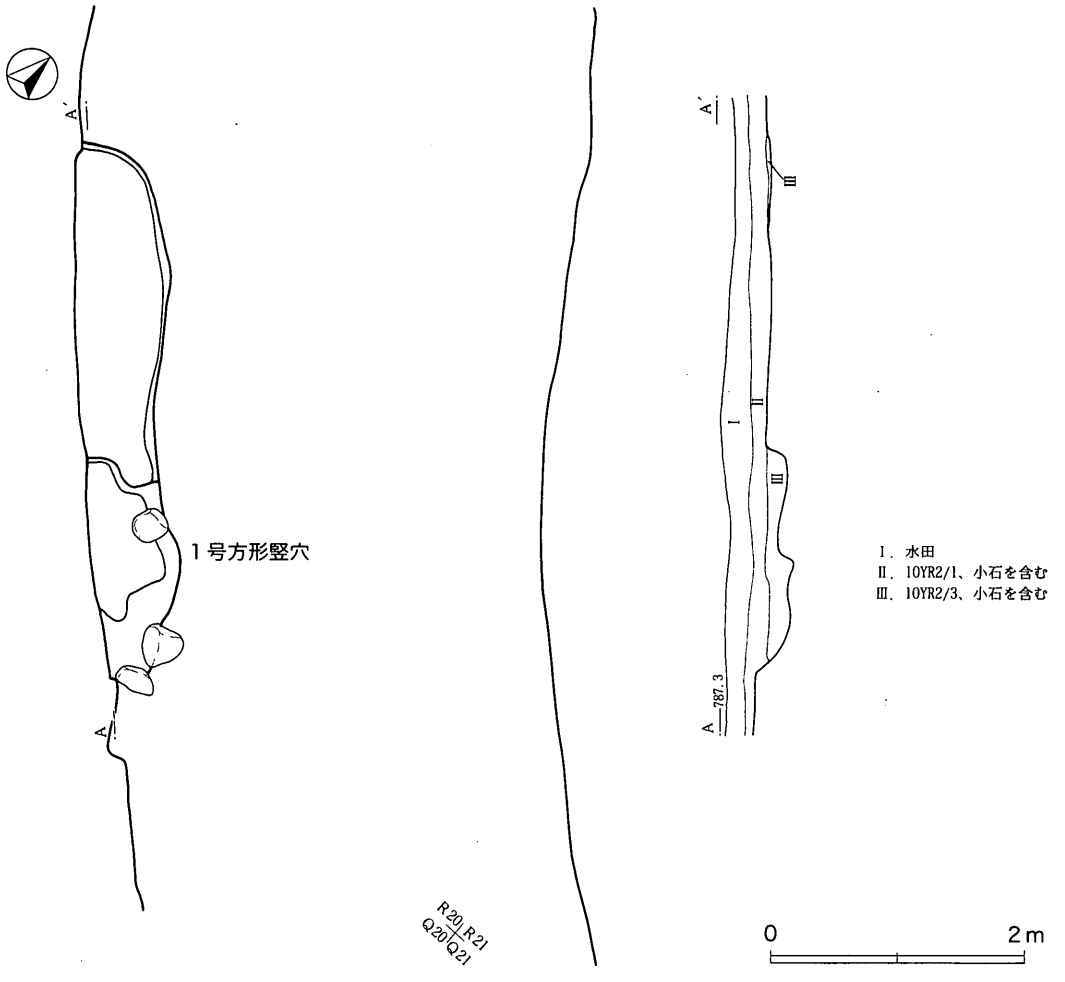

第24図　グリッドU16・17～V16・17、C調査区溝ほか（1/60）




第25図　グリッドU17・18～T17・18、7号建物址ほか（1/60）




第26図　グリッドS18・19～T18・19（1/60）




第27図　グリッドR20・21、1号方形竪穴（1/60）

**6号掘立柱建物址**（第23図）

グリッドN・O－17・18に位置する。7基のピットが建物址の主柱穴の一部と考えられる。主柱穴は142土・143土・125土・133土・103土・137土・138土で、伴うピットは141土・91土・144土・96土・99土・135土・134土・136土である。柱穴の間隔は142－143土が100cm、143土－125土が180cm、125－133土が100cm、133－103が200cm、103－137土が260cm、137－138土が100cmである。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－62°－Wである。

**7号掘立柱建物址**（第25図、図版3－5）

グリッドT・U－17・18に位置する。5基のピットが建物址の主柱穴の一部と考えられる。主柱穴は110土・111土・114土・113土・119土・121土である。柱穴の間隔は110－111土120cm、111－114土320cm、114－119土440cm、119－121土200cmである。遺構の半分以上が遺構外になるため、規模は不明である。現在明らかになっている部分の軸線はN－38°－Wである。

## 2. 溝　址

**溝1**（第19・24・28図、図版3－7・8）

**遺構の位置**　溝址は、B発掘区とC発掘区で検出されており、位置が同じ事から、同じ溝がB発掘区からC発掘区にまたがっていると考えられる。B発掘区はT・U－12・13、C発掘区はU・V－16に位置する。この溝は、区画整理事業が行われる以前の道に平行しており、最近まで使用していた道がかなり古くからあったことがわかる。しかし、A発掘区からは検出されず、平成15年度に行われた長野県埋蔵文化財センターの調査では、C発掘区の北東側に伸びて、途中で北西側に曲がっていた。これを考えると、B発掘区とA発掘区の間で北西側に曲がっていることが考えられる。現在使用されている道が、B発掘区のすぐ西側を北西方向に曲がっているため、ここで、溝が曲がっている可能性が考えられる。

**遺構の構造**　残りの良好なC調査区の溝址で見ると、溝の幅は250cmあり、深さは147cmである。上部から80cmほどの所で段になり、そこから下は窄まっている。Ⅱ層中に40cm大の礫が投げ込まれていた。また、Ⅳ層中には、砂の堆積が見られ、流路であったことがわかる。

**出土した遺物**　遺構内部より平安時代の遺物の他、内耳土器片が3片出土している。そのうち口縁部の部分を図示した（第28図19）。第28図19は、頸部で広がり、口縁短部は、真っ直ぐ調整されている。外面にタール状の物が付着し、使用されていたことがわかる。成形は横方向のナデ成形である。

**遺構の時期**　内耳土器から、15世紀中葉から16世紀初頭と考えられる。

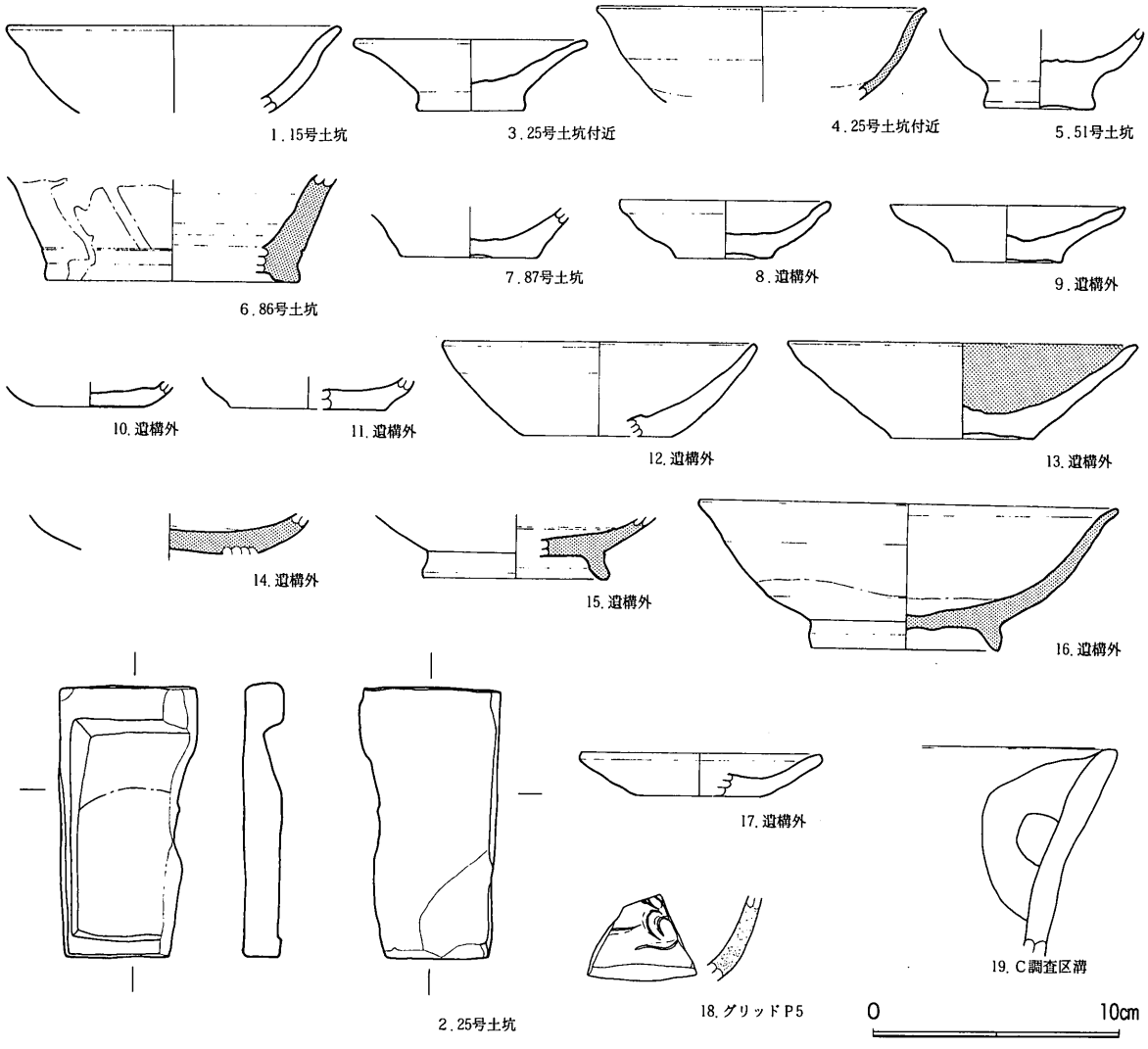
## 3. 土　坑

土坑は、柱穴が主であるが、ほとんどが対応する柱穴が発見できず、建物址などにすることができなかった。

このような柱穴は75基ある。この他に、土坑が59基あるが、性格のわかる土坑は1基のみである。

**25号土坑**（第13・28図・図版4－4・5）

グリッドN・O－7に位置する。上端長軸210cm・上軸短軸124cm、下端長軸186cm・下端短軸96cm、深さ22cmの隅丸長方形で、長軸方向N－63°－Wである。出土遺物は、平安時代の遺物の他、硯1点（第28図2）、内耳土器破片1がある。硯から、近世以降の遺物と考えられる。出土遺物と、遺構の形状から考えると、墓壙である可能性が考えられる。




第28図　土坑・遺構外の出土遺物（1/3）

## 4. 方形竪穴

**1号方形竪穴**（第27図）

グリッドR－21に位置する。遺構の大半は調査区外に出ているため、詳細は不明である。わかる範囲では、420cmの掘り込みがあり、南東側180cmの範囲にわたって若干低くなっている。低くなっているところの床面は非常に荒れている。高くなっている方の床面は平であった。低くなっている方から、20cmほどの礫が検出された。遺物が出土していないため、時期は不明である。

## 5. 中世以降の遺物（第28図）

中世以降の遺物は非常に少ない。前述した溝址出土の内耳土器の他に、グリッドP５付近で出土した青磁椀破片（第28図18）と、遺構外出土の土師質土器（第28図17）がある。18の青磁は、胎土は白色で、器面の色は明緑灰色である。内部にヘラによる雲形の模様が描かれている。17の土師質土器は、器高が浅く、腰部に若干稜部が付く。底面には糸切り痕が残っている。

# 第Ⅴ章　外垣外遺跡

外垣外遺跡は、平成12年度に発掘調査を、平成14年度に試掘調査を行った。平成14年度の試掘調査では遺構の検出は見られなかった。また、同年に国道20号線のバイパス建設に先立ち試掘調査を行った結果、中村遺跡と一体の遺跡であることが確認された。

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は土坑が12基検出されている。そのうち遺物が出土しているのは４基である。土坑の詳細は、表２に記してある。その中から、特徴的な土坑を取り上げる。

**１号土坑**（第29・30図・図版５－２・３）

平面プランは隅丸方形で、断面形は樽形である。土層の状況は、三角堆土であり、中央のⅠ層より20cm大の礫が出土している。遺物は縄文土器が２点26g検出している。そのうち１点を図示した。遺物からは縄文時代と考えるが、時期は不明である。

**５号土坑**（第29・30図・図版５－４）

平面プランは円形で、断面形は盥形である。土坑中より縄文土器が１点11g出土している。遺物からは縄文時代と考えられるが、時期は不明である。

**11号土坑**（第29・30図・図版５－５・６）

平面プランは不整形で、断面形は盥形である。遺構の一部は遺構外である。この土坑は、最も遺物が出土しており、土器６点46g、黒耀石片１点出土している。遺物は土坑の東側と西側から固まって出土している。東側の固まりからは、６の土器底部がまとまって出土している。この底部の破片の一部は、土坑北東側の縁から検出されている。遺物から、縄文時代中期中葉井戸尻式期と考えられる。

**12号土坑**（第29・30図・図版５－７）

平面プランは隅丸長方形で、断面形は盥形である。遺物は土器片１点19gが出土している。遺物から、縄文時代中期中葉藤内式期と考えられる。

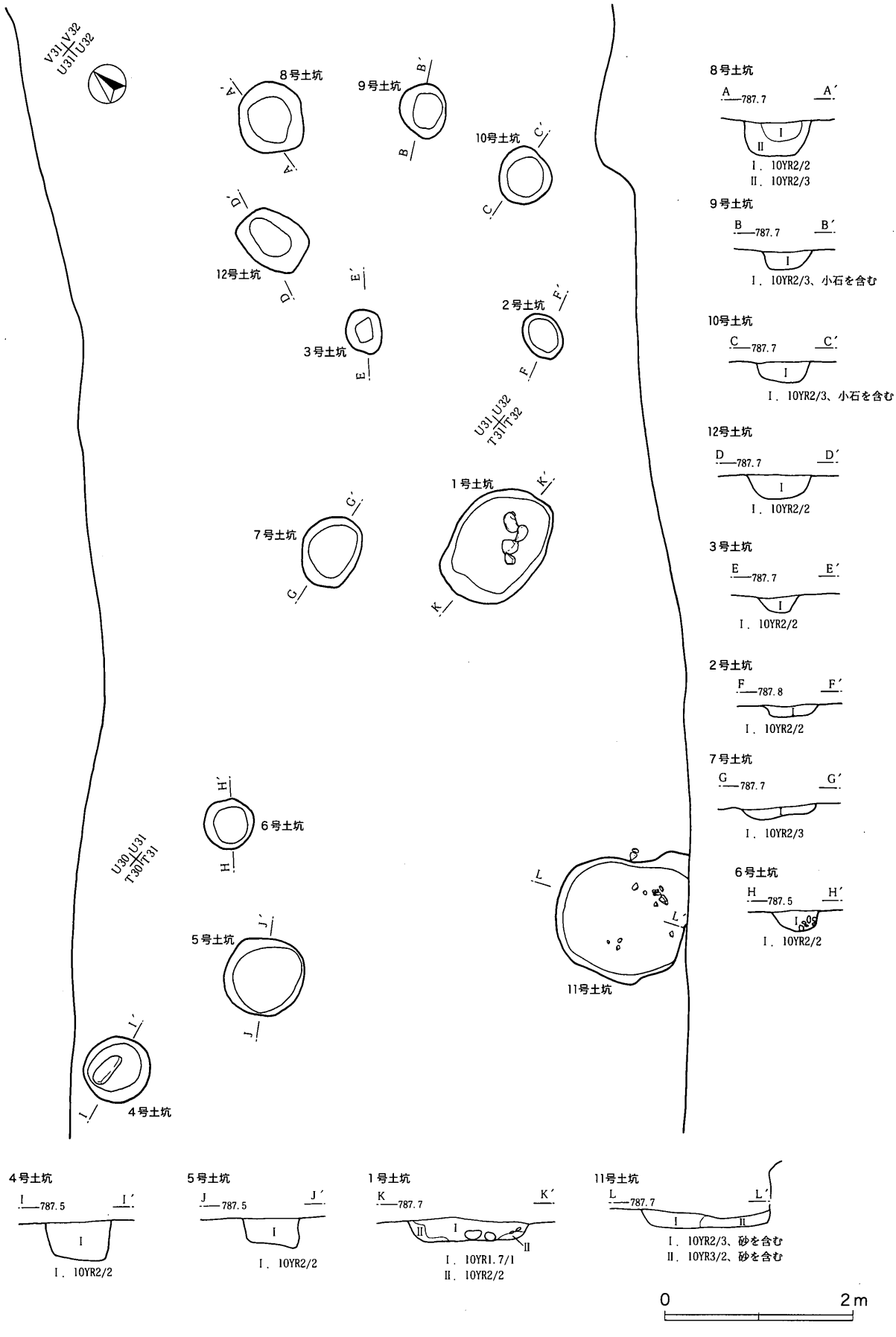
### 2. 縄文時代の遺物

今回の調査により得られた土器片は、13点、総重量にして1,001gを測り、復原された土器はない。その内の10点を図示した。尚、この内７点が土坑内からの出土である。

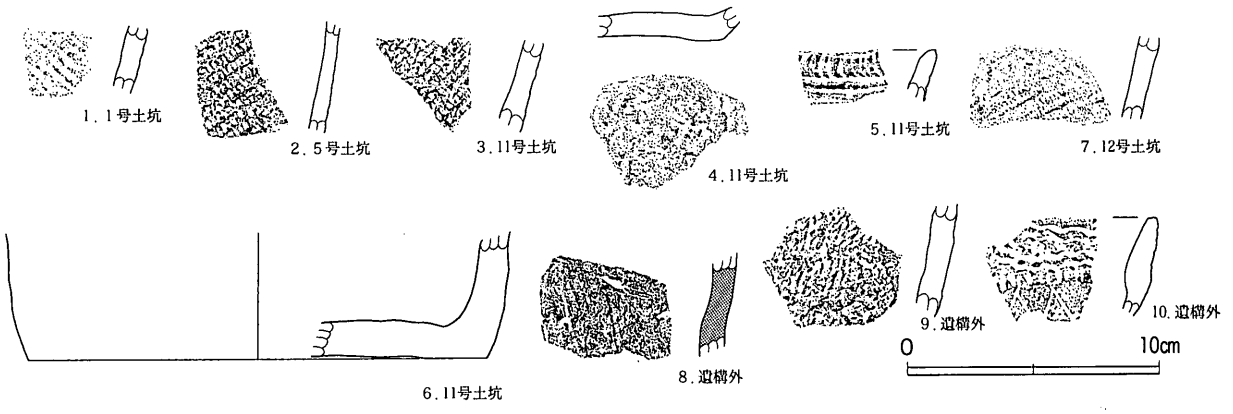
縄文土器の時期は縄文早期末葉、前期中葉縄文施文土器等、中期中葉藤内式期の土器が得られている。

**縄文土器の出土状態**　縄文土器は４ヶ所の土坑から出土している。全て覆土内からの出土で埋設などの行為は認められない。

**縄文土器の概要**　１は縄文施文がなされ、裏面は指頭整形後横位の強い撫でが加えられている。１号土坑出土。２は縄文施文の土器片で裏面に擦痕状の撫でが加わる。５号土坑出土。３も縄文施文がなされる土器である。整形・施文共に１・２に類似する。５は口縁部に半截竹管状工具による隆線が弧状に数条巡り、口唇部には連続爪形文が施文される。焼成が堅緻で色調が灰褐色を呈する特徴的なもので、施文や焼成等より搬入品の可能性が高い。６は大型深鉢の底部で、寸胴型の器形が想定できる。器形や胎土・焼成より中期中葉藤内、井戸尻式期に帰属させることができるか。11号土坑出土。７も縄文施文の土器である。12号土坑出土。８は繊維を含む無文の土器で、擦痕状の強い撫で痕が斜状に施される。９も縄文施文土器で裏面整形等は１




第29図　外垣外遺跡遺構配置図（1/60）




第30図　外垣外遺跡出土遺物（1/3）

～３に類似する。10は口縁部がやや屈曲する。口縁部には半截竹管状工具により横位に平行蛇行沈線により区画がなされ、区画内には竹管端による円文刺突が施文される。口縁屈曲部には半截竹管状工具端による逆U字状刺突が、胴部上部にはヘラ状工具による斜状沈線が施文される。文様構成より中期中葉平出ⅢA系と考えられる。

**外垣外遺跡の縄文時代の特徴**　外垣外遺跡から今回の調査に於いて縄文早期末葉、前期中葉、中期前葉藤内式期前後の資料が得られている。外垣外遺跡も隣接する中村遺跡と同様に宮川・麻浸川の形成する沖積地に立地しているが、中村遺跡よりもより宮川の河床に近い低位部に位置している。今回の調査で得られた中で特徴的なものとして、少量ではあるが縄文早期末葉の土器の存在がある。隣接する中村遺跡、御社宮司遺跡では早期末葉から前期初頭の存在が判明しており、低位の沖積地も当時の生活の舞台として利用されていたことが判明している。また、外垣外遺跡の特徴として前期中葉の土器群を上げることができる。１号・５号・11号土坑より検出されている縄文施文の土器はその整形や胎土・焼成、縄文施文の状況から前期前半に帰属するかと考えられる。当該期の遺跡は近隣に外垣外遺跡の沖積地を臨む形のテラス状台地に蟹畑遺跡があり、竪穴住居址１軒・遺物集中区の小規模な生活址が検出されている。外垣外遺跡の場合土坑しか検出されていない点を考慮すると、蟹畑遺跡等の集落に付随する生産域的な役割を当遺跡は担っていたものと考えることができようか。

# 第Ⅵ章　蟹畑遺跡

蟹畑遺跡は平成13年度に尾根状台地の先端の試掘調査を行ったが、遺構の検出はなかった。平成14年度に試掘調査を行わなかった場所の発掘調査を行ったところ、縄文時代の住居址１軒・土坑９基・平安時代の住居址７軒を検出した。

平成15年度の調査の成果は縄文時代の住居址１軒、土坑９基、平安時代の住居址２軒、掘立柱建物址の柱穴と思われる土坑42基、中世の地下式坑２基、方形竪穴１基を検出している。14・15年度の発掘の成果をあわせると、平安時代と中世が主体である遺跡といえる。

## 第１節　縄文時代の遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構

#### a．住居址

**６号住居址**（第32・33・34図・図版12－３・４・５）

**遺構の構造**　グリッドa・b－７・８に位置する。住居址の立地は、尾根状台地の西側斜面である。東側を２号住居址と、西側を７号住居址と重複している。そのため、住居址の残存状況は非常に悪く、辛うじて東側壁と、床の一部が検出されただけである。東側壁は、検出面で21cmの壁が確認でき、掘り方はしっかりとしていた。壁から続いて、５cmほどの周溝が確認できた。北側はあまり明確ではなかったが、周溝が確認され、東側の周溝と直行するところから、住居址のプランは方形と考えられる。住居址の一部分しか確認できなかったため、炉と思われる焼土址は発見することができなかった。住居址床面には20cm以下の大きさの礫が散乱していたが、住居址廃棄時に廃棄された物かどうかは不明である。

**遺物の検出状況**　遺物は、住居址の残りの悪さから、住居址外で検出されるものが多い。しかし、住居址内で出土する物に、12や16のように、大きな破片で検出される遺物も見られる。２号住居址や７号住居址で検出される遺物のうち、当住居址の時期と同じ遺物は、後年の攪乱により、当住居址から出た遺物と考えられるため、６号住居址出土遺物とした。

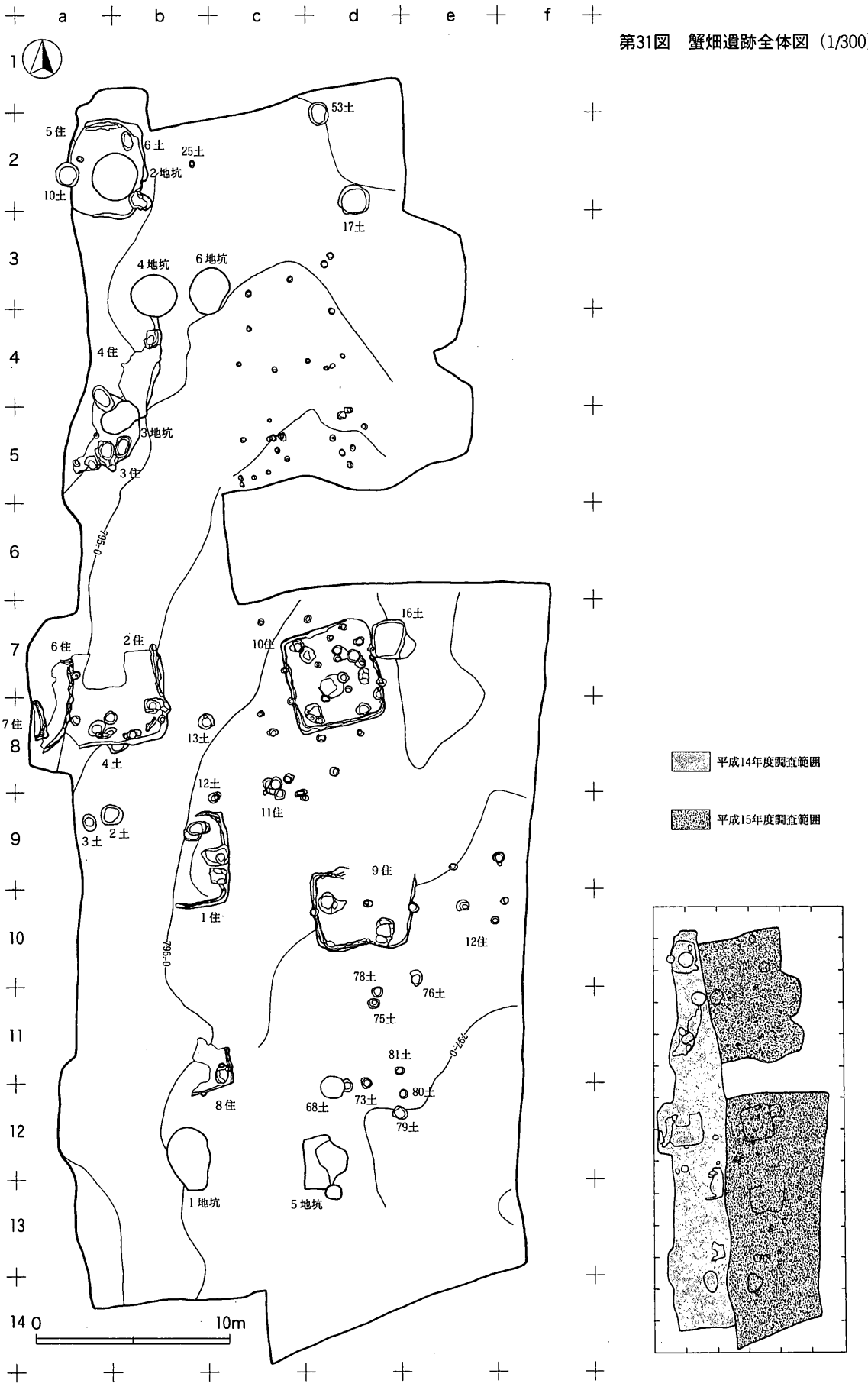
**遺構の時期**　出土遺物から縄文時代前期中葉とした。

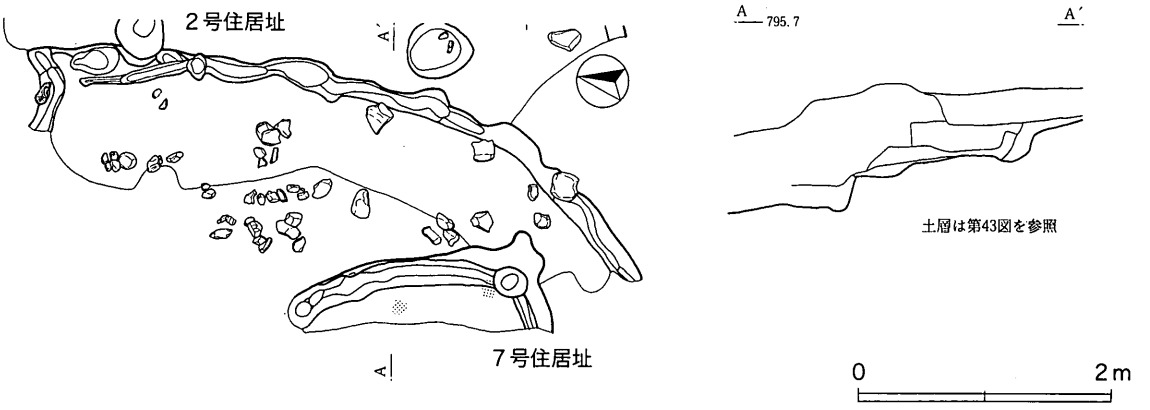
**12号住居址**（第35・36図、図版12－６・７・８）

**遺構の構造**　グリッドe・f－９・10に位置し、立地は尾根状台地中央付近である。表土剥ぎを行った時に、焼土址と若干の土器を検出したため、焼土址検出面から遺構確認作業を行った。しかし、住居址のプランは検出することはできなかった。最初に検出した焼土址は、柱穴の確認できた面から、57cmの高さから検出され、分布範囲も、柱穴の一部にかかるだけで東側にズレているため、本住居址に関わる遺構かどうかは不明である。焼土址中より炭化材が出土している。焼土址の下から30cm大の石や土器類を検出している。柱穴は、５本確認できた。Ｐ１は口径40cm・底径30cm・深さ80cm、Ｐ２は口径38cm・底径28cm・深さ56cm、Ｐ３は口径60cm・底径39cm・深さ42cm、Ｐ４は口径42cm・底径22cm・深さ52cm、Ｐ５は口径　66cm・底径28cm・深さ82cmである。このうち主柱穴はＰ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５の４本と考えられる。Ｐ２とＰ３のほぼ中間に土器がまとまって出土した。焼土址と柱穴の間には焼土は検出されず、炉の位置は不明である。遺物の分布範囲を見ると、柱穴の北側と南側に広く散布しているため、遺構のプランは不明である。

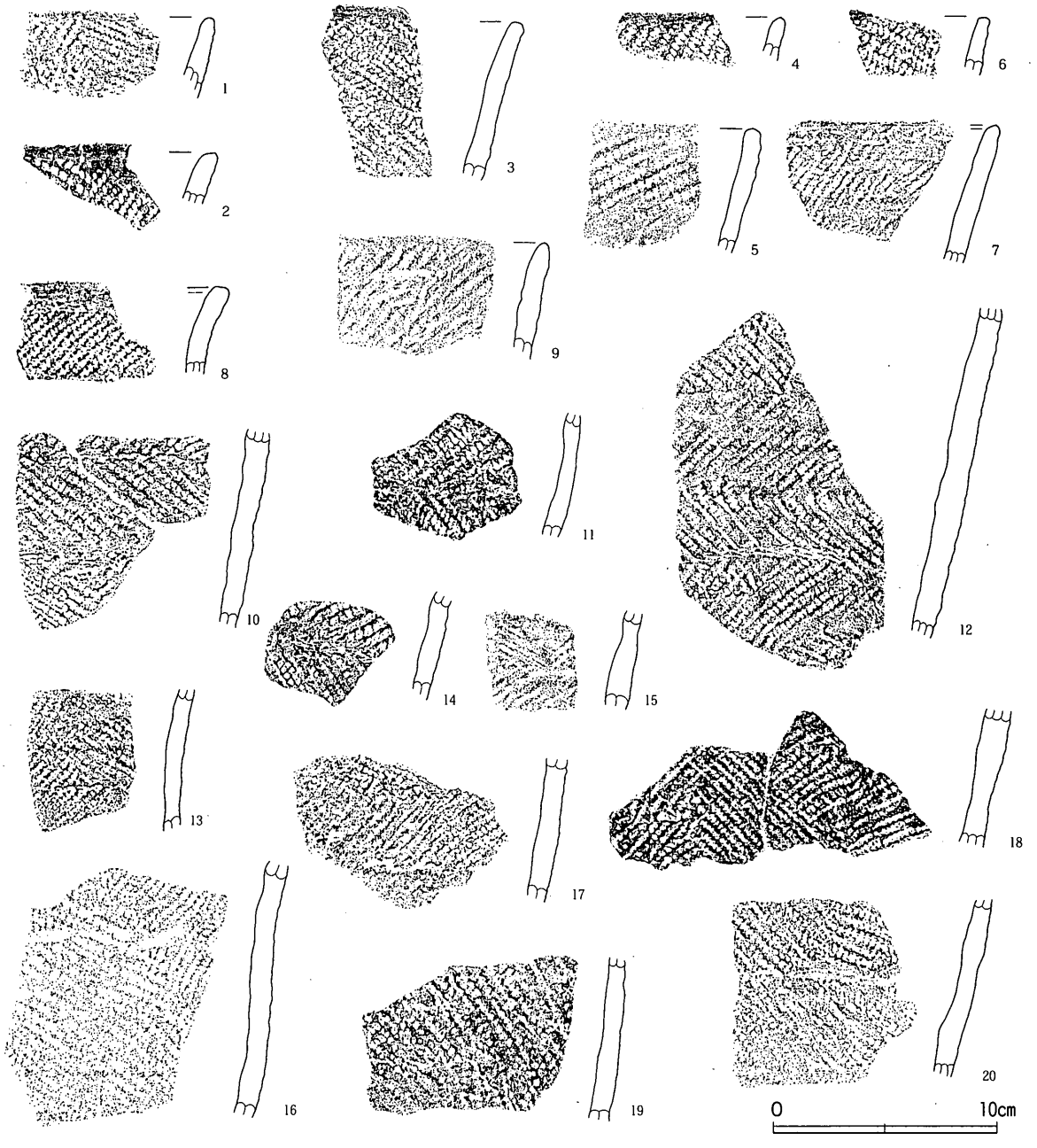
**遺物の検出状況**　遺物のほとんどは、８層以下から出土している。焼土は、遺物包含層の直上に位置する。遺物の分布範囲は、柱穴周辺全体に散っている。分布の南西のところにはずれて６の土器がまとまって出土

第31図　蟹畑遺跡全体図（1/300）

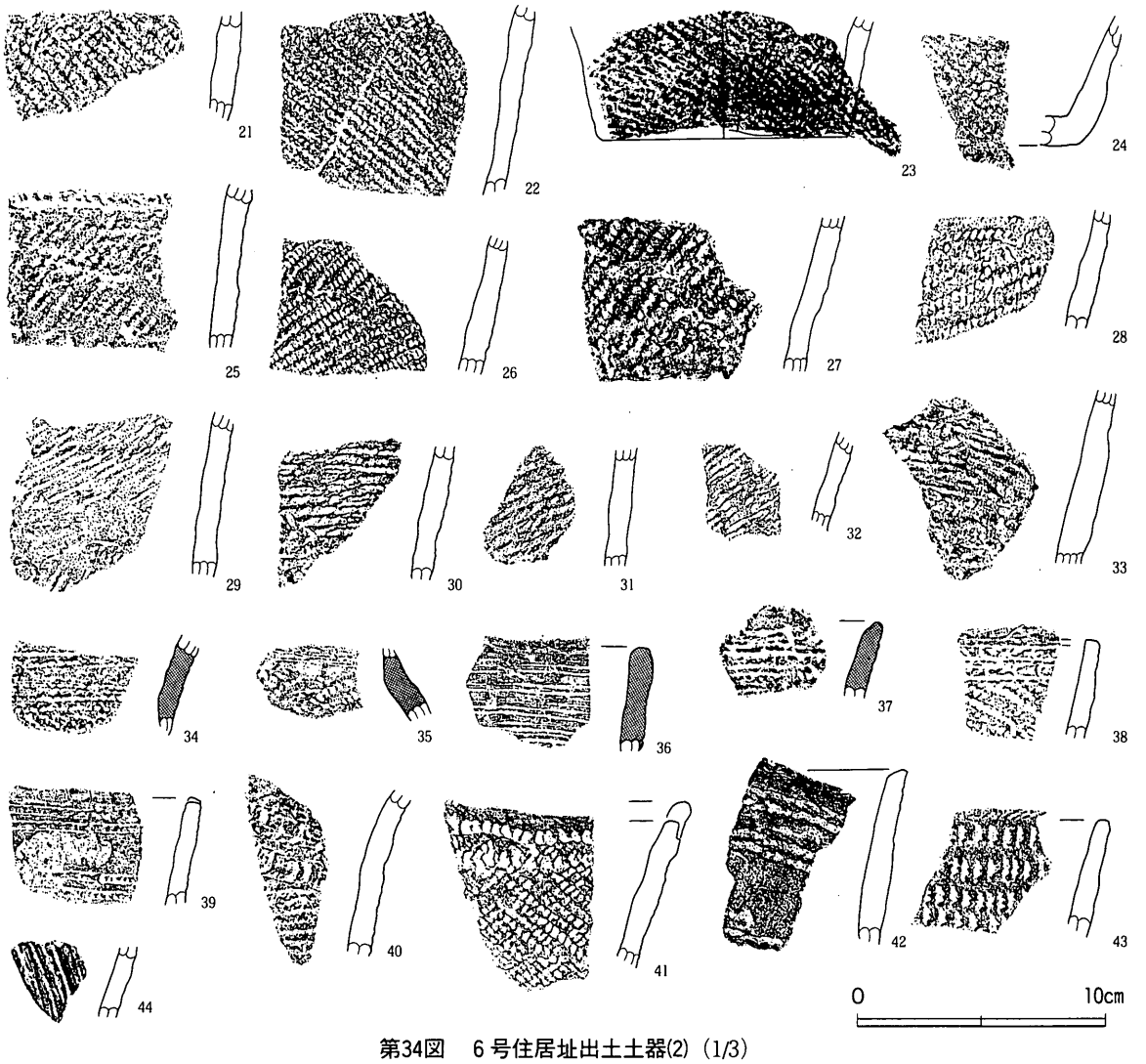





第32図　6号住居址（1/60）




第33図　6号住居址出土土器(1)（1/3）




第34図　6号住居址出土土器(2)（1/3）

しているが、出土土器が住居址の時期と同じであるため、住居址に関係する何らかの遺構があったのではないかと考えられる。

**遺構の時期**　遺物から縄文時代前期中葉と考えられる。

**b．土坑**

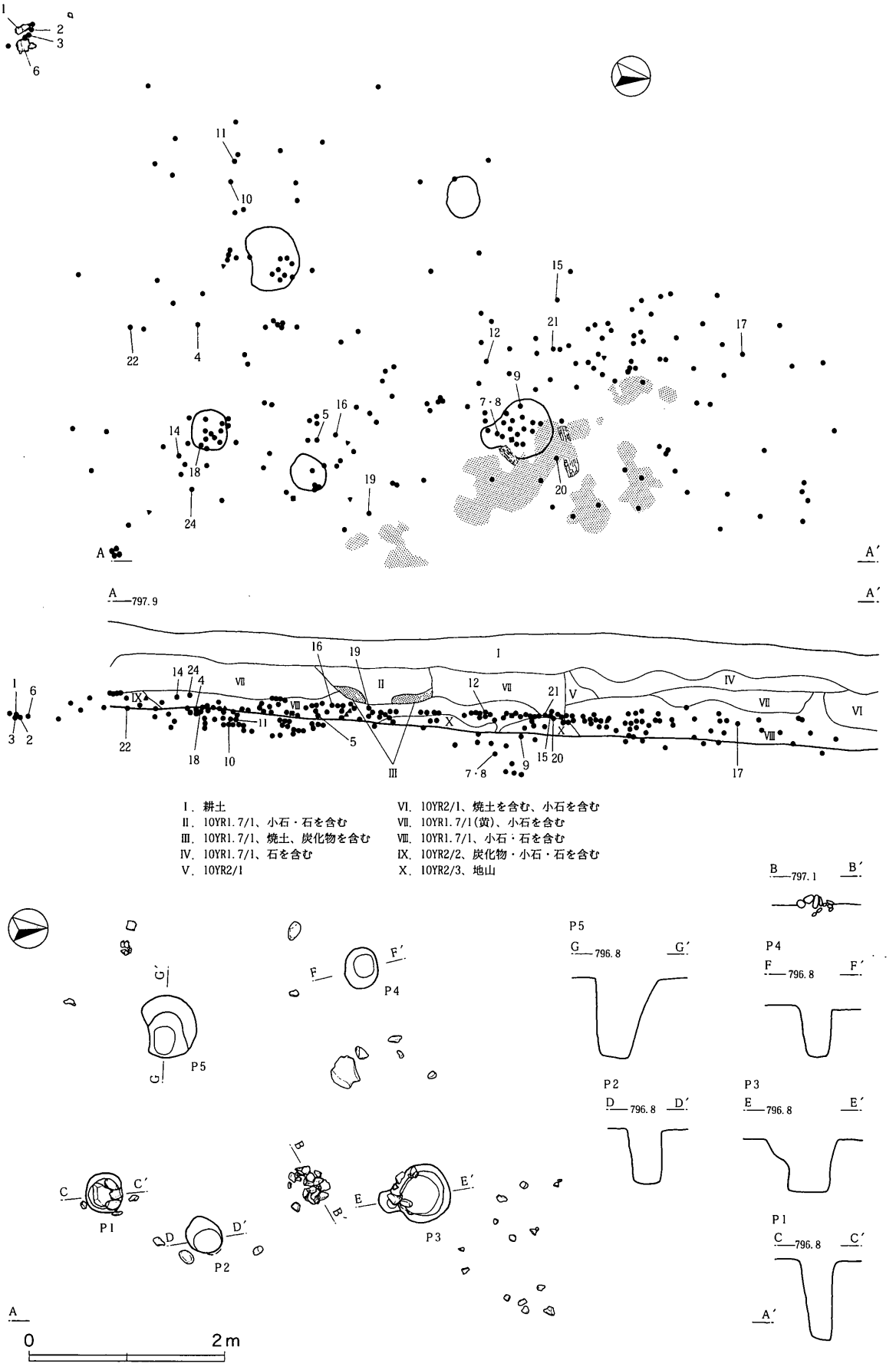
縄文時代と考えられる土坑は9基である。土坑は、遺物が出土していることにより判断したものが多いが、遺物のない土坑でも土層などで判断したものがある。土坑については表3にあるが、その中から、特徴的な土坑を取り上げる。

**3号土坑**（第37・38図・図版15－2）

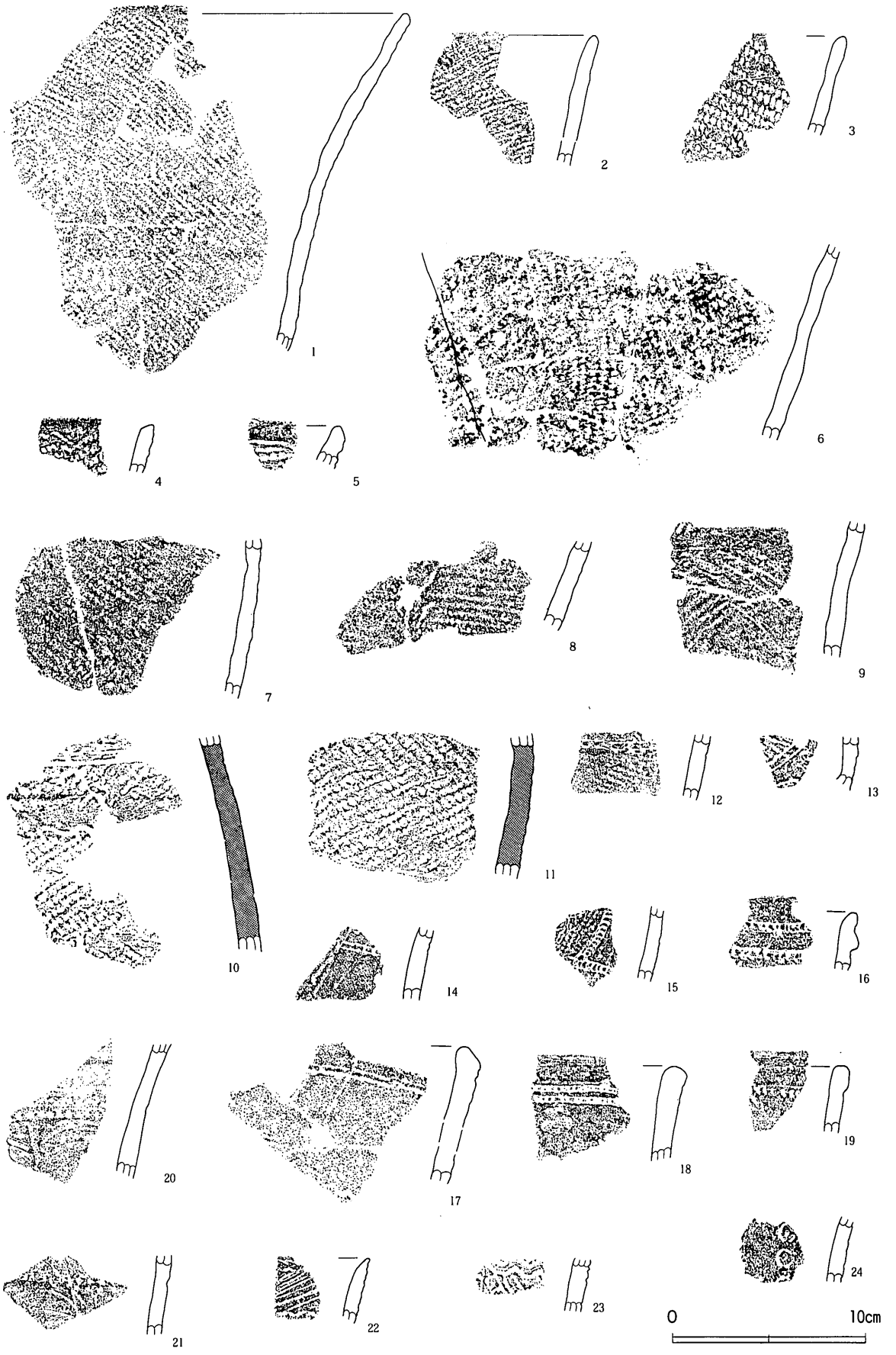
グリッドa－9に位置する。平面形は隅丸長方形、断面形は樽形である。土坑の規模は上端長軸89cm・短軸64cm、下端長軸50cm・短軸45cm、深さ15cm、軸線方向はN－8°－Wを示す。土坑中から18cm以下の礫が出土している。遺物は、無紋の縄文土器片が出土している。

**4号土坑**（第37図）

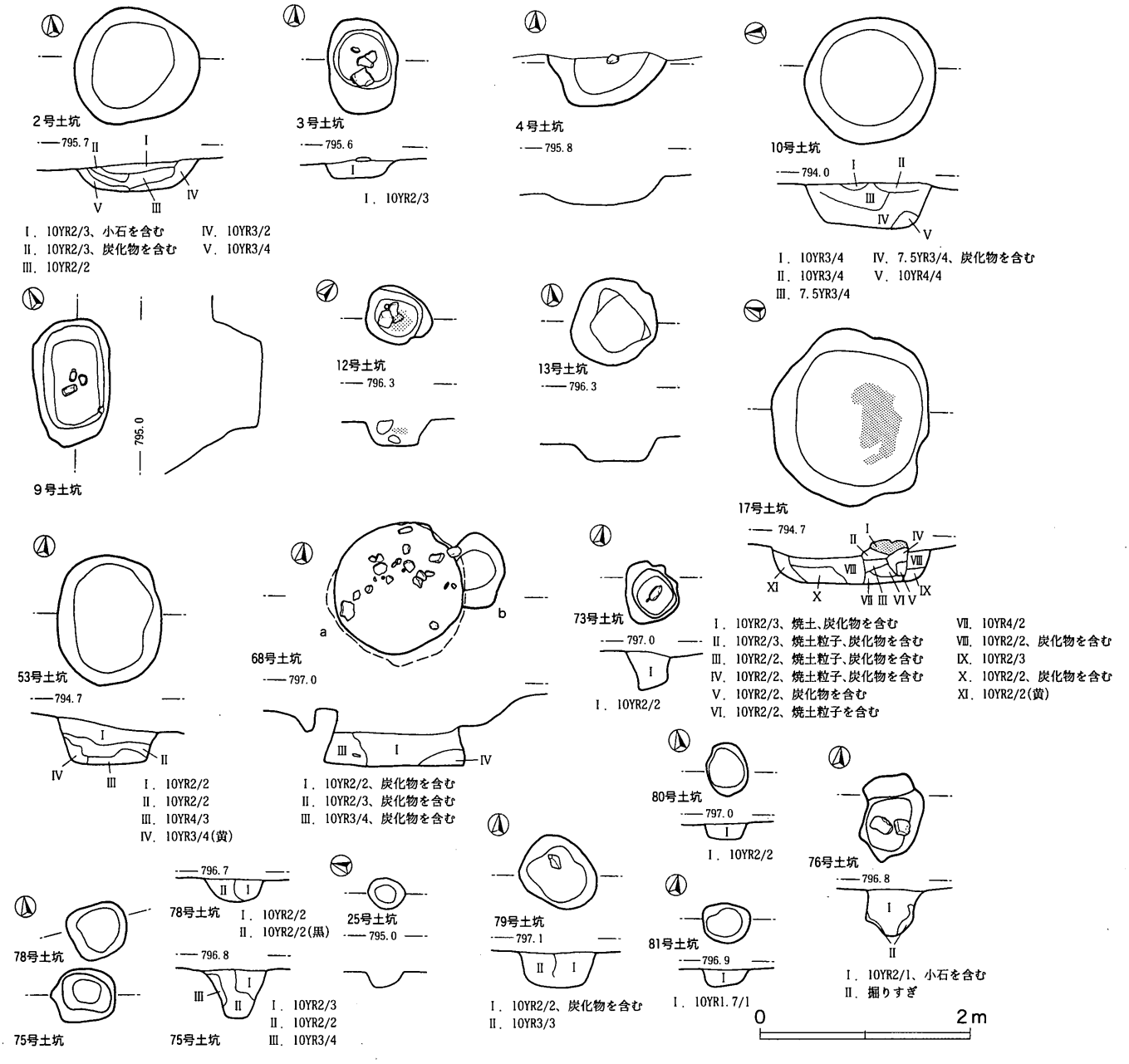
グリッドa・b－8に位置する。2号住居址と重複しており、遺跡のほぼ半分は失われている。深さは22cmである。遺物は、磨り石・磨製石斧・有茎石鏃が出土している。




第35図　12号住居址（1/60）




第36図　12号住居址出土土器（1/3）




第37図　土坑（1/60）

**9号土坑**（第37図）

グリッドb－5に位置する。3号住居址と重複している。土坑の形状は隅丸長方形で、断面形は、下端から上端に向かって広がっており、中段が見られる。規模は、上端長軸118cm・短軸74cm、下端長軸78cm・短軸41cm、深さ46cmである。軸線方向はN－28°－Eを示す。底部のほぼ中央部に、浅いながら不整形な穴が3本検出された。土坑の形状から、陥穴と考えられる。しかし、蟹畑遺跡では、9号土坑以外の陥穴は検出されていない。また、遺物は出土していない。

**12号土坑**（第37図）

グリッドb・c－9に位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は樽形である。規模は上端長軸64cm・短軸50cm、下端長軸41cm・短軸33cm、深さ23cm、軸線方向はN－59°－Eを示す。土坑のほぼ中央部、底部から12cmの所から、焼土が検出された。遺物は出土していない。

**17号土坑**（第37図）

グリッドd－2・3に位置する。尾根状台地の先端付近に立地する。平面形は隅丸方形、断面形は樽形である。規模は上端長軸162cm・短軸151cm、下端長軸124cm・短軸118cm、深さ33cm、軸線方向はN－89°－Eを示す。堆積状況は水平堆積である。底部から27cmの所から、焼土が81cm×36cmの範囲で検出した。

**68a号土坑**（第37・38図）

グリッドd－11・12に位置する。土坑の東側に68b号土坑が重複している。平面形は円形で、断面形は巾着形である。規模は上端長軸125cm・短軸119cm、下端長軸132cm・短軸130cm、深さ48cm、軸線方向はN－56°－Eを示す。堆積状況は三角堆土を示す。土坑の北半分からは礫と遺物が出土している。礫と土器は床直上から土坑上部まで出土しており、土坑を廃棄するときに投げ込まれたものと考えられる。土器は、縄文時代晩期後葉の条痕文土器が13点314g出土している。1点縄文後期の加曽利B1式土器があるが、混入であろう。石器は、1点、円形の横刃型石器が出土している。

## 2. 縄文時代の遺物

今回の調査により得られた土器片は、426点総重量にして7,862gを測り、復原された土器はないが、その量は3遺跡の内で最も多い。住居址内と土坑内出土遺物を中心に104点を図示した。

縄文土器の時期は縄文前期中葉縄文施文土器等、後期中葉加曽利B1式期、晩期末葉条痕文系の土器が得られている。

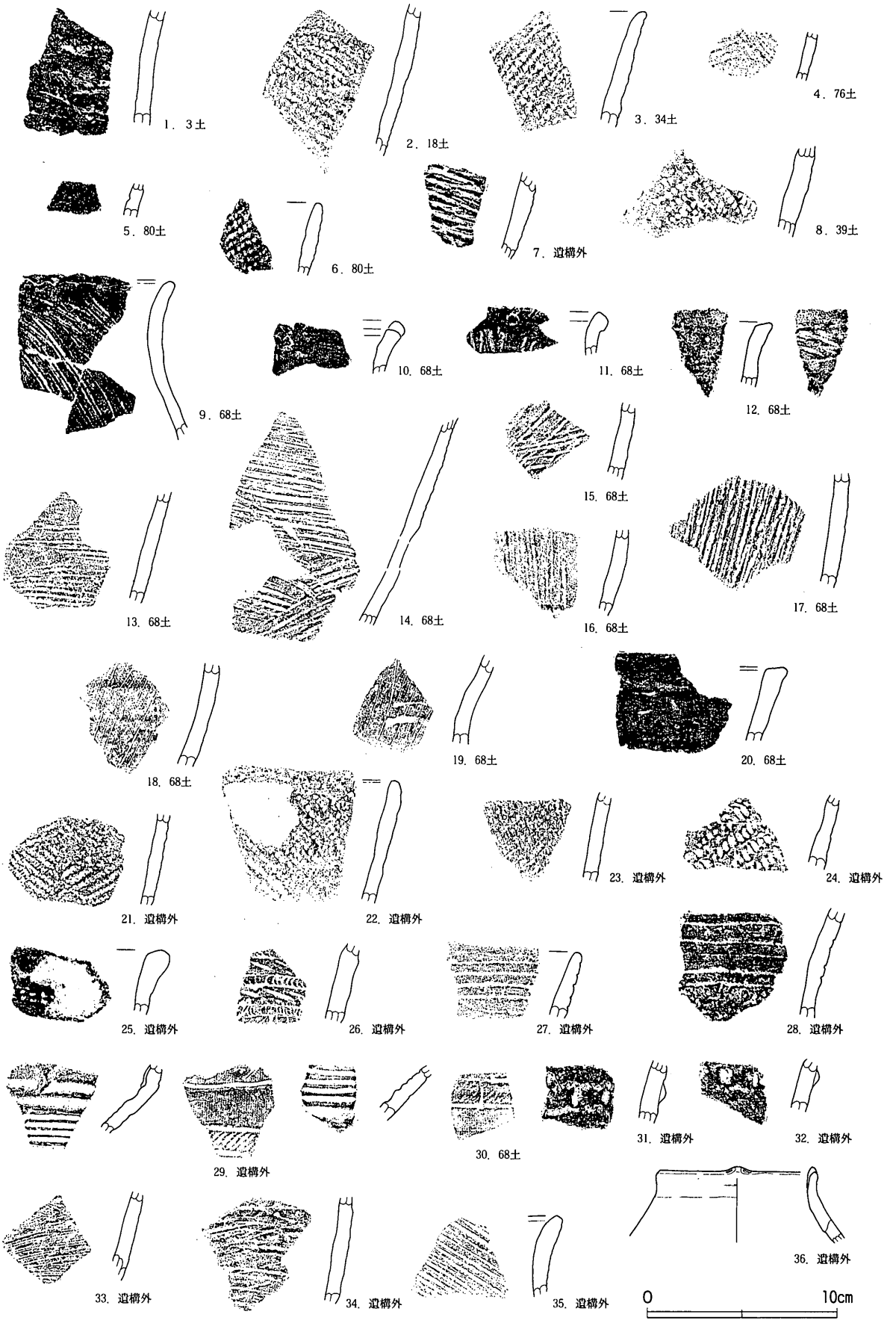
**縄文土器の出土状態：** 縄文土器は6号・12号住居址、7ヶ所の土坑から出土している。全て覆土内からの出土で埋設などの行為は認められない。

**縄文前期中葉土器の概要** 第33・34図1～44は6号住居址覆土中よりの出土。1～33は地文に縄文施文がなされる群で、34・35・38・40・41は縄文地文に付加文が施文される群である。全体器形の窺える資料はないが、23・24の底部はやや上げ底状となる。地文の縄文は無節・単節の1・2・10～18で、羽状構成と斜状構成が認められる。縄文原体末端を結束処理（7・8・10・12・14）、結節処理（17）の両者が認められる。胎土中に石英粒子や雲母粉を含むものが多く、裏面は指頭整形後横位撫でが加わりやや凹凸を呈する。

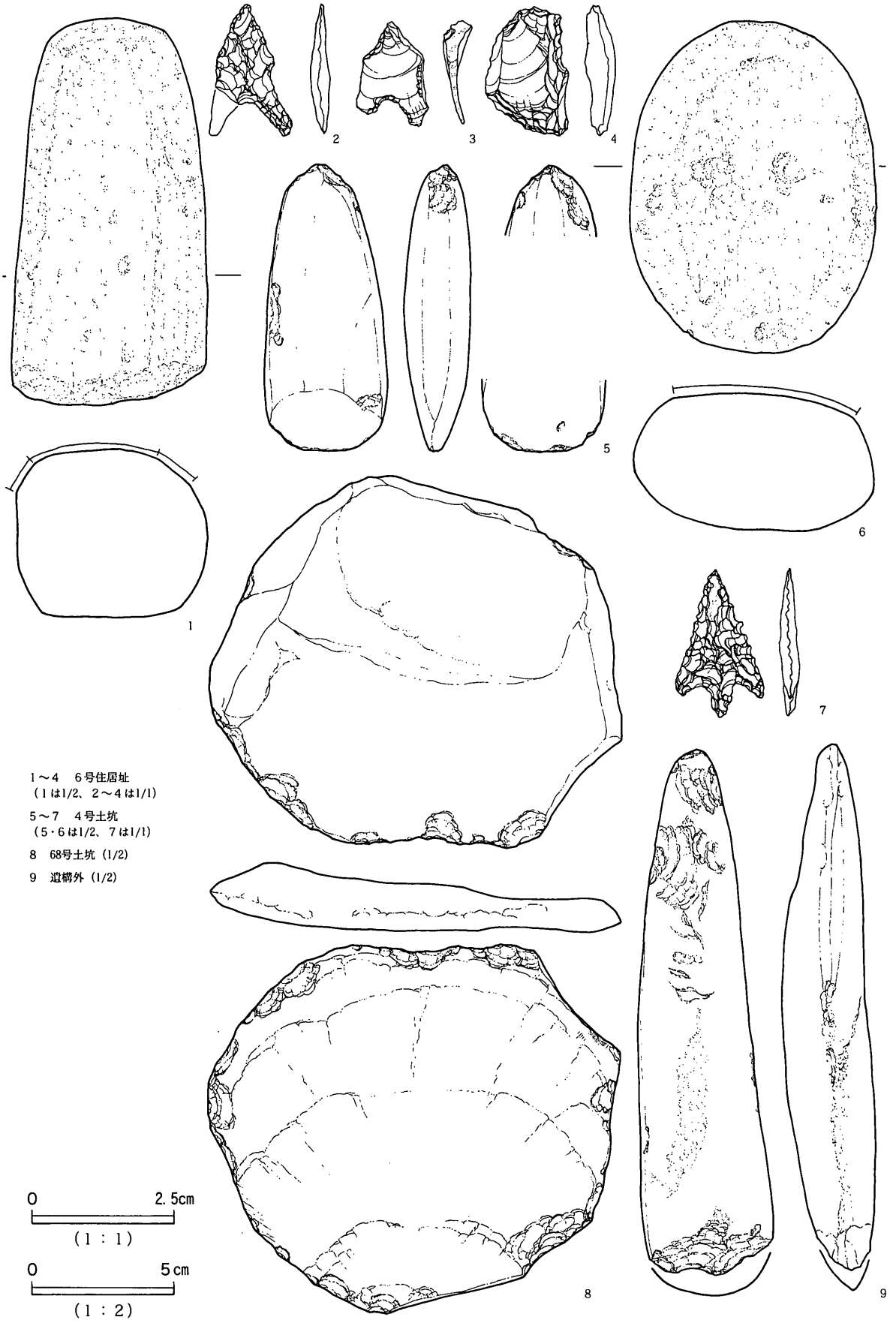
34・35・38・40・41は縄文地文に付加文施文で、34は櫛状工具による列点状刺突文、35は半截竹管状工具による密接平行沈線文、38・40は半截竹管状工具による平行沈線内に半截竹管状工具管側によるC字状爪形文、41は口縁部下に半截竹管状工具によるC字状爪形文が施文される。34はその特徴より有尾式期に帰属させることができよう。

その他の資料として半截竹管状工具による密接平行沈線文（36・37）、波状口縁となり、半截竹管状工具管側で置き留めるような形で蛇行沈線を施文する特徴的なもの（42）、焼成が堅緻で細い半截竹管状工具を2連し3字形刺突のなされる、羽島下層Ⅱ式期に帰属できる43が得られている。本址資料は後述する12号住居址とその土器群構成を比較すると、有尾式期、羽島下層Ⅱ式期の検出、半截竹管状工具による充填C字状爪形文が少量で、肋骨文が見られない点などを加味すると、有尾式期に帰属するものと考えられる。

第36図1～24は12号住居址覆土中よりの出土。1～11は地文等に縄文施文がなされる群で、12～21はこれに平行沈線やC字状爪形文が加わる群である。器形の窺える資料は1・6だけであるが、それによると胴部が直線的に開き、口縁部でやや外反する単純な器形を主体とするようであるが、10・11のように口縁部下半でややくびれ胴部に膨らみを持つものも見られる。地文の縄文の施文構成は単節縄文の1・6・7・8等の斜状構成と、2・4・9・10・11の羽状構成が認められるが、斜状構成が主体を占める。4・10は縄文原体末端を結節する。裏面は指頭整形後横位の強い撫でが加えられ、やや凹凸を呈する。1～9は胎土中に石英




第38図　土坑・遺構外出土遺物（1/3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
1～4　6号住居址
（1は1/2、2～4は1/1）
5～7　4号土坑
（5・6は1/2、7は1/1）
8　68号土坑（1/2）
9　迫樽外（1/2）
0　2.5cm
（1：1）
0　5cm
（1：2）

第39図　石　器

粒子や若干の雲母粉を含み特徴的である。10・11は同一個体と考えられ、多量の繊維を含有し、施文・胎土等の状況より黒浜式期の所産であろう。

10・12・13・15は縄文地文に付加文がなされる。10は口縁部下半に半截竹管状工具による平行沈線が施される。12・13・15は半截竹管状工具による幅の狭い平行沈線内に、半截竹管状工具管側による細かなC字状爪形文が、連続的に充填されている。この施文は14・16～21・23にも認められる。なお、13・15は文様構成が木ノ葉状入り組み構成となるものであろう。20・21は半截竹管状工具による肋骨文が施文される。10・11を除けば前期中葉諸磯a式期に帰属する資料である。

第38図1～20は土坑出土で、特に9～20は68号土坑からの資料である。1～8は縄文施文の前期前葉の土器と考えられる。9～19は晩期末葉の条痕文系の土器群である。器形の窺える資料は9で壺形を呈する。10・11は口縁部破片であるが、その状態より壺形を呈するものであろう。条痕は斜状、横位、縦状構成が認められ、刷毛目状の細密条痕が主体を占めるが、18・19のように2条1単位の細線が斜状に施文される特徴的なものが認められる。口縁部は平縁を基本とするが、9のような棒状工具による押さえがなされるもの、11のように外反し折れやや肥厚した部分に棒状工具？による引き押さえがなされるもの、10のように小突起を有するものが認められる。

21～36は遺構外からの出土土器である。29・30は後期中葉加曽利B1式期に帰属し、29は浅鉢型土器となろう。31・32は同一個体と考えられ、体部に棒状工具？による押圧がなされる凸帯が貼付される特徴的なものである。

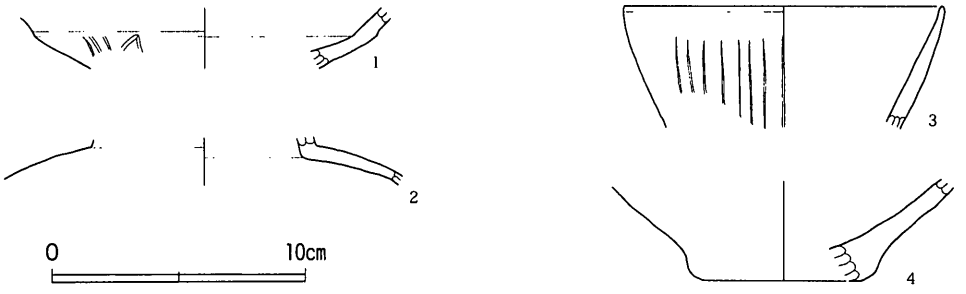
第39図1～9は本遺跡から得られた石器の全てである。1～4は6号住居址出土で、前期中葉に帰属されよう。多面体の棒状磨石、石鏃1、石鏃ブランク1、両極打法により生じた剥片1の構成で、3のような黒耀石剥片素材に、簡単な調整を加えただけの石鏃ブランクが見られる。5～7は4号土坑からで7の有茎石鏃は晩期の特徴的な石器である。一部に黒耀石素材の自然面を有するが、側縁には鋸歯状の特徴的な調整がなされ、鋭利な製品となっている。8は68号土坑出土で供伴する土器から晩期末葉のものと考えられる。自然面とポジティブな主要剥離面を有する貝殻状の大型剥片を素材としている。刃部は鋭い素材縁辺を活かしているが、擦痕状の磨痕が一部に観察される。また、主要剥離面にも磨滅状の痕跡と特徴的な光沢が認められこの石器の使用状況を物語っている。

**蟹畑遺跡の縄文時代の特徴**　蟹畑遺跡から今回縄文前期中葉、後期中葉加曽利B1式期、晩期末葉の資料が得られている。蟹畑遺跡は沖積地に立地する中村遺跡、外垣外遺跡を臨む麻浸川河岸段丘状のテラス状台地に立地しているおり、他の遺跡とは立地に異なりをもつ。特に前期中葉の小規模な集落が営まれたことに特徴がある。6号・12号住居址が該期の住居址であるが、出土土器より6号住居址が有尾式期、第12号住居址が諸磯a式期と若干の時間差を有していることが把握された。これらの住居址からは、市域の同時期の住居址に比較して黒耀石の出土量が少ない点に特徴を見いだすことができ、前期中葉の小規模な遺跡であることが想定される。

また、晩期末葉の土坑の検出は本遺跡の特性を示しているかと考えられ、単なる遺物の散布地としての性格ではなく、周辺で同期の集落である御社宮司遺跡に付随する生産域的な性格を与えることができよう。

## 第2節　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物を4点確認している（第40図）。1は、高坏の坏部の下側である。胎土は褐灰色で、表面は赤色である。表面には鋸歯状に磨き目が見られる。9号住居址内から検出した。2は甕の肩部であろう。胎




第40図　古墳時代の遺物（1/3）

土は鈍い橙色で、褐鉄鉱を多く含んでいる。これも、９号住居址内から出土している。３は坩の口縁部である。胎土は橙色で、褐鉄鉱・長石を多く含んでいる。外面は縦方向に磨き目が見られる。これは、12号住居址周辺から出土している。４は鉢か坏の底部か。胎土は橙色で、長石を多く含んでいる。内面に煤が若干付着している。11号住居址周辺より出土している。古墳時代の遺物は少量ながら出土しているため、遺構は見つからなかったが、付近か、または遺構外に古墳時代の遺構があった可能性を伺わせる。

## 第３節　平安時代の遺構と遺物

### 1. 住居址

平安時代の住居址を９軒検出している。住居址は、尾根状台地の西に寄って検出され、西側の谷へ落ちる斜面から３軒の住居址が確認された。尾根状台地の中央付近の住居址でも、いずれも西側に偏在している。

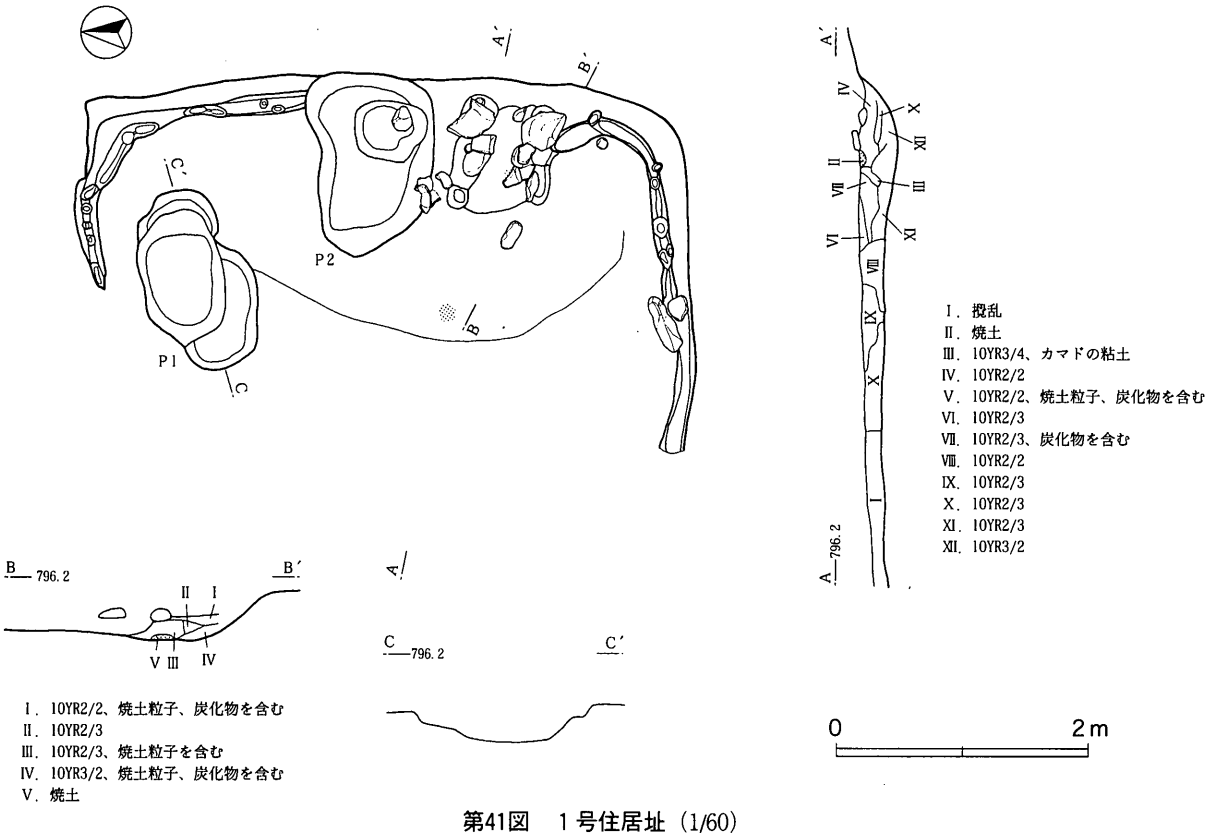
**１号住居址**（第41・42図・図版７－１・２）

**遺構の構造**　グリッドa・b－９・10に位置する。住居址の立地は、尾根状台地の西側斜面より、若干尾根の中心に近い。住居址の西半分は耕作による攪乱で、壁面や床面は残っていない。東半分は180cm×370cmの範囲で貼り床が見られた。住居址の規模はわかっている範囲で、東西方向240cmである。残っている壁面は、東側が全面的に残っており、16cmと非常に浅い。周溝はカマドとＰ２を除く部分から検出されている。

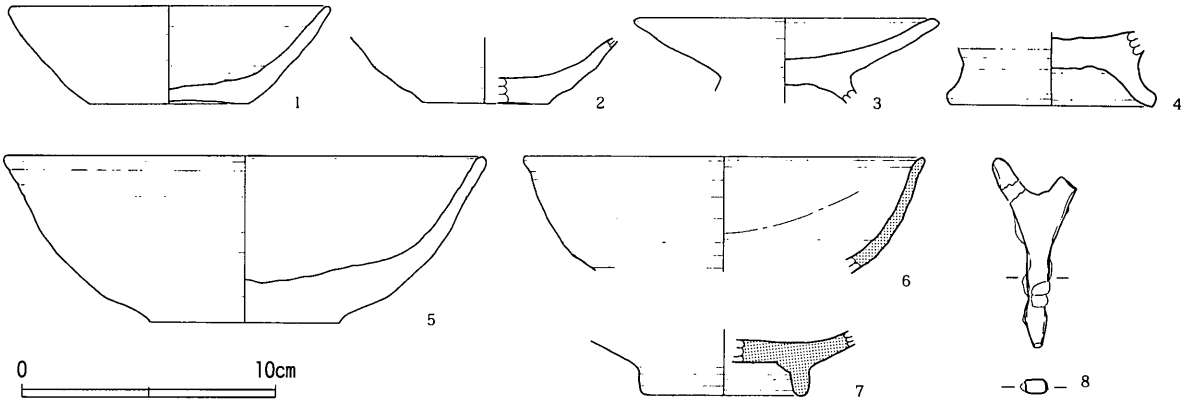
カマドは住居址の東側のやや南寄りの壁際から検出されており、住居址の外部までは張り出していない。焼土は４cmの厚さで検出されているが、出土範囲は小さい。袖石はカマドの奥の両脇に残っているが、前部は石がかなり移動している。石を抜いた後、カマド袖石の掘り方が検出されている。袖石の一部と岩が得られる礫が、住居址南側壁面で検出されている。

柱穴と思われる土坑は検出されていない。住居址内の土坑は、Ｐ１とＰ２で、ともに少量の遺物を検出している。カマドの前部で15cmほどの小さい焼土を検出している。カマドとは若干離れてはいるが、カマドに関連する焼土であると思われる。

**遺物の検出状況**　出土遺物の大部分は破片である。図示できたのは８点である。出土遺物の個体数は次の通りである。供膳具として土師器皿２個体分、坏19個体以上、高台付坏５個体分、柱状高台の坏１個体、鉢１個体分、黒色土器高台付坏１個体分、両面黒色土器高台付坏１個体分、灰釉陶器の椀５個体分が出土している。煮沸具は、土師器甕の胴部が出土しているが、胴部だけなので、個体数は不明である。22は器面に櫛掻きを施しているが、ほとんどはナデ整形である。貯蔵具はＰ２内より須恵器甕１個体分、灰釉陶器瓶４個体分が出土している。遺物組成は、土師器坏が最も多い。灰釉陶器の出土量は多く、瓶の破片も見られる。遺物はカマド周辺で最も多く出土し、Ｐ２で・Ｐ３でも若干検出している。黒色土器の出土量が非常に少ない。特殊な遺物では、焼成粘土塊が１、丸石が１、鉄製の雁又鏃が１が出土している。時期は異なるが、内耳土




第41図　1号住居址（1/60）




第42図　1号住居址出土遺物（1/3）

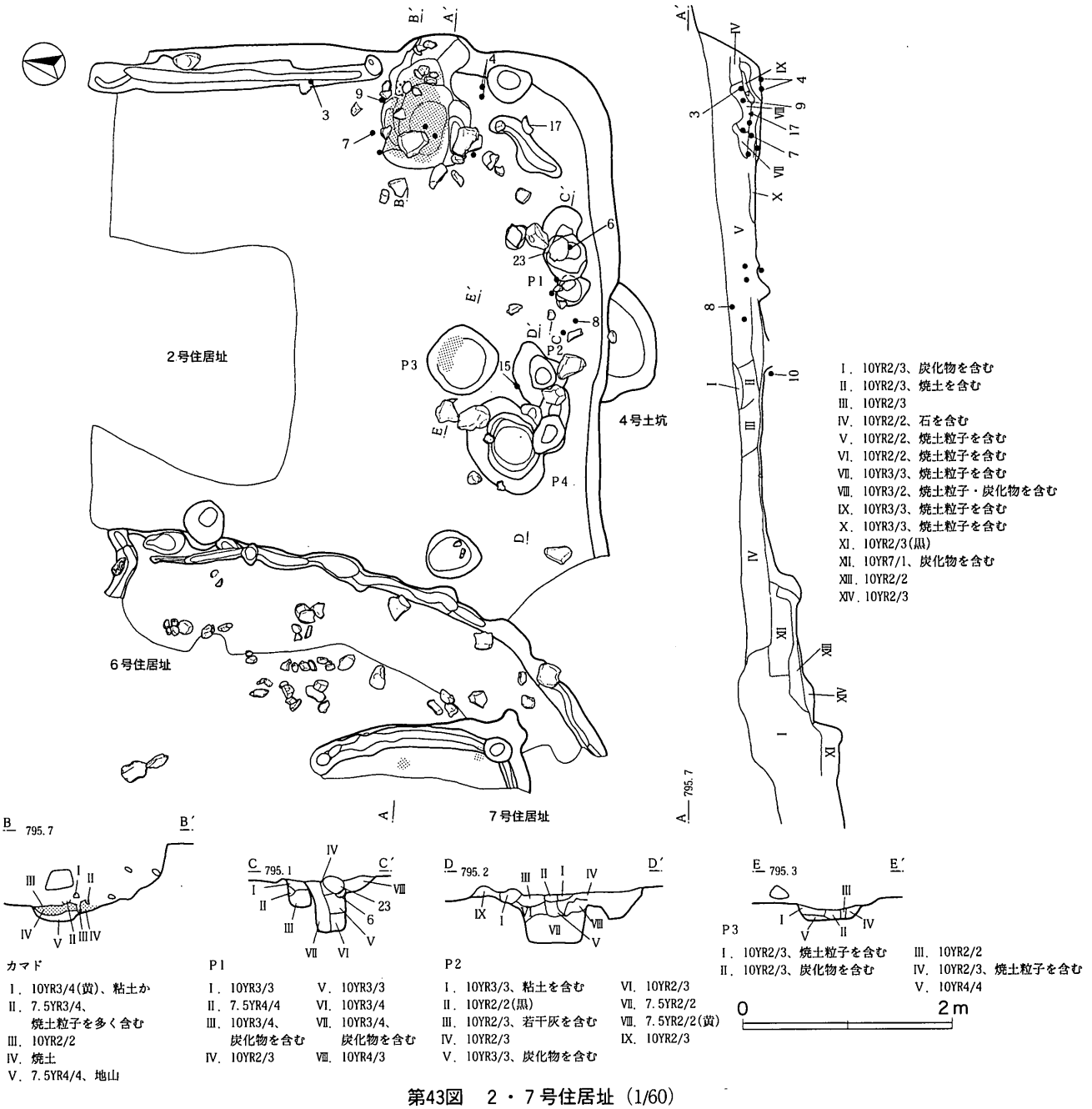
器の出土も見られる。

**遺構の時期**　出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

**2号住居址**（第43・44図・図版7－3～7）

**遺構の構造**　グリッドa・b－7・8に位置する。遺構の立地は、尾根状台地の肩部の平地から斜面に移行する場所である。西側は6号住居址と切り合っている。また、東側では4号住居址を切っている。住居址のプランは、西側は斜面で不明であり、北側は耕作により破壊されている。壁は東側と南側で残存し、60cmの壁面が見られる場所がある。残存している床面は、堅い貼り床である。

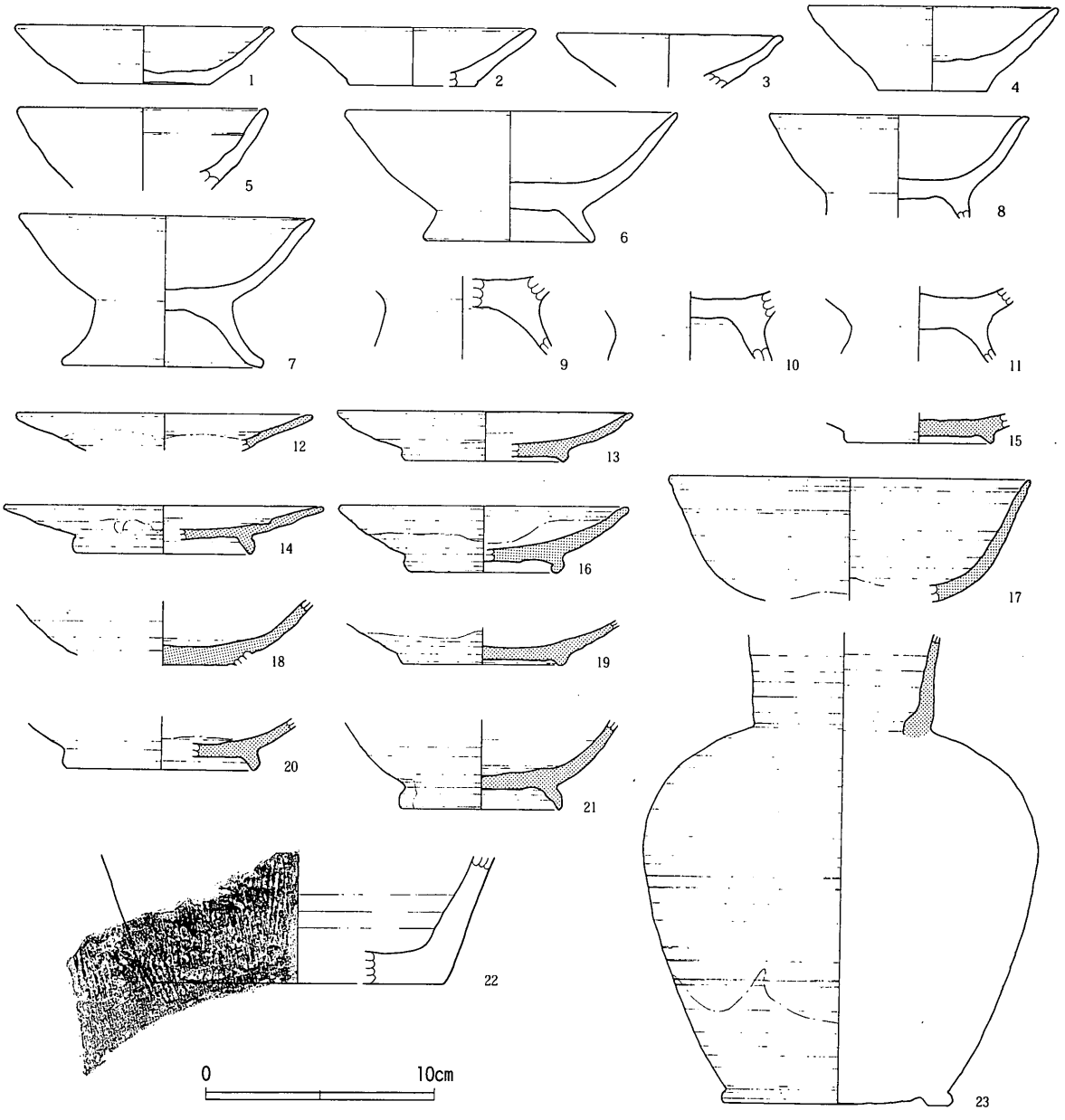
カマドは東壁やや南寄りから検出している。袖石の残りは悪く、住居址南側に見られる礫が袖石の残骸と考えられる。カマド南側に粘土が見られるところから、石組み粘土カマドであったと思われる。焼土址はもう1ヶ所で見られ、P3の中から検出された。P4の南側からは50cmの範囲にわたって粘土が検出されたところから、古いカマドであると考えられる。




**第43図　2・7号住居址**（1/60）

柱穴と考えられる遺構は明確ではないが、おそらくP2がその一つではないかと考えられる。P1からは23の灰釉陶器の瓶と6の土師器高台付坏が1枚が出土している。

**遺物の検出状況**　遺物はほとんど破片で出土している。そのうち図示できたのは23個体である。出土遺物の個体数は、供膳具では灰釉陶器皿7個体分、段皿2個体分、椀9個体分、土師器皿3個体分、坏26個体分、高台付坏15個体、黒色土器坏1個体、高台付坏2個体分、煮沸具では土師器甕が2個体分、小型甕が1個体分、貯蔵具では須恵器甕9個体分、灰釉陶器瓶4個体分が出土している。特殊な遺物として丸石1と焼成粘土塊1が出土している。他の住居址に比べて、灰釉陶器の量が多いのが特徴である。最も多いのは1号住居址同様土師器であるが、高台付坏の量が多い。高台付坏には7のような高台の高いものが見られる。黒色土器は1号住居址同様少ない。この黒色土器の中には、放射状の暗文を持つものがある。23の灰釉陶器瓶は、ほぼ完形で出土し、口縁部は打ち欠かれている。出土状況は、土坑に正位で埋められ、底部を受けるように、




**第44図　2号住居址出土遺物（1/3）**

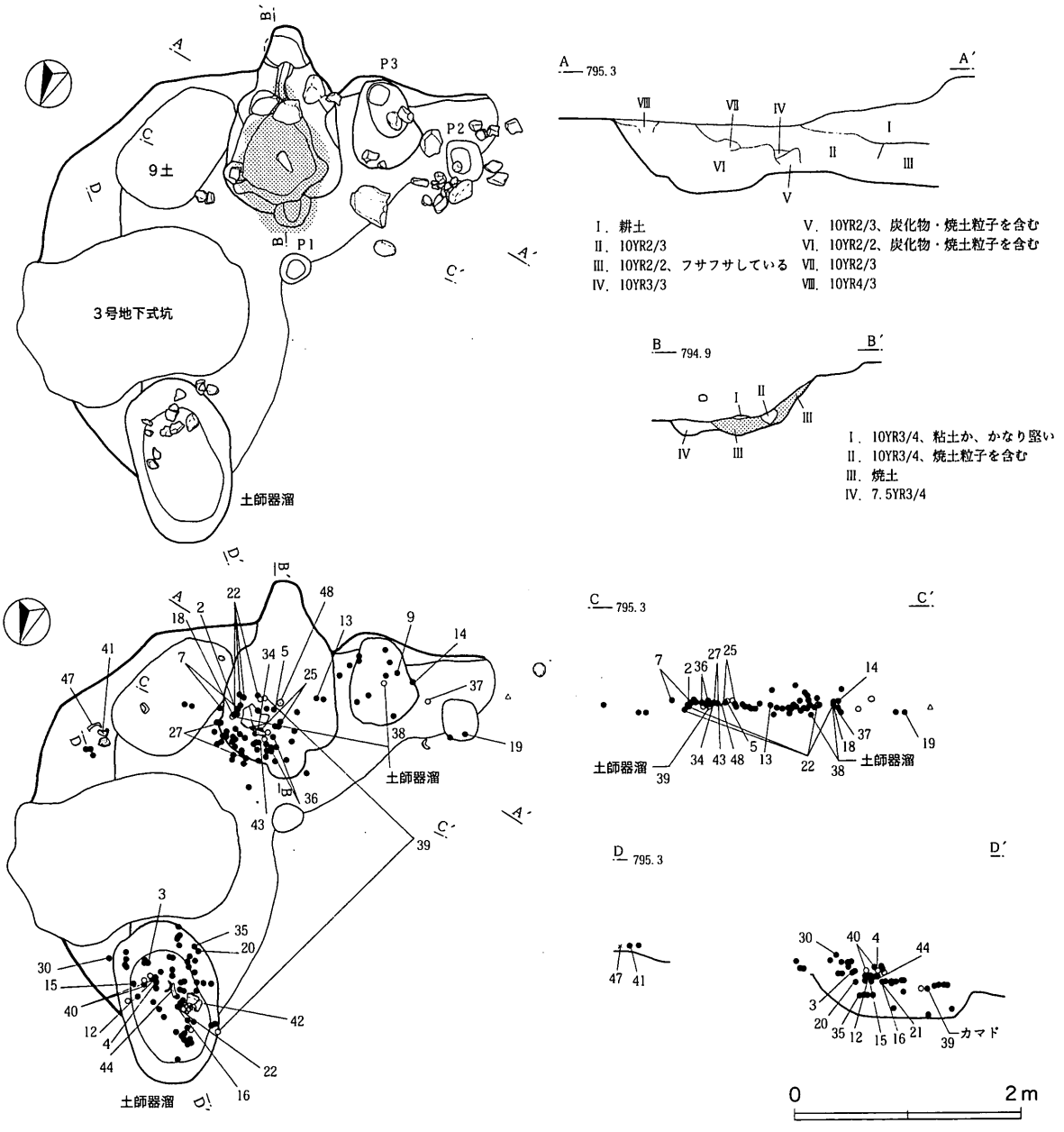
下方に6の土師器高台付坏が重なっていた。その他、時期は異なるが、内耳土器が出土している。

**遺構の時期**　出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

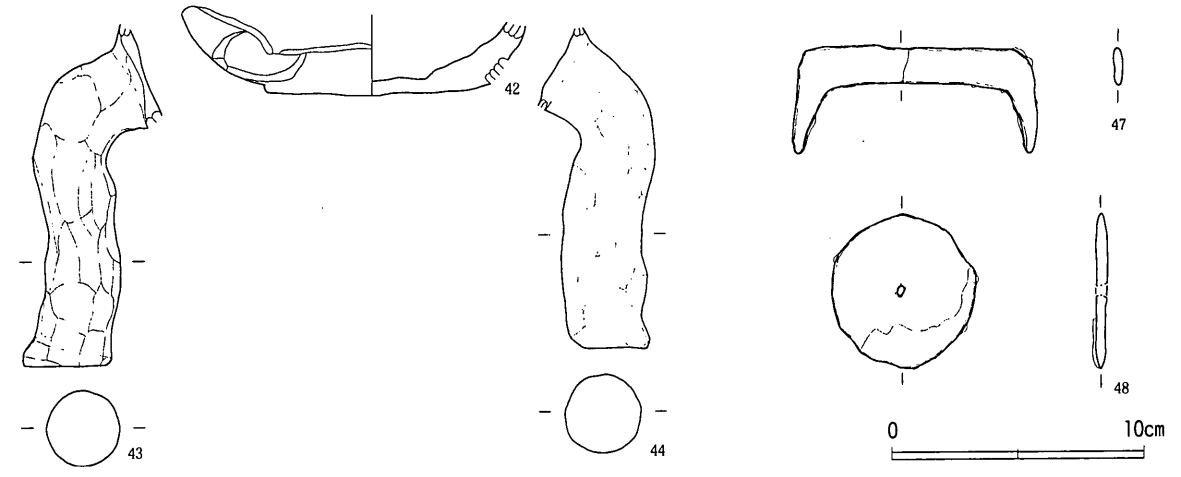
**3号住居址**（第45・46・47図・図版8）

**遺構の構造**　グリッドa・b－4・5に位置する。尾根状台地の西側斜面に立地している。そのため、住居址のほぼ半分は斜面により不明である。3号住居址は、3号地下式坑、9号土坑と切り合っている。3号地下式坑は中世で、9号土坑は縄文時代と考えられ、3号住居址は4号地下式坑に切られている。住居址プランは前述の通り明らかではないが、南側の壁面がかろうじて残っており、深さ42cmとかなり深くなっている。土師器溜まり付近で住居址の北西壁が収束しているような感じではあるが、あまり明瞭ではなく、土師器溜りは、後述するように本住居址に付属するものと考えられるため、実際の壁の位置は異なるのではないかと考えられる。

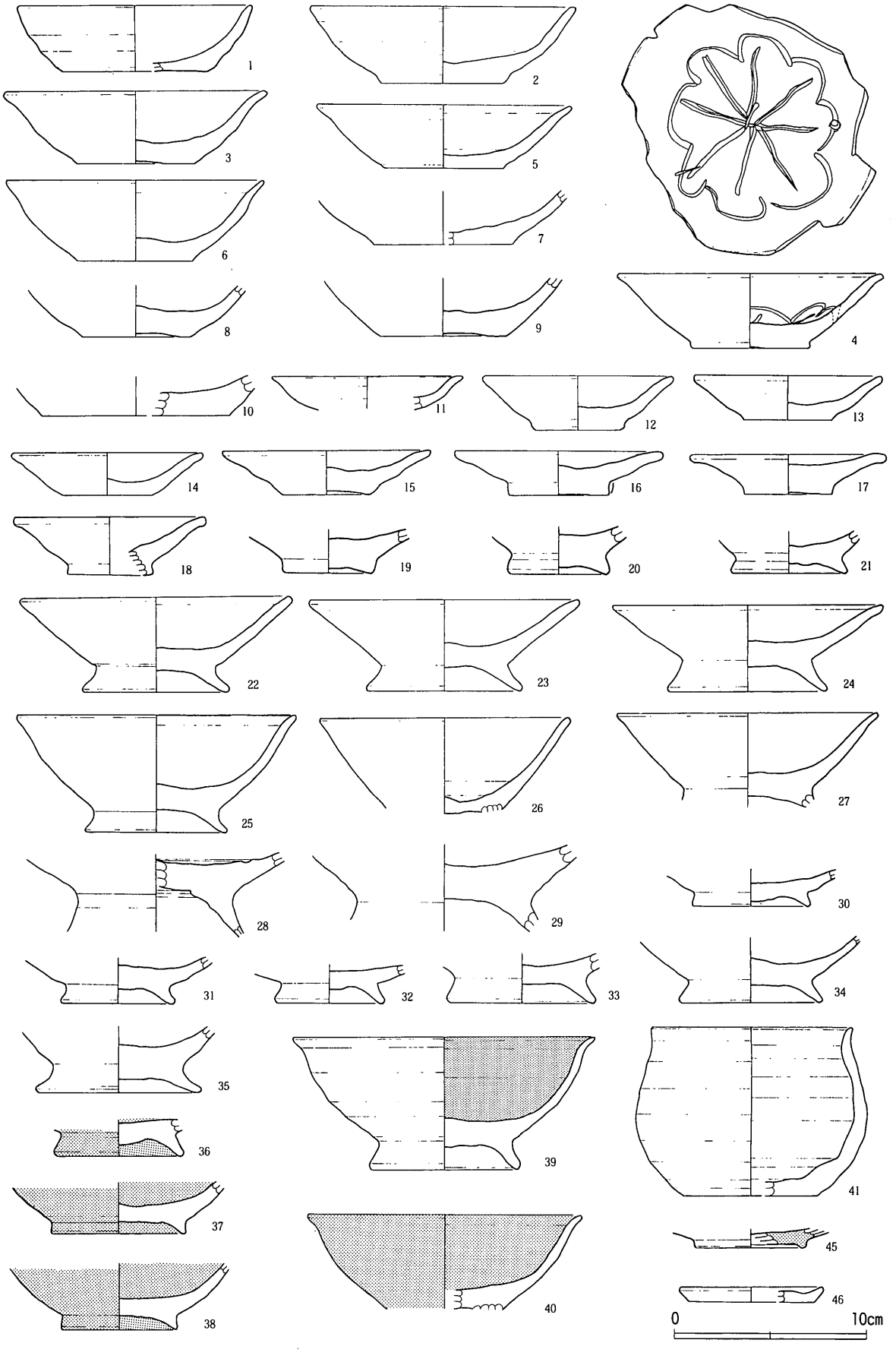
カマドは南壁にある。袖石の石組みは失われてしまっている。焼土は15cmと非常に厚い。焼土に被さるように粘土が検出され、石組み粘土カマドであったと考えられる。この周辺から大量の遺物が検出されている。




第45図　3号住居址（1/60）




第46図　3号住居址出土遺物(1)（1/3）




第47図　3号住居址出土遺物(2)（1/3）

また、カマドの付属施設と考えられるＰ３が西側にある。

柱穴と思われる遺構は明瞭ではないが、形状からＰ１とＰ２ではないかと考えられる。Ｐ１はカマドのほぼ前方に位置し、口径28cm・底径16cm・深さ23cmである。Ｐ２はカマドの東側に位置し、口径40cm・底径22cm・深さ25cmである。

住居址北側に土師器溜りがあり、大量の土師器を検出している。土師器溜りは、土坑の中にあり、この土坑の上端長軸は、142cm・短軸83cm、下端長軸98cm・短軸61cm、深さ40cmである。出土遺物の中には、カマドやＰ３内出土のものと接合するため、本住居址に付属する遺構と考えられる。

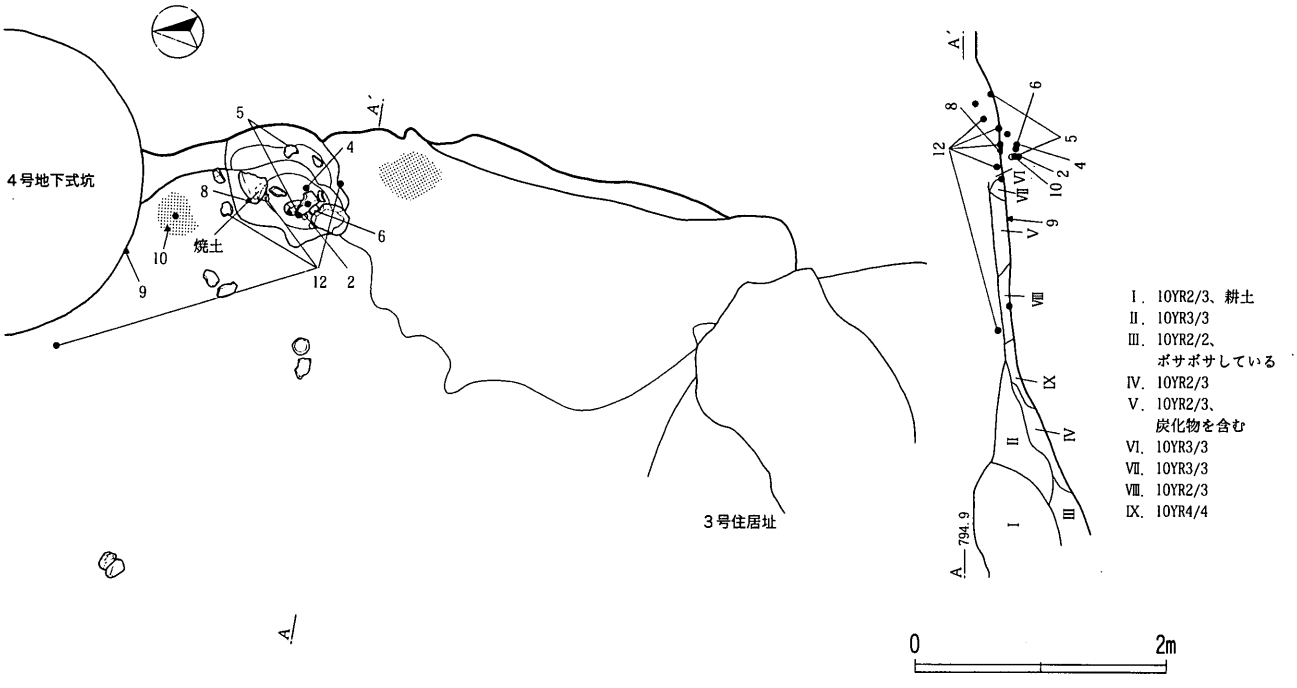
**遺物の検出状況**　遺物は、カマドと土師器溜りに集中して出土している。図示できる遺物は多く、48点を図示した。遺物の組成は、供膳具で、土師器坏口縁部55個体分・底部61個体分・部分的にでも口縁部から底部まである坏が９個体・ほぼ完形が１個体と最も多い。坏の中には、器高の浅い皿状の坏が出現し、擬似高台と言われる、高台を柱状に切り残した坏も見られるようになる。坏以外の土師器では、皿５個体分・高台付坏32個体分・盤１個体と、坏に続いて、高台付坏が多い。その他では、黒色土器坏１個体・高台付坏７個体・両面黒色土器坏１個体・高台付坏６個体、灰釉陶器皿１個体・椀２個体が出土しているが、圧倒的に、土師器坏と高台付坏が多く、灰釉陶器の出土量が他の住居址に比べて少ない。煮沸具では、土師器甕１個体・小型甕１個体・鼎３個体、貯蔵具では、灰釉陶器瓶１個体・須恵器甕１個体が出土している。その他の遺物では、焼成粘土塊２・麻皮剥器１・紡錘車１・丸石１が出土している。土師器は前述の通りカマドと土師器溜り内からほとんど検出されている。第47図39の黒色土器はカマドと土師器溜り両方から、鼎は第46図42・44が土師器溜りから、第43図43がカマドから検出されており、土師器溜まりと住居址が同時に存在していた証左となろう。麻皮剥器（第46図47）は住居址南東隅から出土し、紡錘車（第46図48）はカマド中から出土している。紡錘車は、住居址廃棄時に土師器坏とともに儀礼が行われて、置かれた物と考えられる。遺物の組成から、供膳具、特に土師器類の量が圧倒的に多いことから、住居址を廃棄するときに、盛大な儀礼が行われたことがわかる。また、非常に特殊な遺物として、第47図４の土師器坏がある。４は、土師器内面に線刻で花弁状に模様が描かれており、一つ１㎜ほどの穿孔がある。口縁部分はおそらく故意に打ち欠いたと思われる。穿孔については、吊した穴かと考えられたが、特に擦痕は認められなかった。しかし、他には見られない遺物のため、何らかの儀式に使われたと考えられる。土器組成の中で、煮沸具や貯蔵具が少ないのは、この住居址がかなり特殊な性格を持った遺構であったか、廃棄するときに、別の場所へ移動した可能性が考えられる。

**遺構の時期**　出土遺物から11世紀中葉と考えられる。

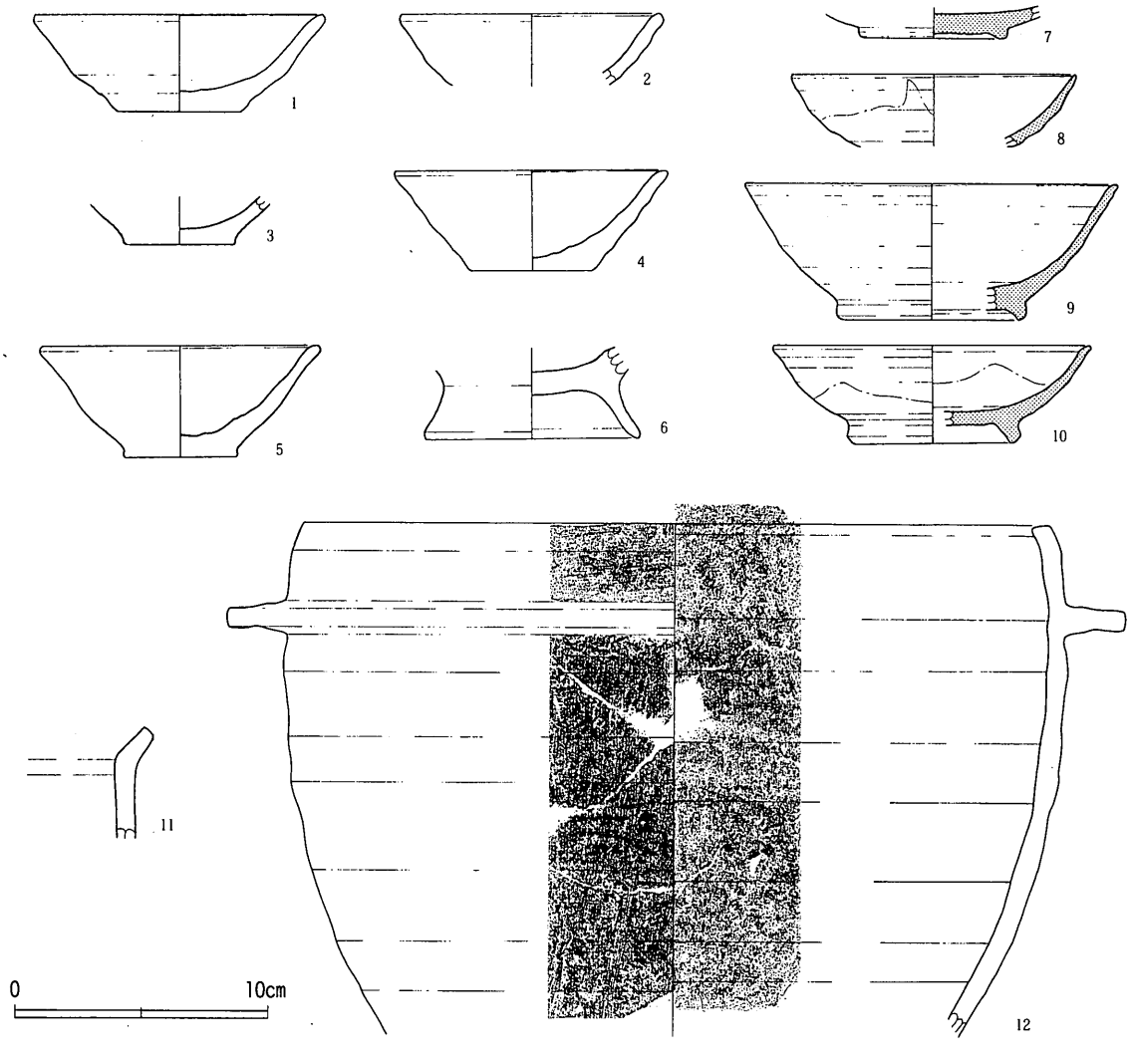
**４号住居址**（第48・49図・図版９－１・２）

**遺構の構造**　グリッドａ・ｂ－４・５に位置する。尾根状台地の西側斜面に立地する。そのため、住居址のほぼ半分は斜面によってなくなっている。住居址は３号住居址と４号地下式坑と切り合っている。東側壁面がかろうじて確認できるが、12cmと非常に浅い。床面は東側に150cm×360cmの範囲で残存している。この床面は、堅緻である。焼土が２ヶ所から検出されているが、カマドと考えられる掘り方の両脇より出土している。カマド内より若干の焼土を検出している。カマドの位置は、東壁北寄りであり、住居址東壁面からはあまり出ていない。カマド内から礫が出土し、カマドの袖石であると考えられる。柱穴や、住居址に付属する土坑は検出されていない。

**遺物の検出状況**　遺構の検出面が表土から非常に浅く、耕作により遺物は散乱してしまったと思われる。その中で、カマド内及び周辺より、若干の遺物が検出できた。供膳具では、土師器坏底部が12個体分、高台付




第48図　4号住居址（1/60）




第49図　4号住居址出土遺物（1/3）

坏１個体、黒色土器坏１個体分、灰釉陶器皿１個体、椀９個体が出土している。土師器坏と灰釉陶器皿がほぼ同じ比率で出土している。貯蔵具では灰釉陶器瓶１個体、煮沸具では土師器甕６個体、羽釜２個体分出土している。甕は実測できる物はなかった。

**遺構の時期**　出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

**５号住居址**（第50・51図・図版９－３～５）

**遺構の構造**　グリッドａ・ｂ－２・３に位置する。尾根状台地の西側斜面肩口に立地する。住居址のほぼ中央に２号地下式坑、西側に10号土坑がある。２号地下式坑は中世の遺構と考えられるため、本住居址より新しいが、10号土坑の時期は不明である。住居址のプランは隅丸方形と考えられるが、西側が斜面のため、壁が検出できなかった。また、北側の壁は黒色土のため、明確なプランを確認することはできなかった。住居址東壁は残りが良好で、40cmの深さがあった。周溝と思われる遺構は、住居址北側で検出されたが、他の場所からは確認できていない。柱穴と考えられる遺構は、Ｐ１のみで、他には検出できなかった。柱穴以外の土坑では６土がある。６土は平面形が不整形、断面形が樽形で、規模は上端長軸90cm・短軸54cm、下端長軸62cm・短軸44cmである。

カマドは南東隅から検出され、住居址の東壁より72cm突出している。カマド内から多くの礫を検出し、カマドの構築材と考えられる。また、焼土を検出し、10cmの厚さがあった。カマドの他に、西側から焼土を検出した。40cm四方で、深さが８cmである。カマドであったような掘り方は検出されず、カマドとは異なる用途で使用された焼土であると考えられる。

**遺物の出土状況**　遺物はカマド周辺より散発的に出土し、量は非常に少ない。供膳具は、土師器坏が４個体分、灰釉陶器椀２個体分、煮沸具は、土師器甕３個体分、貯蔵具は、須恵器甕２個体分、瓶１個体分である。遺物は、主にカマド内部とその周辺から出土している。

**遺構の時期**　時期を判断できる出土遺物はなく、不明である。

**７号住居址**（第43・44図・図版９－６・７）

**遺構の構造**　グリッドａ－８に位置する。尾根状台地の西側斜面に位置する。２号住居址と６号住居址と重複する。遺構は斜面のため、住居址の東北隅しか検出できなかった。壁面は30cmで、周溝が確認できた。元のカマドの位置と考えられる場所から20cm程の焼土が２ヶ所検出された。

**遺物の出土状況**　７号住居址は、２号住居址と近接しているところから、かなり２号住居址の遺物が混入していると思われる。７号住居址内にあったと思われる遺物のみを取り上げると、供膳具は土師器坏３個体分・高台付坏１個体分・灰釉陶器椀１個体分、貯蔵具は須恵器甕２個体分（第44図22）が出土している。

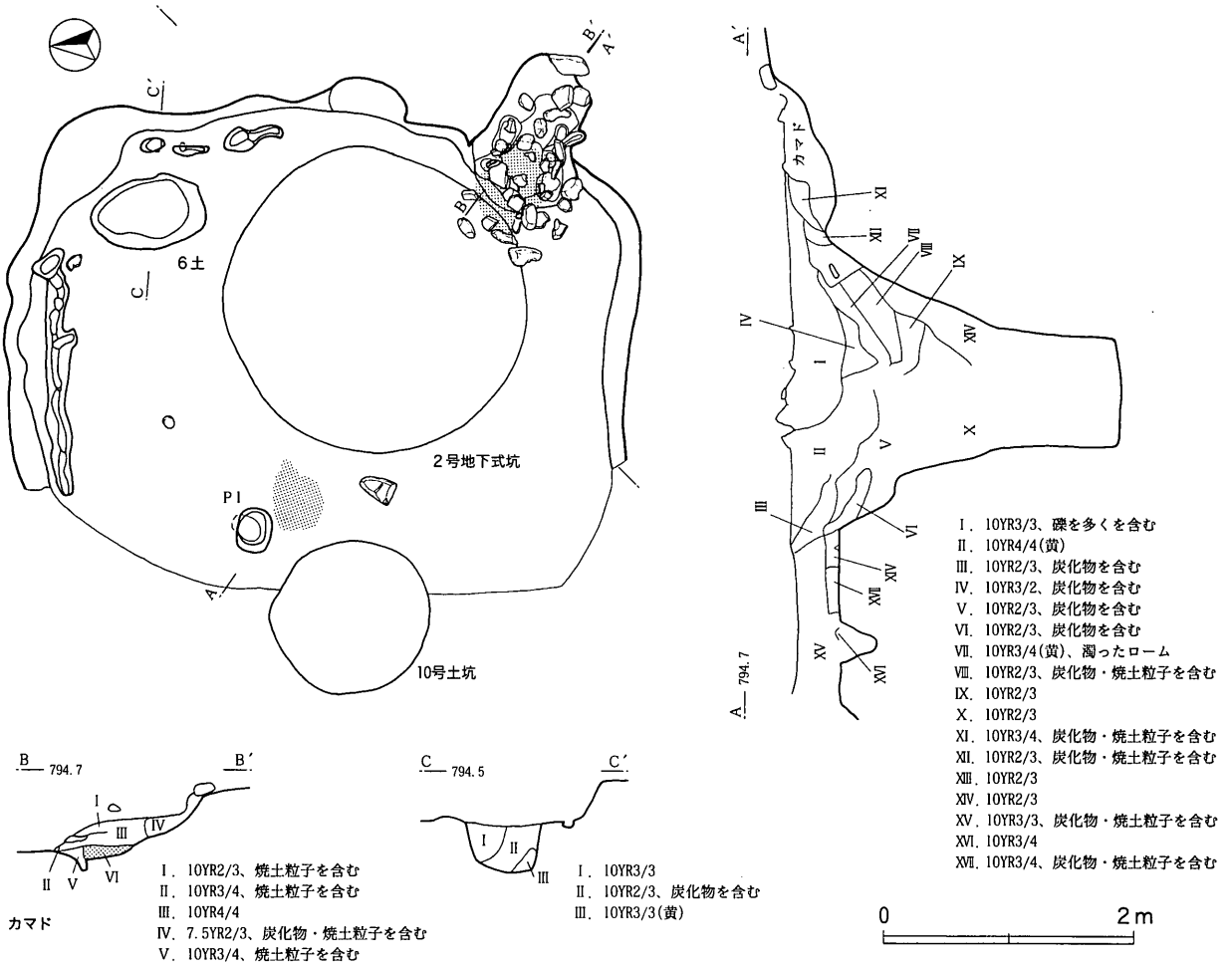
**遺構の時期**　時期を判断できる出土遺物が無く、不明である。

**８号住居址**（第52図・図版10－１～３）

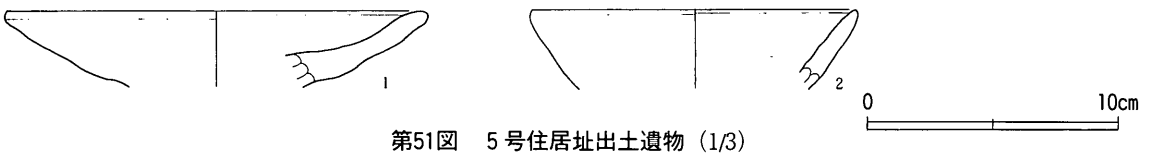
**遺構の構造**　グリッドｂ・ｃ－11・12に位置する。尾根状台地の西側に位置する。耕作による攪乱で、南東隅の部分が検出された。カマドは住居址南東隅にある。カマドの掘り方と住居址の中央部から、堅緻な面が検出され、貼り床がなされていたことがわかった。カマドからは80cmの範囲にわたって、焼土が検出されたが、粘土の出土は見られなかった。焼土の厚さは４cmである。

**遺物の出土状況**　住居址の残存状況が悪かったため、遺物の出土量はかなり少なかった。遺物はカマドを中心に検出された。供膳具は土師器坏２個体分・高台付坏２個体分・灰釉陶器椀２個体分、煮沸具は、土師器甕５個体分・小型甕１個体、貯蔵具では須恵器の壺が１個体分出土している。そのうち、３個体を図示した。

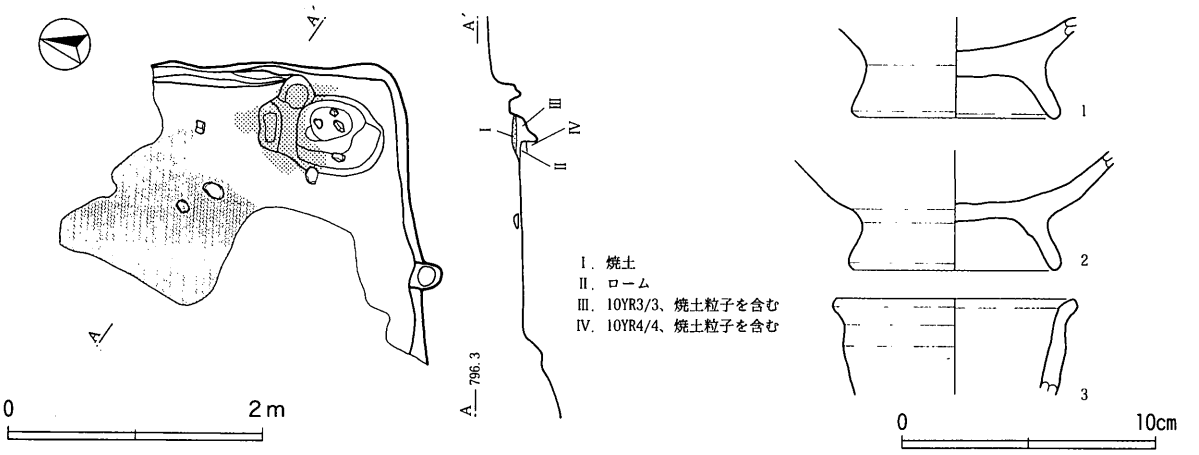
**遺構の時期**　出土遺物から、11世紀前葉と考えられる。




第50図　5号住居址（1/60）



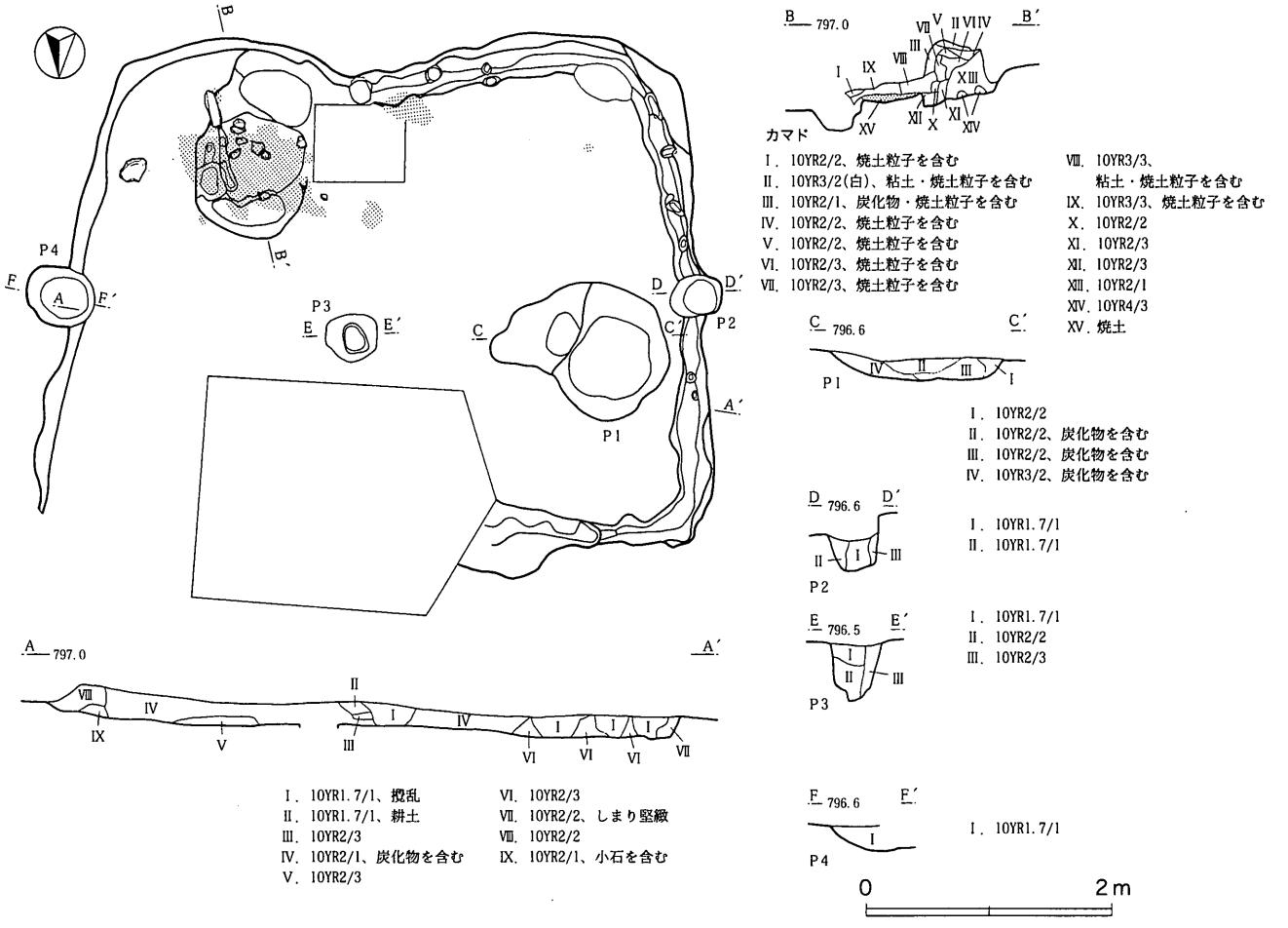

第51図　5号住居址出土遺物（1/3）




第52図　8号住居址（1/50）と出土遺物（1/3）

**9号住居址**（第53・54図・図版10－4・5）

**遺構の構造**　グリッドc・d・e－9・10に位置する。尾根状台地ほぼ中央に位置する。おそらく12号住居址の一部と重複すると考えられる。住居址内に立木および境界杭があるため、一部発掘できなかった。住居址




Ⅰ．10YR2/2、焼土粒子を含む
Ⅱ．10YR3/2(白)、粘土・焼土粒子を含む
Ⅲ．10YR2/1、炭化物・焼土粒子を含む
Ⅳ．10YR2/2、焼土粒子を含む
Ⅴ．10YR2/2、焼土粒子を含む
Ⅵ．10YR2/3、焼土粒子を含む
Ⅶ．10YR2/3、焼土粒子を含む
Ⅷ．10YR3/3、粘土・焼土粒子を含む
Ⅸ．10YR3/3、焼土粒子を含む
Ⅹ．10YR2/2
Ⅺ．10YR2/3
Ⅻ．10YR2/3
ⅩⅢ．10YR2/1
ⅩⅣ．10YR4/3
ⅩⅤ．焼土

Ⅰ．10YR2/2
Ⅱ．10YR2/2、炭化物を含む
Ⅲ．10YR2/2、炭化物を含む
Ⅳ．10YR3/2、炭化物を含む

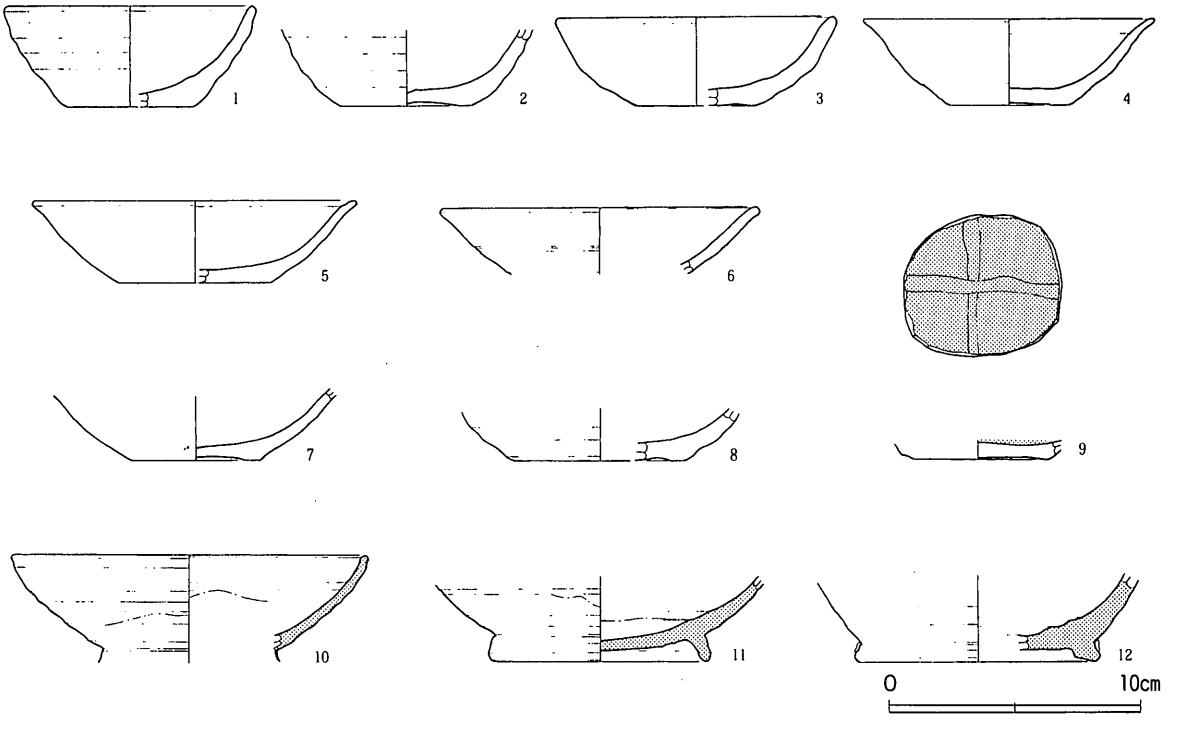
Ⅰ．10YR1.7/1
Ⅱ．10YR1.7/1

Ⅰ．10YR1.7/1
Ⅱ．10YR2/2
Ⅲ．10YR2/3

Ⅰ．10YR1.7/1

Ⅰ．10YR1.7/1、攪乱
Ⅱ．10YR1.7/1、耕土
Ⅲ．10YR2/3
Ⅳ．10YR2/1、炭化物を含む
Ⅴ．10YR2/3
Ⅵ．10YR2/3
Ⅶ．10YR2/2、しまり堅緻
Ⅷ．10YR2/2
Ⅸ．10YR2/1、小石を含む

第53図　9号住居址（1/60）

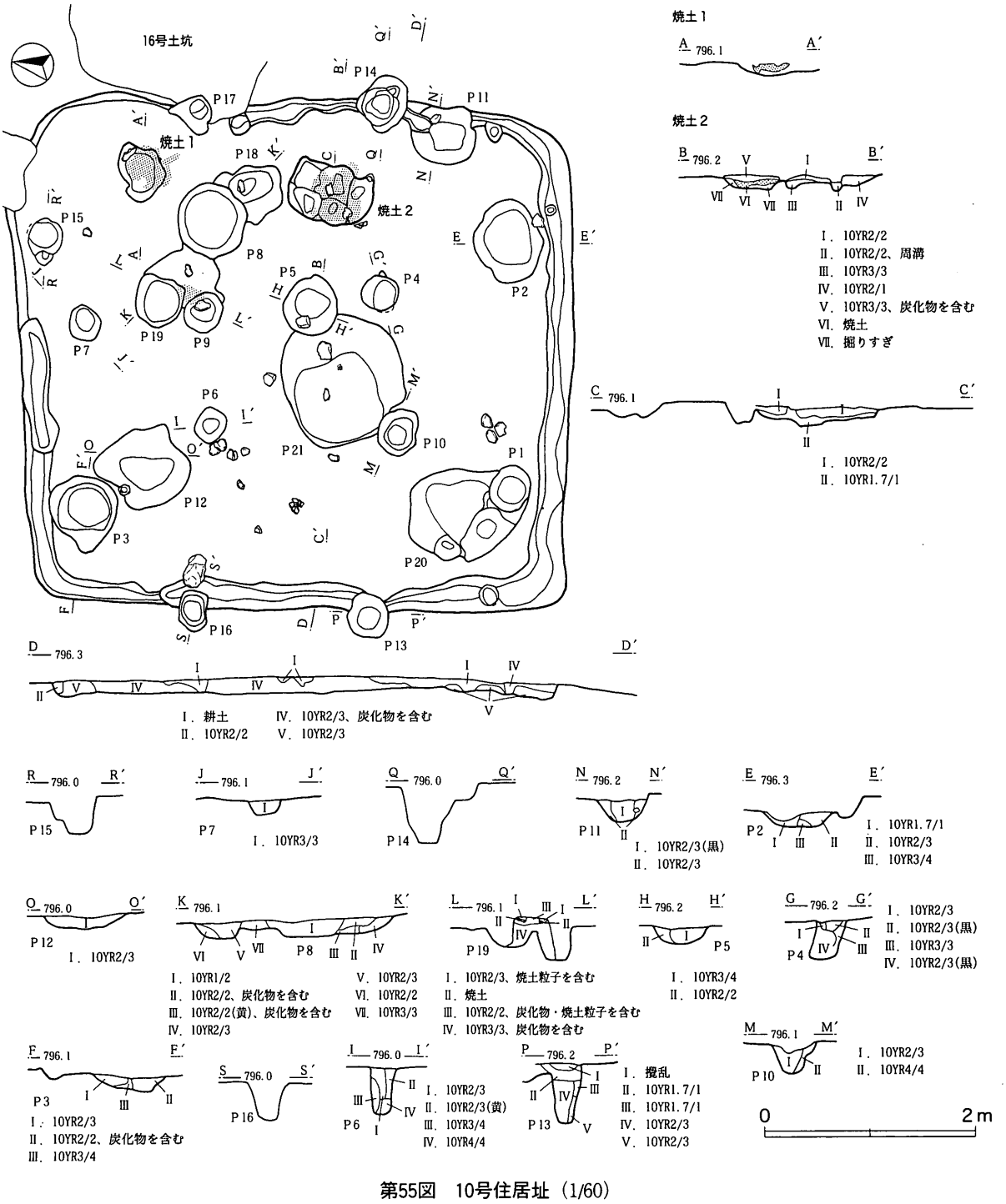



第54図　9号住居址出土遺物（1/3）

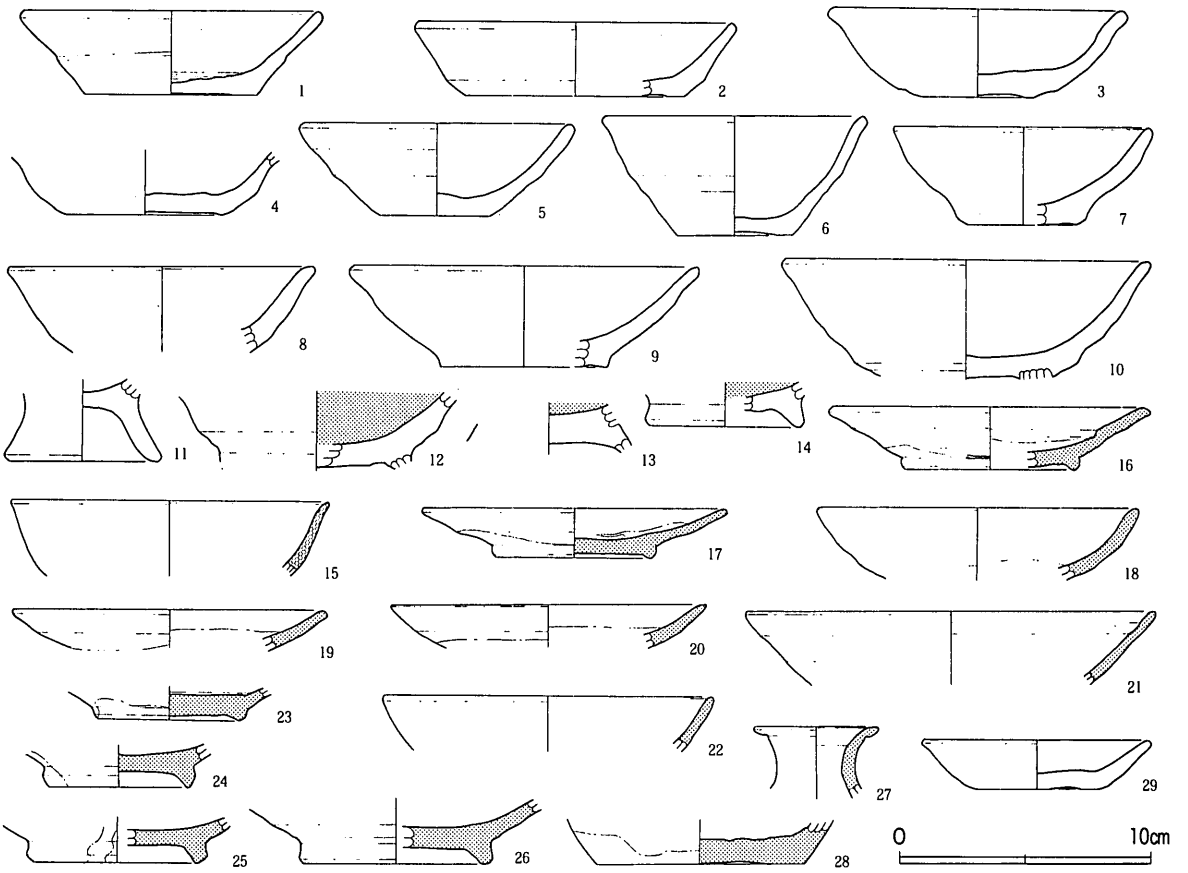
プランは、長方形で、長軸540cm・短軸400cm、軸線方向N－0°を測る。壁面は、南側と西側はローム土中から検出されたため、明瞭だったが、東側と北側は黒色土中であったため、不明瞭であった。周溝は南側と西側から検出されたが、後は不明であった。

柱穴と思われる遺構はP2・P3・P4であり、東西方向に一直線に並んでいる。P2は口径42cm・底径26cm・深さ56cm、P3は口径42cm・底径26cm・深さ47cm、P4は口径44cm・底径38cm・深さ22cmである。柱穴以外の土坑では、P2とP3の間にP1がある。平面形・断面形ともに不整形である。規模は上端長軸144cm・短軸112cm、下端長軸66cm・短軸62cm、深さ24cmである。

カマドは住居址の南東隅に位置する。カマド上部から粘土が検出され、これより下32cmから焼土が110cm




第55図　10号住居址（1/60）




第56図　10号住居址出土遺物（1/3）

×54cmの範囲にわたって、６cmの厚さで焼土が検出されている。焼土の周辺を掘るとかなり深くなり、カマドの袖石を入れた跡と思われる。カマドの他に粘土を南西側から検出している。

カマド以外でも焼土を検出し、カマドの西側でも散発的に検出している。また、西側から粘土が検出されている。

**遺物の出土状況**　遺物は、住居址の南半分からの出土量が多く、特にカマド周辺が顕著である。遺物の組成を見ると、供膳具は、土師器坏16個体分・高台付坏４個体分・黒色土器坏２個体・灰釉陶器椀２個体、煮沸具は土師器甕３個体、貯蔵具は灰釉陶器瓶１個体である。黒色土器は、内面に十字形の暗文がある。

**遺構の時期**　出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

**10号住居址**（第55・56図・図版11）

**遺構の構造**　グリッドc・d－７・８に位置する。痩せた尾根状台地のほぼ中央に立地する。遺構の北側は攪乱を受け、東側は16号土坑に切られている。遺構の規模は長軸520cm・短軸470cmで、軸線方向は、N－89°－Eを測る。壁面は、北東側を除いて明瞭に検出できた。壁高は15cmほどである。

柱穴と思われる遺構は、12基あるが、住居址外、広い範囲にわたって、柱穴状の遺構があるため、確実に本住居址の柱穴と思われる遺構はよくわかっていない。しかし、推定してみると、９号住居址と同様に、住居址壁面と重複する遺構を考えると、P17・P14・P13・P16が柱穴と考えられる。また、Ｐ９・Ｐ４・Ｐ６・P10も、前述した４本と並ぶところから、柱穴であった可能性が考えられる。同様の規模の土坑を見ると、Ｐ１・Ｐ７・P15も柱穴の可能性がある。柱穴以外の土坑はＰ３・Ｐ８・P12・P18・P19・P20・P21がある。Ｐ３は上端長軸64cm・短軸60cm、下端長軸38cm・短軸34cm、深さ20cmである。Ｐ８は上端長軸76cm・短軸68cm、下端長軸50cm・短軸48cm、深さ22cmである。P12は上端長軸90cm・短軸74cm、下端長軸50cm・短軸30cm、深

さ12cmである。P18は上端長軸50cm・短軸46cm、下端長軸38cm・短軸24cm、深さ16cmである。P19は上端長軸44cm・短軸42cm、下端長軸36cm・短軸32cm、深さ20cmである。P21は貼り床下から検出され、この中から炭化木と、緑釉陶器の破片が出土した。上端長軸124cm・短軸118cm、下端長軸86cm・短軸78cm、深さ16cmである。

焼土址を2ヶ所から検出した。ともに、住居址東側にあり、焼土址1は北東隅に近く、焼土址2は中央やや南寄りである。焼土址2には、袖石や火床と思われる掘り方が認められたが、焼土址1には、焼土下の掘り方が検出されただけだった。焼土は、焼土址1が6cm、焼土址2が6cmとともに厚く、両方ともカマドであったと思われる。しかし、新旧関係については明らかではない。他に、P19上から焼土が検出されている。この焼土の範囲は26cm×14cmで、厚さ2cmである。

**遺構の出土状況**　遺物は、住居址のほぼ全体から出土しているが、特にカマド周辺の出土量が多い。遺物の組成を見ると、供膳具は、土師器坏62個体分・高台付坏11個体分・黒色土器坏1個体分・高台付坏3個体分・両面黒色土器高台付坏3個体・灰釉陶器皿6個体分・段皿1個体・椀14個体分・緑釉陶器1個体、煮沸具は、土師器甕4個体分、貯蔵具は須恵器甕3個体分・長頸壺1個体分・灰釉陶器瓶3個体分・小瓶1個体分が出土している。土師器坏・高台付坏の比率が高く、次いで灰釉陶器皿・椀が多い。土師器坏は足高高台があるが（11）、目立つ程度であり、専ら器高が深めの坏が主流である。灰釉陶器は、椀と皿が多く、1点段皿が混じる（16）。緑釉陶器はP21内から出土している（15）。おそらく釉の色は深緑色であったと思われるが、かなり痛みが激しく、釉が剥落していた。また、特殊な遺物として灰釉陶器の小瓶（27）が出土している。

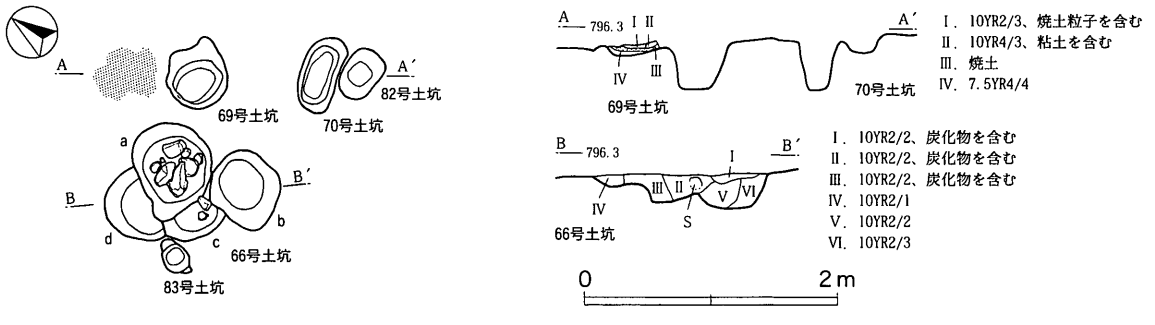
**遺構の時期**　出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

**11号住居址**（第57図・図版12－1・2）

**遺構の構造**　遺構のプランは全くわからなかったが、焼土が検出されたので住居址とした。グリッドc－9・10に位置する。焼土は48cm×40cmの範囲で厚みが4cmである。付近には、柱穴状の土坑が4基ある。69号土坑は口径50cm・底径32cm・深さ36cm、70号土坑は口径60cm・底径38cm・深さ40cm、82号土坑は口径41cm・底径18cm・深さ14cm、83号土坑は口径22cm・底径14cm・深さ28cmである。66号土坑は4つの土坑が重複しており、a土坑中に26cm大の礫が検出された。66a号土坑は、上端長軸72cm・短軸58cm、下端長軸50cm・短軸46cm、深さ22cm、66b号土坑は、上端長軸64cm・短軸46cm、下端長軸40cm・短軸24cm、深さ28cmである。

**遺物の出土状況**　遺物は、66号土坑から出土しており、すべてが土師器甕であった。

**遺構の時期**　時期を判断できる出土遺物が無く、不明である。




第57図　11号住居址（1/60）

## 2. 土　坑

平安時代の土坑と考えられる土坑を1基確認している。

**2号土坑**（第37図・図版15－1）

グリッドa・b－9に位置する。上端長軸120cm・短軸105cm、下端長軸91cm、短軸72cm、深さ32cm、長軸方

向は、N－89°－Eを示す。土坑の堆積状況は、三角堆土である。土坑内からは、土師器坏破片１・灰釉陶器椀破片１・土師器甕破片１が出土している。

## 第４節　中世以降の遺構と遺物

### 1. 土　坑

中世の土坑のほとんどは柱穴状の土坑である。これらの土坑は調査区のほぼ中央を中心に分布している（第31・64・65図）。柱穴の口径は20cm～62cmで、深さは８cm～72cmである。建物址になる可能性はあるが、分布のほぼ中央部に植木があり、全貌を把握するには至らなかった。10号住居址内及びその周辺の柱穴でも、中世の柱穴の可能性も考えたが、９号住居址のように住居址プランが切り合っている柱穴の存在を考えると、平安時代の柱穴の可能性が大きいと考えられる。なお、柱穴以外の土坑は１基検出されている。土坑の形状と出土遺物から、中世の方形竪穴と考えられる。

**16号土坑**（第64図・図版15－４）

グリッドd・e－７に位置する。上端長軸201cm・短軸169cm、下端長軸173cm・短軸139cm、軸線方向N－９°－Eの平面プランは方形で、断面形は、東側は明瞭である。遺構のプランから方形竪穴であるといえる。遺構の西側は10号住居址と重複し、東側は黒色土中のため、不明瞭である。遺構の内部には40cm～10cm大の礫が、北側を中心に出土し、これらの礫は床面から10cm浮いた状況で検出している。遺構中からは、10号住居址からの混入と考えられる平安時代の遺物の他に、内耳土器破片（第64図16土２）と、天目茶碗の口縁部の破片が出土している。この天目茶碗を図示した。

### 2. 地下式坑

地下式坑は６基検出している。分布を見ると、発掘区の北と南に偏在している。

**１号地下式坑**（第58図・図版13－１）

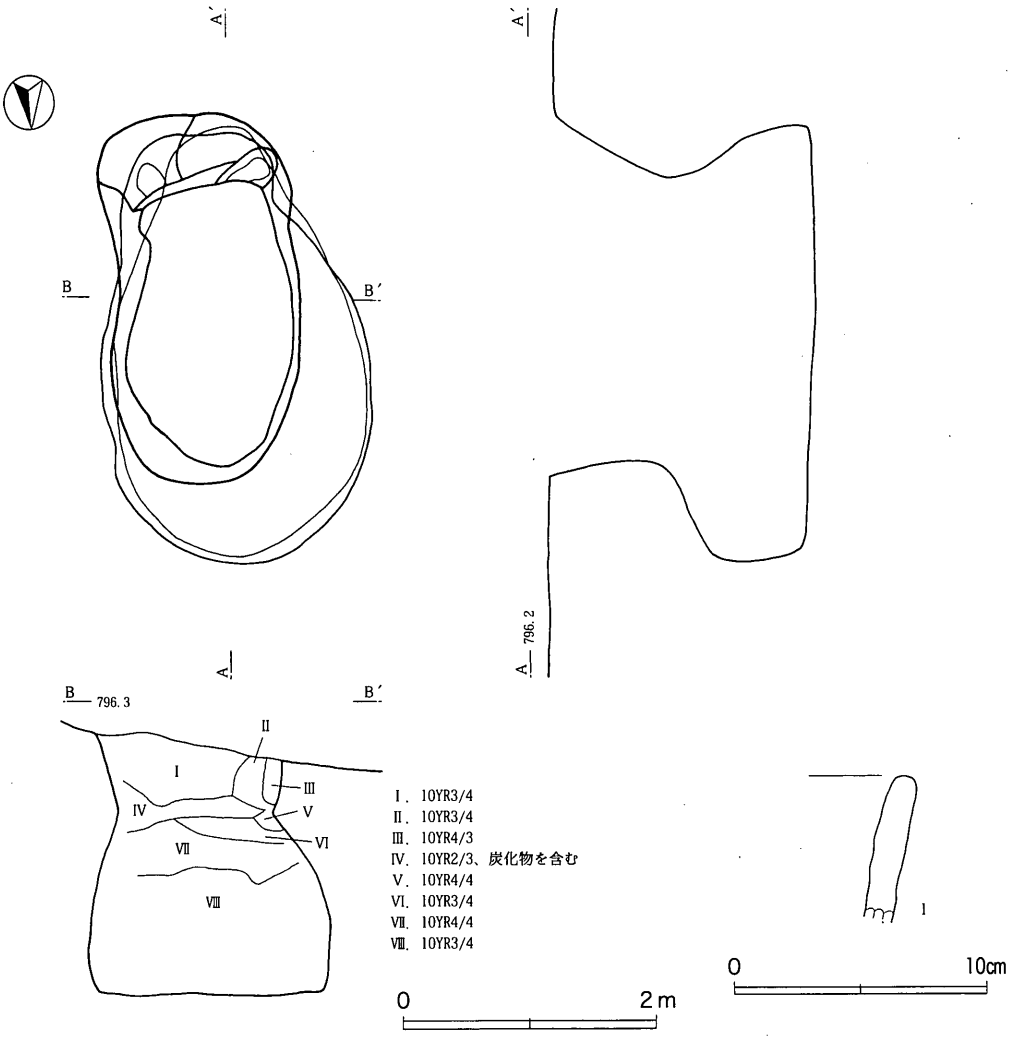
グリッドb－12・13に位置する。上端長軸288cm・短軸142cm、下端長軸332cm・短軸196cm、最も膨らんだ所で、長軸326cm・短軸214cmである、入口部60cm下方で少しくびれ、それから下方へ向かって広がる巾着状の形状である。深さは204cmである。南側が入口と考えられ、入口部に足場の跡と思われる痕跡が見て取れる。遺物は、遺構内からは混入した平安時代の遺物が多いが、若干ではあるが、内耳土器の破片が出土している。

**２号地下式坑**（第60図・図版13－２）

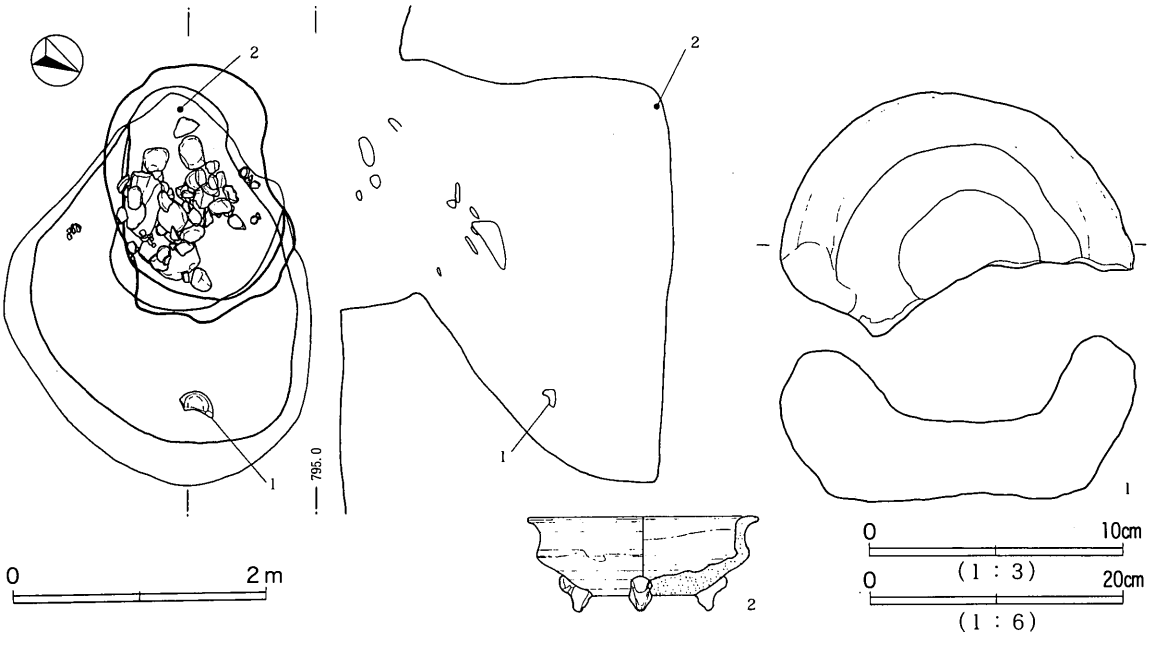
グリッドa・b－２に位置する。５号住居址内に構築されている。口径239cmで、入口部70cmの所で漏斗状に窄まり、筒状に垂下し、南西－北東方向に横穴が伸びている。深さは284cmである。南西側の横穴は奥壁まで219cm、幅110cm、天井までの高さは114cmである。北東側の横穴は292cmで、幅89cm、天井までの高さは139cmである。地下式坑入口部の所には、30cm以下の礫が46cmにわたって埋められていた。また、その下から突き固められたロームを検出している。これは、地下式坑を埋め戻すときに、途中まで埋め戻し、ロームで突き固め、その上に礫を投げ込んで遺構を廃棄したことが考えられる。埋め戻した土は、横穴のすべてを埋め戻すことはできず、奥壁付近に空洞になっている場所があった。遺構内からは、５号住居址から入り込んだ平安時代の遺物以外は見ることができなかった。

**３号地下式坑**（第59図・図版13－３～７）

グリッドa・b－４・５に位置し、３号住居址と重複して構築されている。地下式坑入口部は204cm、底部は308cm、深さは260cmの巾着状である。地下式坑床部から85cmの所から石鉢（１）が出土している。また、入口部直下、床直上より瀬戸製香炉（２）が正位置で出土している。埋め戻す際に、入口部に香炉を置き、




第58図　1号地下式坑（1/60）と出土遺物

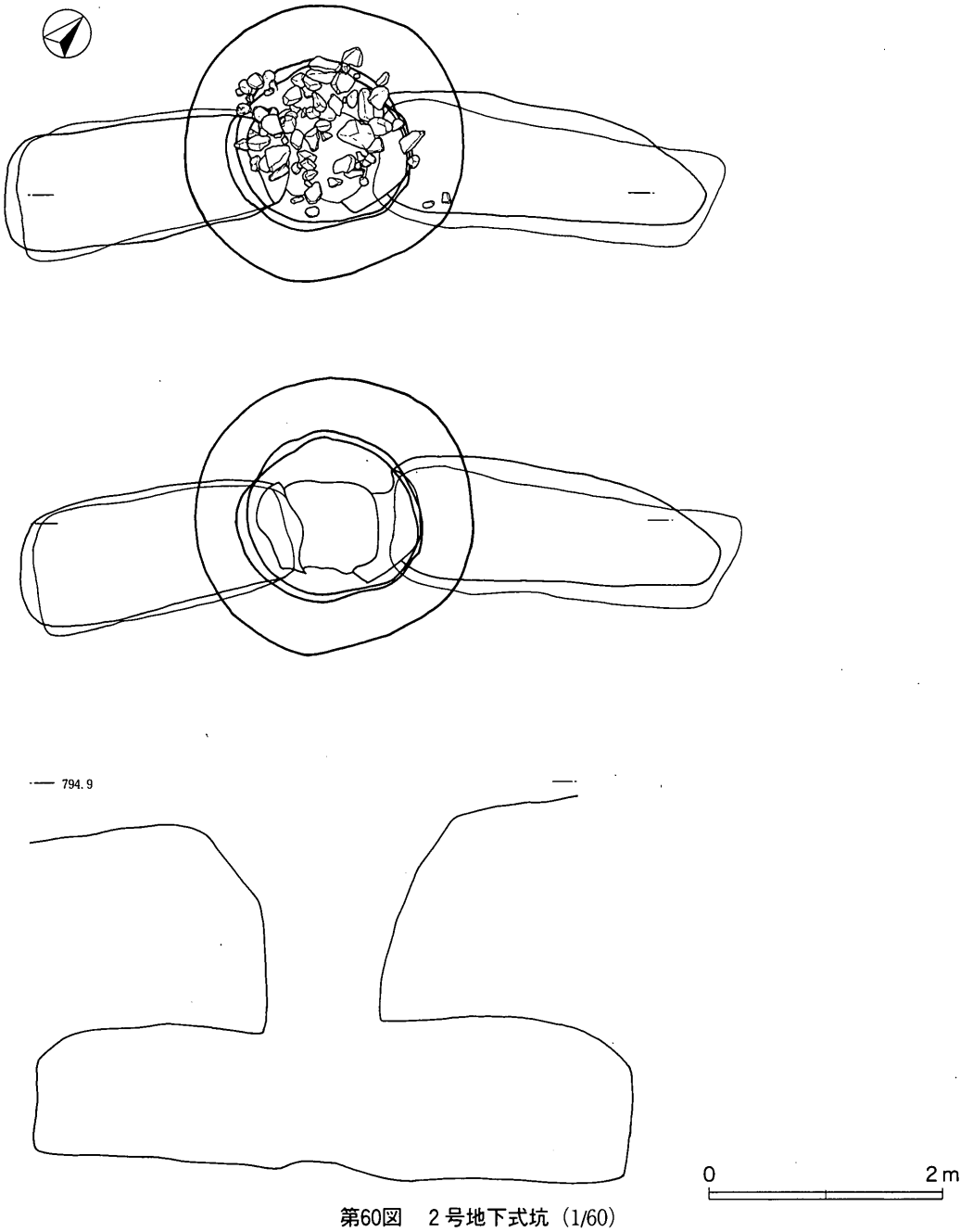



第59図　3号地下式坑（1/60）と出土遺物（1/3，1は1/6）

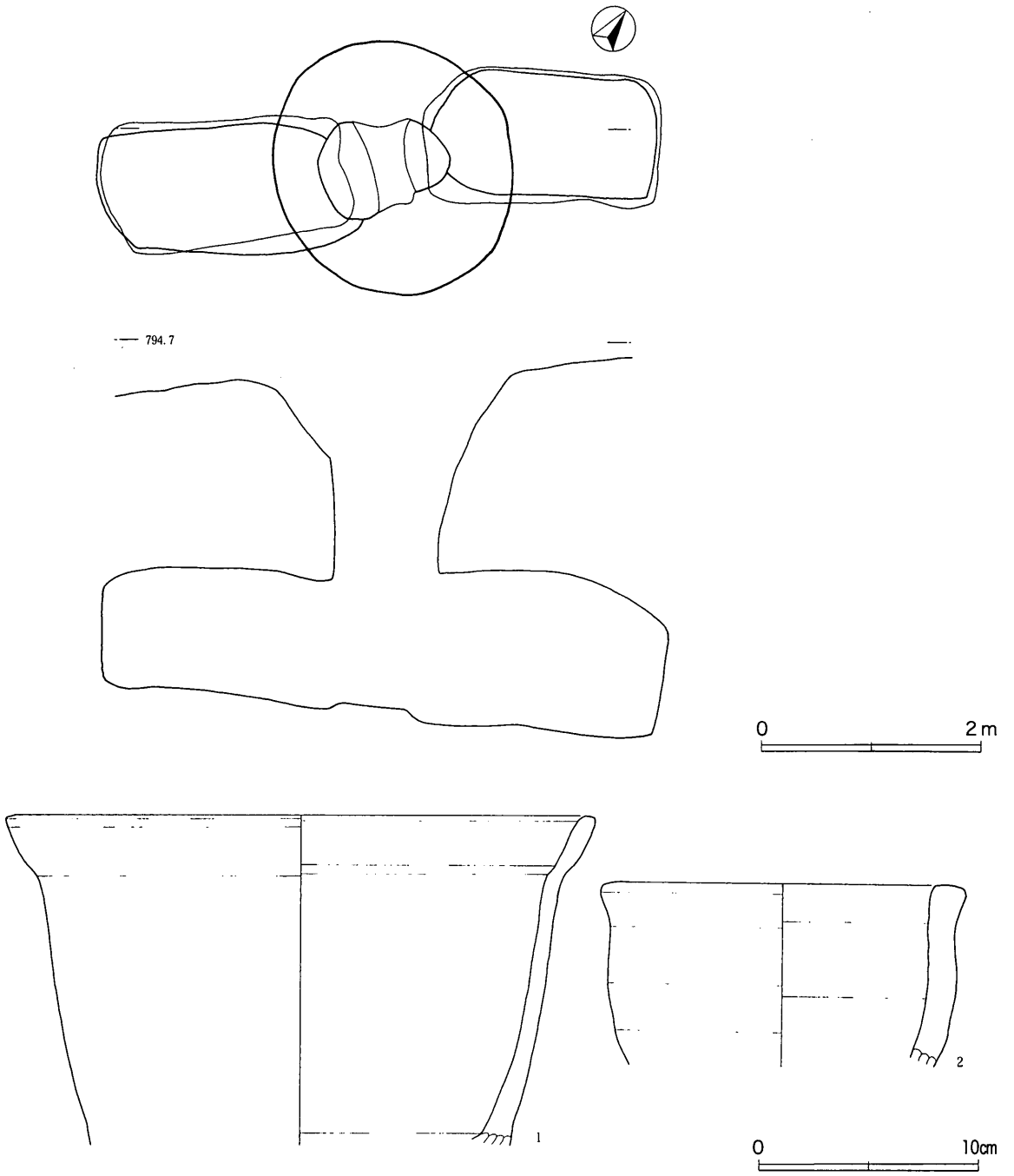
半分ほど埋めたところで、石鉢を正位置で埋置したことがわかる。この遺構は１号と同じく横穴を持たない地下式坑である。出土状況よりこの瀬戸製香炉が時期決定史料となると考えられ、遺構の時期は古瀬戸後Ⅳ新期と思われる。

**４号地下式坑**（第61図・図版13－８～14－３）

グリッドb－３・４に位置し、４号住居址と重複して構築されている。入口部は233cmで、確認面から100cmで、漏斗状に窄まり、その後106cm筒状に下がり、横穴が東西方向に伸びる。深さは280cmである。横穴の規模は、東側は、奥行き214cm、幅118cm、天井までの高さ140cm、西側は、奥行き200cm、幅110cm、天井までの高さ108cmである。遺構廃棄時に埋め戻しは行われていたが、横穴のすべてを埋め戻すことはできず、奥壁付近は空洞になっていた。遺構からの出土遺物は、内耳土器片（１）と、小型の鍋状の土師質土器（２）である。内耳土器から、時期は15世紀と考えられる。



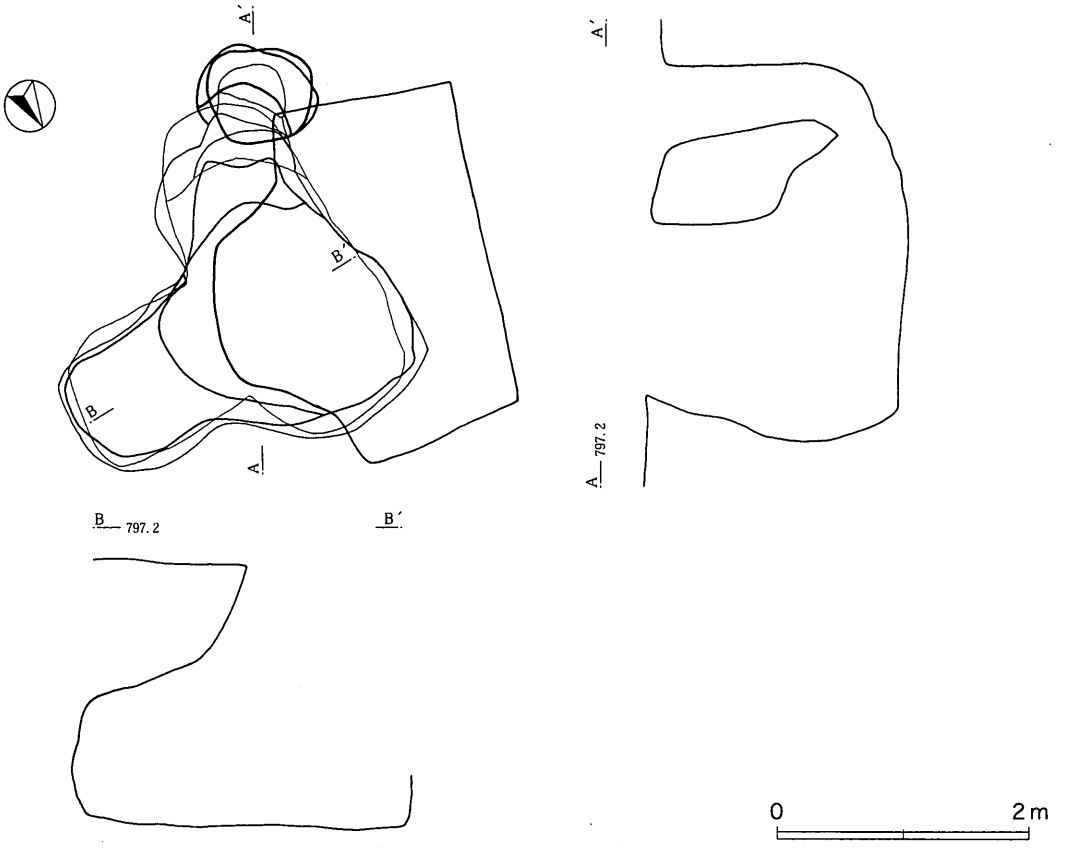

第60図　２号地下式坑（1/60）



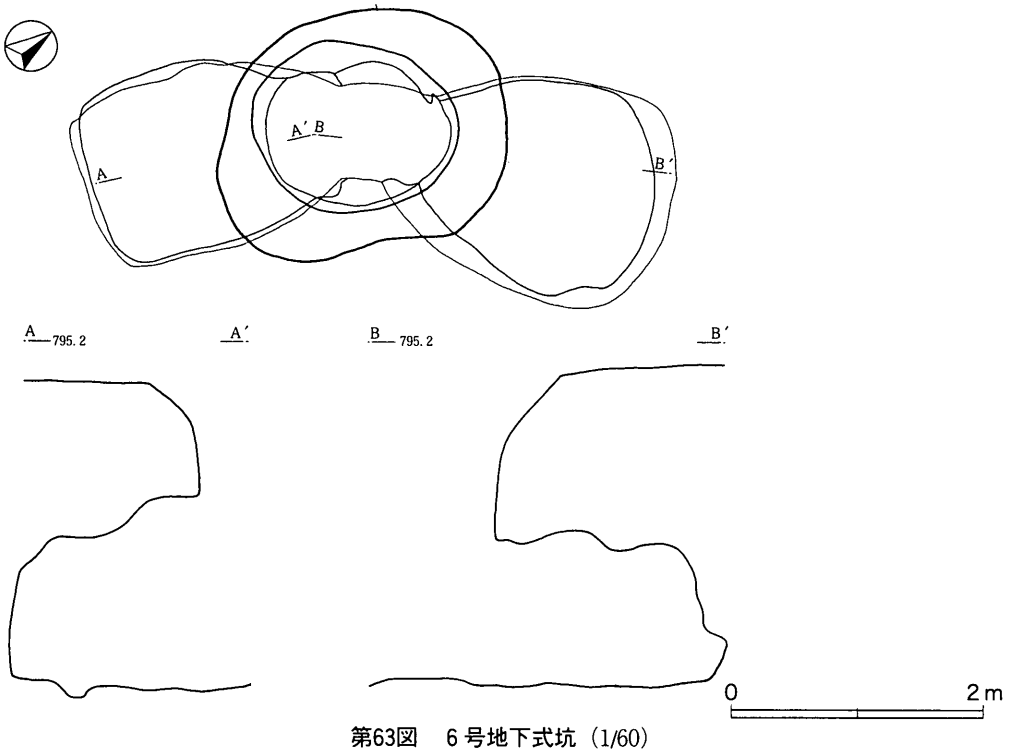

第61図　4号地下式坑（1/60）と出土遺物（1/3）

**5号地下式坑**（第62図・図版14－4・5）

グリッドc・d－12・13に位置する。この地下式坑は、入口部のみが埋まっており、地下式坑内部は完全に空洞になっていた。重機が登り、天井の一部が陥没したところから発見に至った。形状は、袋状の地下式坑と考えられるが、南西側に、独立して入口が設けられている。入口の口径は85cmであり、大人がやっと1人入れるほどの幅しかない。入口下部は、段状になっており、出入りに便利なように階段のようなものが作られていたと思われる。入口から、下部の段状の所まで、160cmであるところから、梯子で上り下りしていたと考えられる。中にはいると、3.5㎡ほどの空間があり、東方向に120cm突出して、副室が作られている。遺構確認面から、地下式坑ほぼ中央まで204cmである。遺構内から遺物は出土しなかった。



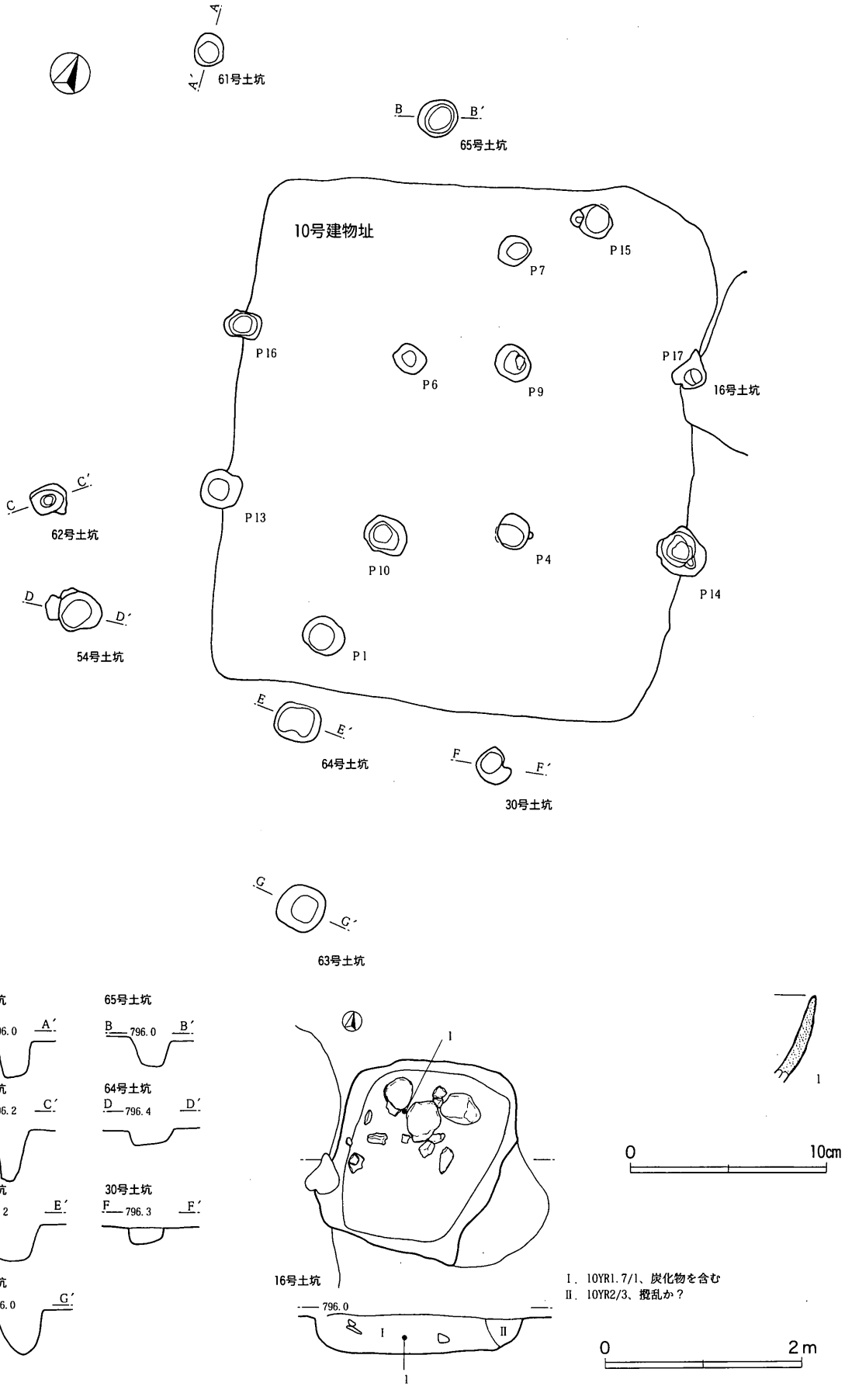

第62図　5号地下式坑（1/60）



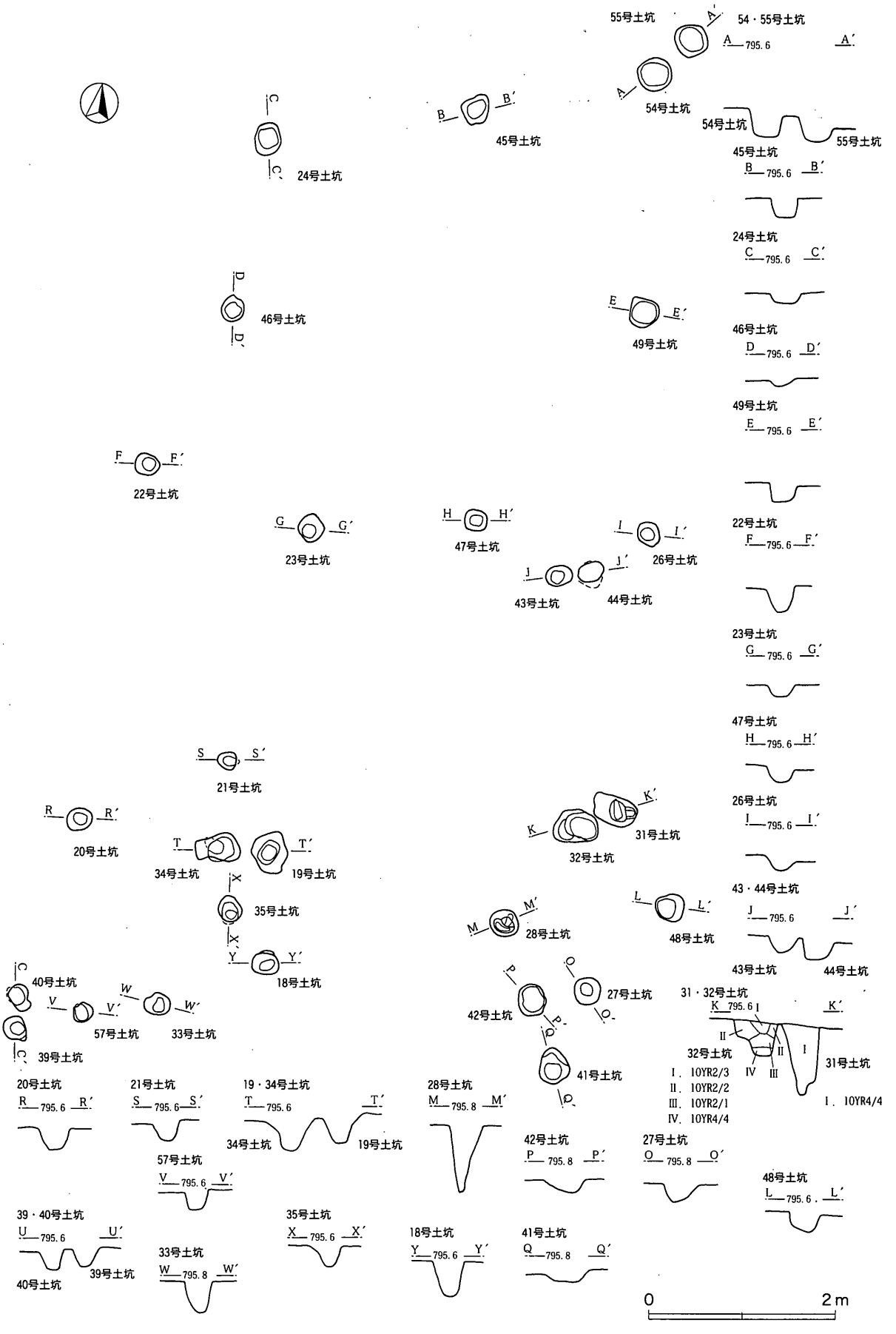

第63図　6号地下式坑（1/60）

**6号地下式坑**（第63図・図版14－6～8）

グリッドb・c－3・4に位置する。口径238cmで入口部90cmの所で漏斗状に窄まり、筒状に垂下し、南西－北東方向に横穴が伸びている。深さは240cmである。南西側の横穴は148cmで幅140cm、天井までの高さは152cmである。北東側の横穴は184cmで幅172cm、天井までの高さは122cmである。遺物は遺構内からは出土していない。




第64図　10号住居址付近ピット群（1/60，1は1/3）




第65図　グリッドハニー3・4・5ピット群（1/60）

# 第Ⅶ章　発掘の成果と課題

## 第１節　中村・外垣外・蟹畑遺跡の縄文時代の様相

**遺跡の立地と時期**　中村・外垣外遺跡は宮川と麻浸川により形成された沖積地に立地しているが、蟹畑遺跡だけはこの沖積地を臨むテラス状の台地に位置している。沖積地内も詳細にその状況を見ると、麻浸川が天井川状となり、その押し出した扇状地的なやや高まった扇央部に中村遺跡が立地するのに対して、外垣外遺跡は宮川を臨む北側に傾斜する扇端部に位置し、現宮川との距離を考えるとより近距離に外垣外遺跡が立地し、言い換えるならば宮川に臨んだ遺跡として外垣外遺跡、麻浸川沿いに寄ったやや高まった部分に位置する中村遺跡と捉えることができよう。

今回の調査により中村遺跡からは縄文前期初頭・中期前葉藤内Ⅱ式期前後・中期後葉曽利Ⅳ式期、外垣外遺跡からは縄文早期末葉・前期中葉・中期中葉藤内式期、蟹畑遺跡からは縄文前期中葉諸磯a式期・後期中葉加曽利Ｂ１式期・晩期末葉条痕文系の土器が得られている。この状況をみると、近隣に位置しながら各遺跡とも若干ながら出土土器に相違があることがわかる。出土土器から遺跡の関係を整理してみると、縄文早期末葉から前期初頭（中村遺跡・外垣外遺跡）、前期中葉（外垣外遺跡・蟹畑遺跡）、中期中葉（中村遺跡・外垣外遺跡）、中期後葉（中村遺跡）、後期中葉（蟹畑遺跡）、晩期末葉（蟹畑遺跡）となる。このように縄文早期末葉から中期中葉では、複数遺跡に亘り各時期の痕跡が認められるのに対して、縄文中期後葉（曽利Ⅳ式期）・後期中葉（加曽利Ｂ１式期）・晩期後葉では散発的な在り方へと変化する。この変化がどのようなものに起因するかは不明であるが、複数グループで形成されるものは縄文時代の古い段階に看取れ、宮川・麻浸川沖積地の内で広範囲な活動域を持っていたことが窺え、時期が下るにつれ活動域が縮小していく傾向が把握できる。

**周辺遺跡との関連性**　縄文早期末葉から前期初頭：中村遺跡・外垣外遺跡・蟹畑遺跡の立地する宮川・麻浸川沖積地とこれに付随する台地の範囲を一定の地域とし、これらの遺跡と周辺の遺跡との関連性を概観してみると、最も関係を認められそうな遺跡として、宮川対岸沖積地内に立地する御社宮司遺跡と蟹畑遺跡上方に位置する山の神遺跡を上げることができる。遺跡の存続時期から関連性を窺うと、縄文早期末葉から前期初頭では同期の遺物が御社宮司遺跡から出土しており、同期の活動が宮川を対峙した位置の沖積地に希薄ではあるものの展開していたことが把握できるが、住居址等の遺構が検出されていないため小規模な生産域的な性格も考えられよう。

縄文前期中葉：前期中葉ではこれに対応する遺跡は近辺では見あたらない。前期中葉の遺跡は市域に於いても希薄で、霧ヶ峰南縁麓に位置するよせの台遺跡・一ノ瀬遺跡・棚畑遺跡・平十郎久保遺跡等で八ヶ岳山麓中央部には認めることができないが、原村八ヶ岳山麓端に阿久遺跡のような大規模集落が認められる。この阿久遺跡と直接的に関連を窺うことはできないが、八ヶ岳山麓内でも痕跡が希薄な前期中葉に、小規模ながら生活の痕跡が認められたことに意義が見いだせ、特に居住域としての蟹畑遺跡と生産域としての外垣外遺跡の関連性の在り方は、市域の前期中葉では把握されていない事象で、こうした意味からも今回の成果は重要であると言えよう。また、周辺に同期の関連する遺跡が認められないことより、小規模遺跡群が地形単位に希薄に展開する姿を想定することができよう。

縄文中期中葉：中期中葉では宮川・麻浸川沖積地とこれに付随する台地の範囲に於いて、中期中葉の遺物が認められるのは中村遺跡と外垣外遺跡である。この群に宮川を挟んで対峙する御社宮司遺跡でも同期の遺

物が出土しており関連性が窺われ、特に両者とも遺構を伴わない点にも類似性が認められる。遺物量・遺構の有無からみると居住域とは考えられず、生産域としての性格が考えられよう。しかし、中村遺跡では大型土器片が割合まとまって出土しており、一定の生活が営まれていたかとも考えられる。

積極的に沖積地に展開する遺跡と、関連性の考えられる遺跡として、近辺に位置する拠点的集落である山の神遺跡を視野に入れなければならない。想像を豊かにするならば、拠点的集落（山の神遺跡）—短期集落（中村遺跡）—生産址的場（外垣外遺跡・御社宮司遺跡）というような図式を描くことができようか。

縄文中期後葉：中期後葉についても中期前葉と同様な傾向を想定でき、沖積地を臨む台地上の集落と、沖積地内の遺跡に於いて一定の相関関係があったものと考えることができよう。特に中期後葉曽利Ⅳ式期以降の活動域の拡大は、八ヶ岳西南麓域での同期の活発な活動と連動を感じる。

縄文後期中葉：後期中葉では加曽利Ｂ１式期の資料が蟹畑遺跡から微量ではあるが検出されている。この時期の資料は周辺の遺跡からは確認されてはおらず、生活の痕跡は希薄であるが、後期後葉から晩期にかけて沖積地で展開する御社宮司遺跡へのつながりを考えると、この存在は大きいと言える。

縄文晩期末葉：晩期末葉の条痕文系土器が蟹畑遺跡から検出されている。今回当市で行った中村・外垣外遺跡の調査では同期の資料は得られてはいないが、国道バイパス建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの外垣外遺跡の調査に於いて、条痕文系土器が検出され、宮川・麻浸川沖積地にも同期の生活の痕跡を認めることができる。同期では宮川を隔てた御社宮司遺跡に大きな集落址（炉址・墓壙）が認められ、この地域周辺が再び遺跡群的なまとまりを持つ傾向を示すようになるが、中期に見られた沖積地を臨むテラス状台地に立地する集落が、沖積地を生産域とする構造が逆転し、沖積地に集落、テラス状台地に小規模な活動域といった構造への変化が生まれる。このような変化が生業と密接な関連性を持つものと考えられ、御社宮司遺跡から出土した多量の打製石斧を背景にした生産活動が沖積地で行われ、蟹畑遺跡では68号土坑の横刃型石器が認められるだけの、貧弱な石器組成での生産活動が行われていたものと考えられる。なお、御社宮司遺跡の場合後期末葉から晩期末葉まで連綿と継続する傾向が認められるのに対して、蟹畑遺跡では晩期末葉の限定された時期の生活の痕跡しか認められなかった点から、どのような構図を読みとることができるだろうか。

宮川沖積地内の御社宮司遺跡を中心に、晩期末葉の条痕文系土器が検出されている遺跡は、市域に於いて４遺跡（林の峰遺跡—田沢沢川、入の日影遺跡・大悦遺跡—弓振川、蟹畑遺跡—麻浸川）を数える。これらは全て宮川の支流である小河川に沿った台地に立地し、小規模な遺物の散布または、数基の土坑から構成される遺跡で、大悦遺跡・入の日影遺跡などの打製石斧や横刃型石器の在り方を踏まえると、生産活動の場が点在する姿を彷彿することができよう。中核的な御社宮司遺跡を中心に、周辺に生産址的な小規模な遺跡が拡散する要因として、生産具である打製石斧・横刃型石器数に着目し探ってみた。その結果中核的な御社宮司遺跡では打製石斧423、横刃型石器50と大量の生産具を保有するのに対して、支流山麓部の遺跡である入の日影遺跡打製石斧15、大悦遺跡打製石斧20、蟹畑遺跡横刃型石器１と数量的に貧弱であり、どうも生産具の保有量が遺跡の規模に比例する傾向にあることを窺うことができる。これらの状況から類推すると、宮川の沖積地を背景にした割合規模の大きな生産活動が御社宮司遺跡周辺で営まれ、この生産活動の場を拡大する目的を持って支流を遡ったために、周辺に小規模な生産域的な遺跡が点在する状況が生じたものと捉えることができよう。今回調査された蟹畑遺跡もそうした遺跡の一つと考えることができよう。

## 第２節　中村・蟹畑遺跡の平安時代の様相

### 1. 集落の様相

中村・蟹畑遺跡併せて、12軒の住居址を検出している。大雑把に見て、３時期に分かれると思われる。

Ⅰ期　蟹畑９号住居址

Ⅱ期　中村１号住居址・中村２号住居址・蟹畑１号住居址・蟹畑２号住居址・蟹畑４号住居址・蟹畑８号住居址・蟹畑10号住居址

Ⅲ期　蟹畑３号住居址

不明　蟹畑５号住居址・蟹畑７号住居址・蟹畑12号住居址

Ⅰ期は、尾根状台地の中央部に位置する蟹畑９号住居址である。カマドの方向は、南側やや東寄りで、カマドの袖石の掘り方が深い。住居址の形状も、隅丸長方形である。

Ⅱ期は、沖積地の中村遺跡と、尾根状台地の西側斜面の肩部に密集する蟹畑遺跡の遺構である。住居址の形状については、蟹畑遺跡の住居址のほとんどが西斜面に位置するため、わからないものも多かった。カマドの位置を見ると、中村２号住居址・蟹畑１・２・４・10号住居址が、東壁やや南よりで、蟹畑８号住居址は南東隅である。住居址の形状も、判明する住居址では隅丸方形である。

Ⅲ期は、尾根状台地の西斜面肩部に位置する３号住居址で、立地はⅡ期と共通する。４号住居址とは重複しているため、明らかに時期が異なることがわかる。カマドの位置は、住居址南側で、中央部かどちらかに寄っているかは不明である。ややカマドが住居址の外側に張り出している。

他に、不明とした５号住居址であるが、カマドが１軒だけ南東隅で、外側へ張り出している。構造が他の住居址とは全く異なっているため、上記３時期に分けた住居址とは時期が異なると考えられる。

### 2. 遺物の特徴

Ⅰ期　土師器坏が多く、高台付坏と灰釉陶器椀が少ない。この段階では、内部に暗文のある黒色土器坏がある。煮沸具の比率は非常に低く、図示できる遺物はなかった。

Ⅱ期　土師器坏はⅠ期とほぼ同じであるが、体部が外側に開くものが主流になる。口径に較べて底径が小さい物と、底径が広くて器高が高い物も見られる。高台付坏の比率が高くなり、足が長く、外側に踏ん張るタイプの物が多くなる。Ⅰ期と同じく煮沸具は少ない。ただ、中村２号住居址から出土したのものは、口縁部の折り返しが小さい甕が主流である。また、羽釜も使用されており、中村２号住居址と蟹畑４号住居址から検出している。

Ⅲ期　土師器は、Ⅱ期に比べると器高が低くなっており、皿に近い物と、柱状高台になっている物が見られるようになる。高台付坏の高台部は低くなり、外側に開くようになる。体部は深い物とやや浅い物がある。蟹畑３号住居址が特殊な住居址であるからかもしれないが、灰釉陶器がほとんど出土していない。煮沸具は小型甕と、発掘例の少ない鼎が出土している。

### 3. 遺跡の概観

中村遺跡と蟹畑遺跡では、かなり遺跡の様相が異なっており、中村遺跡では住居址の密集度が粗であり、蟹畑遺跡は密である。中村遺跡の２軒の住居址の時期は、前述のようにほぼ同じ時期と考えられるところから、沖積地に住居址が散在していたことがわかる。蟹畑遺跡のⅠ・Ⅲ期は１軒しかないが、Ⅱ期には７軒ある。この７軒が同時存在していたかどうかはわからないが、継続的に営まれた集落であることがわかる。Ⅱ期の住居址のほとんどが同時期であると考えると、軒数の多い中核的な蟹畑遺跡が小高い場所にあり、沖積

地に散在する中村遺跡の住居址を見下ろすという形になる。

なぜ、蟹畑遺跡は高い位置に集落があるのかを考えると、沖積地である中村遺跡は宮川の河原に位置するため、宮川の氾濫の被害を想定することができる。中村・外垣外遺跡の遺構が確認できた範囲は、礫はほとんど無かったが、その周囲は河原石だらけで、洪水の多さを物語っている。また、諏訪郡内は山岳地帯であるため、水田を作る場所は河川流域の平地に限られる。そのため、できるだけ沖積地に農地を確保する必要性があったと考えられる。沖積地以外の山の手方面には、平安時代の集落は確認されていない。蟹畑遺跡の西側に「麻浸川（おしてがわ）」という川が流れており宮川に注いでいる。蟹畑３号住居址内からは、麻皮剥器と紡錘車が検出されており、平安時代に麻が栽培されていたことがわかったため、遺跡周辺は、古来から麻栽培に関係する土地であることが伺える。

文献史料の記述によると、平安時代末期、信濃国内の平氏勢力を掃討するために、甲斐の武田信義らが諏訪上社近辺の「庵沢」を通過した記述がある。これは、中村遺跡と近接する「イモリ沢」だとする説があり、これを信じると、中村遺跡付近に何らかの交通路があったことが予想される。中村２号住居址からは、非常に多くの灰釉陶器や関西系の土師器鍋が出土することを考えると、交易ルート付近にこの住居址が位置していた可能性も考えられる。

蟹畑遺跡は、前述したとおりに中核的な集落であり、中村遺跡は、この集落に付随する集落と考えられる。しかし、中村２号住居址に見られるように遺物の保有量が多いことから、蟹畑遺跡の出作小屋的な住居址ではなく、永続的に営まれていた住居址であることが考えられる。

### 4. 周辺の遺跡との関係

茅野市域において、中村・蟹畑遺跡とほぼ同時期の遺跡は、非常に多く見られる。しかし、沖積地の遺跡は、八ヶ岳西南麓の遺跡に較べ、灰釉陶器の保有量が非常に多い。また、皿状や、柱状高台の土師器は、中村・蟹畑遺跡付近の勝山・高部遺跡といった遺跡から出土している。八ヶ岳西南麓では、10世紀後半から11世紀初頭にかけての遺跡を最後として、平安時代の遺跡はほとんど無くなってしまう。勝山・高部・中村・外垣外といった、現在の国道20号線や中央東線沿いの遺跡からは、八ヶ岳西南麓より若干新しい時期の住居址が発見される。これらの遺跡は、沖積地であったり、沖積地に近接する場所にあり、国道20号線や中央東線沿いは、中世の御射山道や近世の甲州街道という、主要幹線道路沿いにあたるため、交通の要衝の遺跡として考えられる。特に、勝山・高部遺跡は、８世紀代からの継続的な遺跡であるため、その性格は一層はっきりしている。中村・蟹畑遺跡は、八ヶ岳山麓の遺跡が消滅する末期に、沖積地に出現し、比較的長く続いた後で消滅している。前述したように、農地としての重要性とともに、関西系の土師器鍋が入ったり、灰釉陶器の保有量が多いことを考えると、交易ルートの近くにこの遺跡があり、他の遺跡と何らかの連携をとっていたことが考えられる。

### 5. 今後の課題

現在、茅野市全域における平安時代の遺物の編年というのは完成していない。この報告書では、長野県埋蔵文化財センターの松本平の編年（小平　1990）と山梨県の編年（瀬田・山下　1999）に準拠した。しかし、両者の間には若干の差違があるのは否めない。更に、諏訪郡内には時期を決定できるような資料は今のところ見つかっていない。Ⅱ期に含めた遺物で、更に細分できるかもしれない。今後、平安時代については、このような基礎的作業が課題になると思われる。

## 第３節　中村・蟹畑遺跡の中世の様相

### 1. 中村遺跡の中世遺構

中村遺跡の中世の遺構は、７軒の掘立柱建物址と数十基の柱穴、溝址である。まず、掘立柱建物址の軸線方向を見てみると、１・３・４・５・７号建物址は比較的同じであり、２・６号はかなりズレている。つまり、前述した５軒の建物址は、同時期に存在した可能性がある。また、これらの建物址はほぼ溝址と平行している。つまり、溝址も同時期である可能性がある。しかし、建物址の時期を決定できる資料は出土していない。遺構外の中世の遺物は少なく、形がある程度わかるものは、第28図17・18である。17はカワラケで18は青磁碗である。溝址１からは、第28図19の内耳土器破片が出土し、これは15世紀中葉から16世紀初頭に位置づけられる。

### 2. 蟹畑遺跡の中世遺構

蟹畑遺跡の中世遺構は、42基の柱穴と１基の方形竪穴、６基の地下式坑である。柱穴は、調査区のほぼ中心部分に密集しているため、ここに建物址があったことがわかる。この柱穴群に近接するように、方形竪穴が１基検出され、中から、内耳土器片と天目茶碗の破片が出土している。

**地下式坑の分類**　地下式坑は、６基出土しており、大きく２群に分類することができる。

Ⅰ群　入口が地下式坑の端にあり、入口から袋状に広がるタイプ。地下式坑１・３号がこれにあたる。

Ⅱ群　地下式坑内部が横穴であるタイプ。入口の場所により、次の２種に細分できる。

１類　入口が中央にあり、垂直に落ち、左右に横穴が伸びるタイプ。地下式坑２・４・６がこれにあたる。

２類　入口が独立して設けられ、すぐ下に地下室がないタイプ。内部は袋状であるが、短い横穴を持っている。地下式坑５がこのタイプにあたる。

Ⅱ群１類は、尾根状台地の先端部分に密集しているため、ほぼ同時期に作られた地下式坑と考えられる。Ⅰ群は、尾根状台地の北側部分に散在する。Ⅱ群２類は、１号地下式坑と位置が近いが、関連性があるかどうかは不明である。Ⅱ群２類は、すべて穴が埋め戻されていた。特に、２号地下式坑は入口部にロームが貼られ、上部に大量の礫が投げ込まれていたことでわかる。また、横穴の奥壁まで埋め戻されておらず、入口から土を投げ込んで埋められていたことがわかる。Ⅰ群も埋められており、特に３号地下式坑は、入口直下に香炉を置き、半分ほど埋めたところで、石鉢を埋置し、更に礫混じりのロームを詰めて埋められたことがわかる。Ⅱ群１類は、入口以外は全く埋められておらず、本体は空洞であった。入口部から土を投げ込んで、埋まりきったと思われたため、中が空洞であったようだ。Ⅱ群は、１・２類とも内部に入ってまでは埋め戻さなかったと言うことになる。

**茅野市内の地下式坑**　茅野市域では、蟹畑遺跡の他、地下式坑が３遺跡33基発見されている。玉川田沢に所在する神垣外遺跡は13基あり、いずれも入口から垂直に落ち、直角に地下式坑が１室あるタイプであった。蟹畑遺跡では、Ⅰ群が類似する地下式坑と思われる。神垣外遺跡は、中世の墓地と考えられる遺跡のため、斉藤弘氏は再葬施設ではないかと考えている(斉藤　1996)。米沢北大塩に所在する八幡坂遺跡では13基の地下式坑が検出されている。この遺跡は、土豪の屋敷跡ではないかと考えているが、地下式坑は掘立柱建物址と重複する形で検出されている。蟹畑遺跡のⅡ群１類に類似するが、蟹畑遺跡と異なるのは、横穴の位置や数が不定であるところである。横穴が左右に分かれるのではなく、直行したり、斜めになっていたり、横穴が１から４室まであるものもある。また、隣り合った横穴同士がつながってしまっている例も見られる。八幡坂遺跡の地下式坑３は、瀬戸大窯Ⅰ・Ⅲ期の丸皿が17枚以上覆土中に捨てられており、地下式坑を閉塞す

るときに、何らかの儀礼を行ったことが想定できる。斉藤氏は、屋敷に伴う地下式坑は、貯蔵穴的性格を有しているのではないかと推定している。もう一つは米沢塩沢に所在する上の平遺跡がある。この遺跡からは、7基の地下式坑が検出されている。そのうち2基は近代のムロで、5基は16世紀の地下式坑であると考えられている。すべて天井が崩落しており、原形はとどめていなかったが、蟹畑遺跡のⅠ群に類似するタイプではないかと思われる。上の平遺跡は、地下式坑以外に中世の遺構はない。すぐ付近に近世以降の墓地があるが、関連性は不明である。

**蟹畑遺跡の地下式坑の性格**　蟹畑遺跡の地下式坑について考えてみると、掘立柱建物址とは重ならない状態で構築されていることがわかる。また、Ⅱ群1類は同じ場所に固まっており、同じ性質の遺構であることがわかる。Ⅱ群1類の2号地下式坑と、Ⅰ群の3号地下式坑は、埋め戻して、最後に礫を投げ込んで閉塞する共通点があり、この両者が同時期であれば、機能の異なる地下式坑があったことが想定される。八幡坂遺跡の地下式坑が、本遺跡のⅡ群1類と同じタイプであると考えると、建物址に伴う遺構と考えられ、墓壙であるとは考えにくい。Ⅰ群は、神垣外遺跡で想定されている再葬墓と考えると、出土遺物から3号地下式坑はその可能性があるが、1号地下式坑は再葬墓を伺わせるような遺物はない。また、再葬にするならば、完全に埋め戻してしまう理由がわからない。以上のように考えてみると、地下式坑内部をかなり広くとるところから、地下式坑というのは繰り返し使用されていたのではないかと思われる。そして、内部に骨や香炉などの宗教的な遺物があるのは、地下式坑の最後の使用形態で、墓壙として転用したケースがあるのではないかと考えられる。

### 3. 中世の中村・蟹畑遺跡

中村遺跡付近には、「イモリ沢」という字名があり、地元では『吾妻鏡』治承4年（1180）にある「庵沢」ではないかと言われている。また、時期は不明だが、ある時期諏方氏の有力な家臣である千野氏の居館があったといわれている。千野氏が何時、現在の諏訪市大熊・有賀近辺に移ったかはわからないが、戦国時代までには移動したと思われる。発掘の結果、中村遺跡からは数棟の掘立柱建物址が検出され、区画溝と思われる溝も発見された。区画溝は掘立柱建物址のない北側に曲がっており、掘立柱建物址は区画溝の外にあったということになる。区画整理以前の道路は、中世の溝と平行しており、道がクランクになっている部分で、溝も曲がっていたのではないかと考えられる。時期は不明だが、中村遺跡近辺に、何らかの集落があったと推定できる。

蟹畑遺跡と中村遺跡は、内耳土器を見ている限りでは、あまり変わらない時期と思われるが、内耳土器の存続期間が長いため、同時期かどうかはわからない。3号地下式坑出土の古瀬戸香炉から、古瀬戸後Ⅳ新期、15世紀後半の遺構ではないかと考えられる。15世紀後半には、「千野河明神」や「千野神主」などの記述が見られるが、集落についての記述はない。現在「茅野」と呼ばれている範囲は、宮川茅野と宮川西茅野、ちのの3ヶ所があるが、「ちの」は中世では上原や横内と言われていたので、中世の地名ではない。宮川茅野と西茅野が該当すると思われるが、該当する場所は広く、宮川茅野側が、早くから開けていたと思われるため、中心となるのは宮川茅野であろう。「千野河明神」は西茅野にあるため、諏訪上社からの何らかのルートがあったことが考えられる。中村・蟹畑遺跡は、守屋山麓沿いに金沢方面から諏訪上社に抜ける重要な交通の要衝に当たると思われ、この道筋に上記の千野河明神が位置すると思われる。戦国時代の遺跡になるが、駒形城址もこの沿線にあり、諏訪上社の防衛上の要であったことがわかる。

# 第Ⅷ章　結　　語

ここ数年来、八ヶ岳西南麓の開発が盛んに行われ、非常に多くの遺跡が発掘されてきた。発掘された遺跡の多くは、「縄文王国　茅野」にふさわしく縄文時代の遺跡であった。しかし、その他に多くの平安時代と中世の遺跡も同時に発掘されている。近年、開発の手が沖積地にも及ぶようになり、八ヶ岳山麓とは全く異なった遺跡のあり方を考えざるをえなくなった。これまでにも、沖積地の発掘調査は行われており、宮川の対岸にある御社宮司遺跡は有名である。縄文時代早期から近代に至るまで続いている。年輩の人々の中には、かつて、標高800m以下には、古い遺跡がないという俗説を信じている人々がかなりおり、沖積地の発掘はこれらの俗説を覆すことになる。

中村・外垣外・蟹畑遺跡のある西茅野地区は、山梨方面の谷間から、地形が開ける転換点であり、この辺りから諏訪盆地が始まる。対岸である宮川東岸には、旧御射山道や旧甲州街道が通り、西茅野は守屋山の山裾を通って諏訪上社方面に抜けるもう一つの交通路の途上にあったことが考えられる。このような交通路は、おそらく縄文時代の昔からあったと思われ、蟹畑遺跡からは、原村の阿久遺跡と共通する縄文前期中葉の遺物が発見された。また、対岸の御社宮司遺跡との交流を物語る遺物として、蟹畑遺跡から縄文晩期末葉の土坑も発見され、盛んに人々が移動していたことを想像させる。宮川の河原で、洪水にたびたび遭い、縄文時代の遺物は出ないと言われていた中村・外垣外遺跡からも縄文時代中期の遺物が検出された。対岸の御社宮司遺跡からも同時期の遺物が出土しているところから、河原地に営まれた小規模な集落は、八ヶ岳山麓の大規模な遺跡とはかなり違ったあり方があったと考えられる。

弥生時代から奈良時代の遺跡は、茅野市内ではほとんど発見されていなかったが、沖積地の阿弥陀堂・家下遺跡の発掘によって、明らかになりつつある。蟹畑遺跡でも遺物のみの出土であるが、古墳時代の遺物が確認されており、新たな古墳時代の資料として今後の研究に寄与することになろう。

平安時代には新たに集落が設けられ、稲作としての農地で重要である沖積地を避けて、わざわざ高台に集落を作ったことがわかった。稲作の他に想像される生業は、麻栽培が考えられ、また、鉄鏃の出土から狩猟も行っていたことが考えられる。平安時代の人々は、多角的な生業を持ちながら暮らしていたことがわかった。

諏訪郡は、諏訪神社と諏方氏の活躍によって、比較的古くから記録に現れる。特に、中世以降は、『吾妻鏡』に見られるように、鎌倉幕府内における諏方氏の活躍、また、地元に残されている諏訪神社の神官が所持していた古文書群である守矢文書の存在によって、非常に重要な地域であったことがわかる。そして、記録・古文書には、中世の当時から重要な地域である認識があったことがわかる。

近年の発掘調査では、茅野市のほぼ全域から中世の遺構や遺物が出土することにより、中世の認識について変化してきたように思う。特に、諏訪上社前宮周辺からは、千沢城下町・荒玉社周辺遺跡という、大規模な中世の町が発掘され、南信地方における重要な宗教的政治的拠点であることがわかるようになった。中村・蟹畑遺跡では、諏訪郡内の中世のもう一つの側面を知ることのできる好例となったのではないかと思われる。

〈参考文献〉

鳥居龍蔵　1924『諏訪史　第一巻』信濃教育会諏訪部会

信濃史料刊行会　1956『信濃史料　第一巻上　考古資料篇』信濃史料刊行会

諏訪史談会　1958『諏訪史蹟要項』十六　茅野市宮川篇　諏訪史談会（1996『復刻・諏訪史蹟要項　十六　茅野市宮川篇』郷土出版社）

宮川村史編纂会　1962『宮川村史編纂会　研究　其の三』宮川村史編纂会

百瀬長秀・小林秀夫ほか『長野県中央道埋蔵文化財宝蔵地発掘調査報告書　―茅野市その５　昭和52・53年度―〈御社宮司遺跡〉』日本道路公団長野建設局・長野県教育委員会

茅野市　1986『茅野市史　上巻　原始・古代』茅野市

茅野市　1986『茅野市史　別巻　自然』茅野市

茅野市　1987『茅野市史　中巻　中世・近世』茅野市

茅野市文化財審議委員会　1988『茅野市の文化財』茅野市教育委員会

小平和夫　1990「古代の土器」長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』　日本道路公団長野建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター

茅野市教育委員会　1990『茅野市字名地図』茅野市教育委員会

茅野市教育委員会　1991『茅野市遺跡台帳』茅野市教育委員会

小林深志　1992『神垣外遺跡』茅野市教育委員会

守矢昌文　1995『上の平遺跡』茅野市教育委員会

百瀬一郎　1995『大悦遺跡』茅野市教育委員会

斉藤　弘　1996「地下式坑と葬送儀礼―栃木県下の事例を中心に―」『研究紀要』第４号　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

藤沢良祐　1996「中世瀬戸窯の動態」㈶瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年記念シンポジウム『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』資料集　㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

小林深志　1998『八幡坂遺跡』茅野市教育委員会

山下孝司・瀬田正明　1999「奈良・平安時代の編年」『山梨県史』資料編２　原始・古代２　山梨県

茅野市教育委員会　2000『茅野市遺跡台帳』茅野市教育委員会

柳川英司・百瀬一郎　2000『林の峰遺跡』茅野市教育委員会

表１　中村遺跡土坑一覧表(1)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 1 | | X－8 | 方形 | 樽 | 単一 | 81 | 81 | 60 | 57 | | 25 | | | | |
| 2 | | S－3 | 柱穴 | | | 36 | 30 | 24 | 22 | N－42°－E | 8 | | | 中世 | 建1 |
| 4 | | S－3 | 柱穴 | | | 36 | 28 | 20 | 20 | N－81°－W | 18 | | | 中世 | 建1 |
| 5 | | R－3・4 | 円形 | 樽 | 単一 | 124 | 116 | 108 | 104 | N－72°－E | 17 | | | | |
| 6 | | R－3・4 | 円形 | 巾着 | 平行堆積 | 132 | 126 | 108 | 104 | N－9°－E | 52 | | | | |
| 7 | 外 | S－3 | 楕円形 | 皿 | | 68 | 48 | 52 | 42 | N－0°－E | 10 | | | | |
| 7 | 中 | S－3 | 柱穴 | | | 36 | 24 | 24 | 18 | N－12°－E | 30 | | | 中世 | 建1 |
| 8 | | T－3 | 柱穴 | | | 28 | 28 | 16 | 16 | N－75°－W | 15 | | | 中世 | 建1 |
| 9 | | Q－5 | 楕円形 | 樽 | 単一 | 136 | 116 | 132 | 104 | N－75°－E | 10 | 14土 | 打斧2 | | |
| 10 | a | Q－5 | 方形 | 樽 | | 72 | － | 48 | － | N－51°－E | 44 | 10b土 | | | |
| 10 | b | Q－5 | | | | － | － | － | － | | 40 | 10a・b土 | | | |
| 10 | c | Q－5 | 円形 | 盥 | | － | － | － | － | | 18 | 10b土 | | | |
| 11 | | P－6 | 円形 | 皿 | 三層 | 78 | 78 | 39 | 36 | N－44°－E | 13 | | | | |
| 12 | | P－6 | 柱穴 | | | 40 | 32 | 26 | 25 | N－78°－E | 10 | | | | |
| 13 | | P－6 | 方形 | 皿 | 単一 | 140 | 136 | 96 | 74 | N－11°－W | 20 | | | 中世 | 建2 |
| 14 | | Q－5 | 楕円形 | 樽 | 単一 | 72 | 56 | 50 | 34 | N－40°－E | 16 | 9土 | | | |
| 15 | | S－4 | 楕円形 | 樽状 | | 126 | － | 108 | － | | 42 | | 土師器坏口1・底2・灰釉陶器1 | | |
| 16 | | Q－5 | 柱穴 | | | 36 | 28 | 28 | 20 | N－50°－W | 18 | | | | |
| 17 | | P－6 | 柱穴 | | 三角堆土 | 36 | 46 | 36 | 34 | N－40°－E | 16 | | | 中世 | 建2 |
| 18 | | P－6 | 柱穴 | | 単一 | 56 | 52 | 48 | 42 | N－30°－W | 8 | | | 中世 | 建2 |
| 19 | a | O－6 | 長方形 | 皿 | 二層 | (64) | 52 | (48) | 40 | N－30°－W | 13 | 19b土 | | | |
| 19 | b | O－6 | 柱穴 | | | 100 | (66) | 92 | (50) | N－12°－E | 13 | 19a土 | | 中世 | 建2 |
| 20 | | O－6 | 円形 | 皿 | 単一 | 116 | 104 | 104 | 92 | N－56°－E | 7 | | | | |
| 21 | | O－5・6 | 柱穴 | | 単一 | 52 | 48 | 40 | 38 | N－10°－W | 4 | | | 中世 | 建2 |
| 22 | | O－5 | 柱穴 | | 単一 | 52 | 48 | 44 | 48 | N－29°－W | 10 | | | | |
| 23 | | O－7 | 円形 | 不整形 | 二層 | 101 | 98 | 88 | 84 | N－89°－W | 19 | | | | |
| 24 | | O－6 | 柱穴 | | 三角堆土 | － | － | － | － | | 62 | | | | |
| 25 | | O・N－7 | 隅丸長方形 | 皿 | 三角堆土 | 210 | 124 | 186 | 96 | N－63°－W | 22 | 26土 | 硯1・土師器坏口1・胴2・1・甕1・灰釉陶器椀口1・胴1・内耳土器1 | 近世 | |

表1　中村遺跡土坑一覧表(2)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 26 | a | N－7 | 柱穴 | | | 60 | － | 40 | 36 | N－71°－W | 14 | | | | |
| 26 | b | N－7 | 柱穴 | | | 72 | － | 54 | － | | 25 | | | | |
| 27 | | O－7 | 不整形 | 樽 | | 76 | 64 | 54 | 48 | | 15 | | | | |
| 28 | | O－7 | 柱穴 | | | 52 | － | 42 | － | N－56°－W | 14 | | | | |
| 29 | | O－7 | 柱穴 | | | － | 44 | － | 26 | | 18 | | | | |
| 30 | | O－7 | 円形 | 樽 | | 148 | － | 114 | 116 | N－49°－E | 23 | | | | |
| 31 | | N－7 | 柱穴 | | | 28 | 21 | 24 | 16 | N－55°－W | 9 | | | 中世 | 建4 |
| 32 | | N－8 | 柱穴 | | | 34 | 28 | 20 | 18 | N－88°－W | 17 | | | 中世 | 建4 |
| 33 | | N－7・8 | 円形 | 皿 | | 77 | 60 | 56 | 54 | N－50°－W | 10 | | | | |
| 34 | | O－7 | 柱穴 | | | 93 | 52 | 52 | 44 | N－9°－E | 9 | | | | |
| 35 | | N－7 | 柱穴 | 不整形 | | 32 | 32 | 28 | 20 | N－85°－W | 10 | | | 中世 | 建4 |
| 36 | | N－8 | 柱穴 | | | 35 | 20 | 28 | 20 | N－36°－W | 6 | | | 中世 | 建4 |
| 37 | | N－8 | 柱穴 | | | 32 | 28 | 24 | 19 | N－16°－W | 16 | | | 中世 | 建4 |
| 38 | | M－9 | 柱穴 | | | 28 | 23 | 19 | 13 | N－25°－E | 15 | | | | |
| 38 | | M－9 | | | | 106 | － | 96 | － | | 14 | | | | |
| 39 | | M－9 | 不整形 | 不整形 | | 57 | 37 | 34 | 27 | N－8°－E | 14 | | | | |
| 40 | | O－5 | 柱穴 | 不整形 | 三層 | 46 | 36 | 44 | 34 | N－19°－E | 16 | | | 中世 | 建3 |
| 41 | | O－5 | 柱穴 | | 単一 | 60 | 45 | 48 | 34 | N－42°－E | 10 | | | 中世 | 建3 |
| 42 | | O－5 | 柱穴 | | 単一 | 42 | 38 | 29 | 28 | N－3°－E | 9 | | | 中世 | 建3 |
| 43 | | O－4 | 円形 | 盥状 | 単一 | 104 | 88 | 96 | 70 | N－12°－E | 12 | | | 中世 | 建3 |
| 45 | | N－5 | 円形 | 盥状 | 三角堆土 | 80 | 70.8 | 70 | 64 | N－66°－W | 18 | | 土師器坏1 | 中世 | 建3 |
| 46 | | N－4 | 柱穴 | | 二層 | 36 | 29 | 32 | 25 | N－51°－E | 30 | | | | |
| 47 | | | | | | | | | | | 38 | | | | |
| 48 | | N－5 | 円形 | 樽 | 単一 | 112 | － | 96 | － | N－48°－E | 21 | | | 中世 | 建3 |
| 49 | | M－9 | 柱穴 | | | 27 | 21 | 24 | 16 | N－10°－E | 13 | | | | |
| 50 | | S－13 | 柱穴 | | | 24 | 22 | 13 | 12 | N－85°－E | 16 | | | | |
| 51 | | K－10 | 柱穴 | | 単一 | － | 72 | 55 | 52 | | 82 | | | | |
| 52 | | S－13 | 不整形 | 不整形 | | 79 | 54 | 66 | 57 | N－86°－W | 11 | | | | |
| 53 | a | S－13 | 不整形 | 皿 | | 60 | 48 | 30 | 40 | N－55°－W | 16 | 53b土 | | | |

表１　中村遺跡土坑一覧表(3)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 53 | b | S－13 | 円形 | | | 70 | － | 64 | － | | 8 | 53a土 | | | |
| 54 | | S・R－13 | 隅丸長方形 | 盥 | | 52 | 42 | 51 | 36 | N－0° | 14 | | 石 | | |
| 55 | | R－13 | 隅丸長方形 | 皿 | | 51 | 42 | 42 | 36 | N－75°－E | 7 | | | | |
| 56 | | R－13 | 柱穴 | | | 30 | 27 | 12 | 12 | N－74°－W | 20 | | | | |
| 57 | | R－13 | 楕円形 | 不整形 | | 54 | 39 | 42 | 30 | N－5°－W | 10 | | | | |
| 58 | | R－13 | 柱穴 | | | 27 | 24 | 15 | 13 | N－47°－W | 18 | | | | |
| 59 | | R－13 | 柱穴 | | | 30 | 24 | 18 | 13 | N－67°－E | 24 | | | | |
| 60 | | R－13 | 柱穴 | | | 63 | 51 | 21 | 18 | N－4°－W | 20 | | | | |
| 61 | | R－13 | 不整形 | 皿 | | 78 | 48 | 69 | 39 | N－30°－E | 12 | | | | |
| 62 | | R－13 | 柱穴 | | | 33 | 30 | 18 | 18 | N－35°－E | 15 | | | | |
| 63 | | R－13 | 柱穴 | | | 33 | 24 | 19 | 18 | N－28°－E | 9 | | | | |
| 64 | | R－14 | 楕円形 | 不整形 | | 84 | 69 | － | － | N－60°－W | 12 | | | | |
| 65 | | R－13 | 柱穴 | | | 40 | 36 | 32 | 27 | N－45°－E | 7 | | | | |
| 66 | | R－14 | 柱穴 | | | 45 | 33 | 33 | 33 | N－81°－W | 8 | | | | |
| 67 | | R－14 | 柱穴 | | | 36 | 24 | 27 | 24 | N－15°－E | 4 | | | | |
| 68 | | R－14 | 不整形 | 不整形 | | 54 | 31 | 42 | 18 | N－60°－E | 9 | | | | |
| 69 | | R－14 | 柱穴 | | | 54 | 46 | 42 | 39 | N－54°－E | 8 | | | | |
| 70 | | R－15 | 隅丸長方形 | 不整形 | | 96 | 96 | 49 | 39 | N－57°－E | 20 | | | | |
| 71 | | R－14 | 柱穴 | | | 72 | 69 | 39 | 30 | N－47°－W | 24 | | | | |
| 72 | 外 | Q－15 | 不整形 | 皿 | | 112 | 78 | － | － | N－42°－W | 9 | | | | |
| 72 | 中 | R－15 | 柱穴 | | | 60 | 60 | 42 | 42 | N－28°－W | 30 | | | | |
| 73 | a | R－14・15 | 正方形 | 皿 | | 84 | 84 | 72 | 72 | N－35°－W | 9 | | | | |
| 73 | b | R－14・15 | 柱穴 | | | 38 | 33 | 23 | 16 | N－0° | 10 | | | | |
| 74 | | Q－15 | 柱穴 | | | 36 | 36 | 30 | 24 | N－73°－E | 39 | | 土師器坏１ | | |
| 75 | | R・Q－15 | 柱穴 | | | 36 | 30 | 30 | 25 | N－85°－E | 14 | | | | |
| 76 | | Q－15 | 柱穴 | | | 48 | 36 | 33 | 25 | N－77°－W | 9 | | | | |
| 77 | | Q－15 | 不整形 | 皿 | | 84 | 55 | 72 | 42 | N－50°－E | 11 | | | | |
| 78 | | R・Q－15 | 方形 | 不整形 | | 60 | 54 | 52 | 48 | N－55°－W | 12 | | | | |
| 79 | a | Q－15 | 隅丸長方形 | 皿 | | 60 | 43 | 48 | 43 | N－45°－W | 14 | | | | |

表1　中村遺跡土坑一覧表(4)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 79 | b | Q－15 | 方形 | 皿 | | 90 | 72 | 66 | 57 | N－53°－E | 15 | | | | |
| 80 | | Q－15 | 柱穴 | | | 42 | 36 | 30 | 27 | N－0° | 9 | | | | |
| 81 | | Q－15 | 楕円形 | 不整形 | | 53 | 39 | 42 | 30 | N－2°－W | 16 | | | | |
| 82 | | P－15 | 柱穴 | | 単一 | 36 | 30 | 27 | 20 | N－50°－W | 6 | | | | |
| 83 | | P－15 | 柱穴 | | 単一 | 36 | 30 | 25 | 18 | N－23°－E | 6 | | | | |
| 84 | | P－15 | 柱穴 | | 単一 | 57 | 48 | 54 | 37 | N－85°－W | 11 | | | 中世 | 建5 |
| 85 | 外 | P・Q－15・16 | 不整形 | | | 129 | 100 | 120 | 90 | N－45°－E | 11 | 85土外 | 縄文土器1・黒耀石1 | 縄文 | |
| 85 | 中 | P・Q－15・16 | 不整形 | | | 93 | 51 | 79 | 39 | N－68°－W | 14 | 85土中 | | | |
| 86 | | P－16 | 楕円形 | 不整形 | | 86 | 72 | 51 | 27 | N－50°－E | 20 | | 灰釉陶器瓶1（胴部と底部）・椀1 | 平安 | |
| 87 | | P－16 | 柱穴 | | | 30 | 18 | 24 | 12 | N－34°－E | 15 | | 土師器坏口1・胴2 | 平安 | |
| 88 | | O－16 | 長方形 | 盥 | 単一 | 160 | 99 | 150 | 90 | N－35°－E | 8 | | | | |
| 89 | | O－16 | 長方形 | 皿 | 単一 | 96 | 62 | 84 | 63 | N－50°－E | 13 | | | 中世 | 建5 |
| 90 | | O－16 | 不整形 | 皿 | | 66 | 66 | 36 | 36 | N－26°－W | 4 | | | | |
| 91 | | O－17 | 柱穴 | | | 30 | 24 | 18 | 18 | N－46°－E | 19 | | | | |
| 92 | a | O・N－17 | 不整形 | 皿 | | 72 | 60 | 60 | 50 | N－44°－E | 9 | 92土b | 土師器甕胴1 | 平安 | |
| 92 | b | O・N－17 | 不整形 | 皿 | | － | － | 40 | 36 | | 9 | 92土a | | | |
| 92 | c | O・N－17 | 柱穴 | | | 11 | 7 | 5 | 4 | N－0° | 18 | | | | |
| 93 | | P－16 | 柱穴 | | 単一 | 42 | 24 | 30 | 39 | N－55°－E | 12 | | | 中世 | 建5 |
| 94 | | O－16 | 柱穴 | | | 36 | 33 | 30 | 24 | N－50°－W | 12 | | | | |
| 95 | | O－17 | 柱穴 | | | 27 | 24 | 18 | 17 | N－29°－W | | | 縄文土器1 | 縄文 | |
| 96 | | O－17 | 柱穴 | | | 30 | 24 | 21 | 18 | N－83°－E | 11 | | | | |
| 97 | | N－17 | 柱穴 | | | 25 | 24 | 18 | 10 | N－28°－E | 20 | | | | |
| 98 | a | N－17 | 隅丸長方形 | 樽 | | 69 | 57 | 54 | 48 | N－45°－W | 22 | 98土b | | | |
| 98 | b | N－17 | 柱穴 | | | 30 | － | 21 | － | | | 98土a | | | |
| 99 | a | O－17 | 柱穴 | | | 54 | 36 | 31 | 30 | N－0° | 12 | 99土b | | | |
| 99 | b | O－17 | 柱穴 | | | 24 | 24 | 14 | 14 | N－74°－E | 9 | 99土a | | | |
| 100 | | P－16 | | | | 117 | － | － | － | | 70 | | | | |
| 101 | | O－15 | 柱穴 | | | 45 | 36 | 33 | 18 | N－11°－W | 19 | | | | |
| 102 | | O－16 | 柱穴 | | | 27 | 27 | 23 | 18 | N－56°－W | 30 | | | 中世 | 建5 |

表１　中村遺跡土坑一覧表(5)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 103 | | N－17 | 柱穴 | | | 34 | 33 | 30 | 24 | N－75°－W | 17 | | | 中世 | 建6 |
| 104 | | P－16 | 柱穴 | | | 32 | 27 | 24 | 18 | N－30°－W | 8 | | | 中世 | 建5 |
| 105 | | P－16 | 柱穴 | | | 51 | 39 | 42 | 33 | N－30°－E | 12 | | | | |
| 106 | | P－16 | 柱穴 | | | 43 | 37 | 30 | 30 | N－49°－E | 7 | | | | |
| 107 | | U－16・17 | 隅丸方形 | 樽 | | (66) | 63 | 49 | 48 | N－61°－E | 12 | | | | |
| 108 | | U－16 | 柱穴 | | | 36 | 24 | 18 | 12 | N－16°－E | 14 | | | | |
| 109 | | U－17 | 柱穴 | | | 72 | 51 | 54 | 42 | N－9°－W | 8 | | | | |
| 110 | | U－17 | 柱穴 | | | 42 | － | 36 | － | | 10 | | | 中世 | 建7 |
| 111 | | U－17 | 柱穴 | | | 21 | 15 | 18 | 12 | N－60°－W | 12 | | | 中世 | 建7 |
| 112 | | U－17 | 柱穴 | | | 36 | 27 | 25 | 24 | N－85°－W | 46 | | | 中世 | 建7 |
| 113 | | U－18 | 柱穴 | | | 18 | 13 | 12 | 12 | N－56°－E | 10 | | | 中世 | 建7 |
| 114 | | U・T－17 | 柱穴 | | | 36 | 33 | 27 | 24 | N－19°－W | 13 | | | 中世 | 建7 |
| 115 | a | U－17 | 柱穴 | | | 38 | (30) | 27 | (27) | N－0° | 10 | 115b土 | | | |
| 115 | b | U－17 | 柱穴 | | | 36 | － | 24 | － | N－81°－W | 10 | 115a土 | | | |
| 116 | | U－17 | 柱穴 | | | 38 | 30 | 34 | 18 | N－89°－E | 10 | | | | |
| 117 | | U－17 | 柱穴 | | | 39 | 35 | 33 | 27 | N－51°－E | 13 | | | 中世 | 建7 |
| 118 | | T－18 | 柱穴 | | | 24 | 24 | 19 | 19 | N－60°－W | | | | | |
| 119 | | T－18 | 柱穴 | | | 36 | 33 | 31 | 24 | N－72°－E | 21 | | | 中世 | 建7 |
| 120 | | T－18 | 柱穴 | | | 24 | 21 | 15 | 13 | N－46°－W | 17 | | | | |
| 121 | | T－18 | 柱穴 | | | 30 | 27 | 25 | 24 | N－84°－W | 9 | | | 中世 | 建7 |
| 122 | | S・T－19 | 隅丸方形 | 不整形 | | 61 | 48 | 48 | 36 | N－72°－W | 11 | | | | |
| 123 | | S－18 | 隅丸方形 | 盥状 | | 55 | 45 | 45 | 34 | N－89°－E | 15 | | | | |
| 124 | a | O－7 | 柱穴 | | | 40 | 38 | 34 | 30 | N－34°－E | 12 | 124b土 | 縄文土器1 | 中世 | 建4 |
| 124 | b | O－7・8 | 隅丸方形 | 皿 | | 80 | － | 60 | － | N－55°－W | 13 | 124a土 | | | |
| 125 | | O－17 | 柱穴 | | | 18 | 18 | 12 | 12 | N－71°－E | 15 | | | 中世 | 建6 |
| 126 | | R－13 | 柱穴 | | | 36 | 30 | 24 | 24 | N－40°－W | 24 | 61・127土 | | | |
| 127 | | R－13 | 柱穴 | | | 45 | 33 | 36 | 25 | N－21°－W | 18 | 126土 | | | |
| 128 | | R－13 | 柱穴 | | | 45 | 31 | 36 | 21 | N－25°－W | 8 | | | | |
| 129 | | R－14・15 | 柱穴 | | | 30 | 25 | 18 | 12 | N－18°－E | 12 | | | | |

表1　中村遺跡土坑一覧表(6)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 130 | | P－15 | 楕円形 | 不整形 | | 102 | 90 | 73 | 48 | N－73°－W | 18 | | | | |
| 131 | | U－17 | 柱穴 | | | 24 | 18 | 19 | 13 | N－24°－E | 14 | | | | |
| 132 | | R－13 | 柱穴 | | | 19 | 18 | 13 | 13 | N－55°－W | 6 | | | | |
| 133 | | O・N－17 | 柱穴 | | | 13 | 12 | 10 | 10 | N－41°－W | 14 | | | | |
| 134 | | N－17 | 柱穴 | | | 30 | 22 | 12 | 12 | N－58°－W | 22 | | | | |
| 135 | | N－17 | 柱穴 | | | 24 | 21 | 18 | 18 | N－55°－W | 24 | | | 中世 | 建6 |
| 136 | | N－18 | 柱穴 | | | 21 | 19 | 15 | 11 | N－37°－E | 26 | | | | |
| 137 | | N－18 | 柱穴 | | | 36 | 28 | 24 | 23 | N－40°－W | 14 | | | 中世 | 建6 |
| 138 | | N－18 | 柱穴 | | | 21 | 18 | 20 | 19 | N－41°－W | 6 | | | 中世 | 建6 |
| 139 | | N－18 | 柱穴 | | | 62 | － | 72 | － | N－56°－W | 6 | | | | |
| 140 | | N－18 | 柱穴 | | | 24 | 23 | 18 | 18 | N－75°－W | 7 | | | | |
| 141 | | O－17 | 柱穴 | | | 21 | 15 | 12 | 12 | N－71°－W | 12 | | | 中世 | 建6 |
| 142 | | O－17 | 柱穴 | | | 30 | 24 | 24 | 18 | N－34°－E | 20 | | | 中世 | 建6 |
| 143 | | O－17 | 柱穴 | | | 18 | 17 | 12 | 10 | N－26°－E | 16 | | | 中世 | 建6 |
| 144 | | O－17 | 柱穴 | | | 22 | 18 | 21 | 13 | N－89°－E | 22 | | | 中世 | 建6 |
| 145 | | O－16 | 柱穴 | | | 24 | 21 | 21 | 12 | N－49°－W | 18 | | | | |
| 146 | | O－16 | 柱穴 | | | 18 | 15 | 8 | 7 | N－52°－W | 6 | | | | |
| 147 | | O－16 | 柱穴 | | | 18 | 13 | 12 | 12 | N－46°－E | 10 | | | | |
| 148 | | P－16 | 柱穴 | | | 24 | 15 | 15 | 12 | N－67°－E | 18 | | | | |
| 149 | a | O－16 | 柱穴 | | | － | 22 | 19 | 12 | N－66°－W | 20 | | | 中世 | 建5 |
| 150 | b | O－16 | 柱穴 | | | － | 13 | 19 | 7 | N－66°－W | 36 | | | 中世 | 建5 |
| 151 | | O－16 | 柱穴 | | | 33 | 25 | 24 | 24 | N－49°－E | 14 | | | 中世 | 建5 |
| 152 | | P－16 | 柱穴 | | | 36 | 24 | 19 | 15 | N－43°－W | 24 | | | | |
| 153 | | P－16 | 柱穴 | | | 42 | 36 | 33 | 25 | N－18°－E | 8 | | | 中世 | 建5 |
| 154 | | O－15・16 | 柱穴 | | | 27 | 25 | 24 | 24 | N－5°－W | 10 | | | | |
| 155 | | O－16 | 柱穴 | | | 27 | 18 | 21 | 13 | N－17°－E | 15 | | | 中世 | 建5 |
| 156 | | P－16 | 柱穴 | | | 24 | 20 | 18 | 12 | N－38°－W | 12 | | | | |
| 157 | | P－16 | 柱穴 | | | 25 | 18 | 23 | 15 | N－8°－E | 16 | | | | |
| 158 | | R－14 | 柱穴 | | | 42 | 27 | 18 | 16 | N－45°－E | 32 | | | | |

表１　中村遺跡土坑一覧表(7)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 159 | | S－14 | 柱穴 | | | 42 | 30 | 30 | 19 | N－97°－E | 13 | | | | |
| 160 | | R－15 | 柱穴 | | | 36 | 24 | 24 | 12 | N－75°－W | 14 | | | | |
| 161 | | L－9 | 不整形 | 盥状 | | 114 | 102 | 96 | 87 | N－70°－W | 11 | | | | |
| 162 | | N－8 | 柱穴 | | | 24 | 24 | 20 | 15 | N－35°－W | 7 | | | | |
| 163 | | M－8 | 円形 | | | 105 | － | 96 | － | | 11 | | | | |
| 164 | | O－6 | 柱穴 | | | 40 | 40 | 30 | 28 | N－30°－W | 16 | | | 中世 | 建2 |
| 165 | | Q－5 | 柱穴 | | | 32 | 20 | 24 | 16 | N－15°－W | 8 | | | | |
| 166 | | S－3 | 柱穴 | | | 28 | 20 | 20 | 16 | N－15°－W | 40 | | | | |
| 167 | | T－3 | 柱穴 | | | 24 | 21 | 20 | 18 | N－52°－E | 14 | | | 中世 | 建1 |
| 168 | | T－3 | 柱穴 | | | 33 | 28 | 20 | 20 | N－39°－E | 14 | | | 中世 | 建1 |
| 170 | | S－4 | 楕円形 | 樽状 | | － | － | － | － | | 26 | 1住 | | | |
| 171 | | S－4 | 楕円形 | 不整形 | | － | － | － | － | | 4 | 1住 | | | |
| 173 | | O－16 | 不整形 | 不整形 | | 64 | 20 | 56 | 12 | N－52°－W | 42 | | | | |

表２　外垣外遺跡土坑一覧表

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 1 | | T－31 | 隅丸方形 | 樽 | 三角堆土 | 132 | 96 | 105 | 81 | N－0° | 24 | | 縄文土器26g | | |
| 2 | | U－32 | 楕円形 | 皿 | 1層 | 48 | 39 | 36 | 30 | N－0° | 9 | | | | |
| 3 | | U－31・32 | ピット | | 1層 | 48 | 39 | 21 | 21 | N－18°－E | 14 | | | | |
| 4 | | T－30 | 円形 | 樽 | 1層 | 69 | 67 | 57 | 46 | | 41 | | | | |
| 5 | | T－30・31 | 円形 | 盥 | 1層 | 84 | 84 | 73 | 62 | N－28°－W | 30 | | 縄文土器11g | | |
| 6 | | T－31 | 円形 | 不整形 | 1層 | 54 | 54 | 36 | 33 | N－52°－E | 21 | | | | |
| 7 | | U－31 | 楕円形 | 皿 | 1層 | 72 | 60 | 54 | 42 | N－6°－W | 10 | | | | |
| 8 | | U－32 | 隅丸方形 | 樽 | | 72 | 66 | 45 | 42 | N－45°－E | 33 | | | | |
| 9 | | U－32 | 不整形 | 樽 | 1層 | 55 | 49 | 37 | 30 | N－63°－E | 18 | | | | |
| 10 | | U－32 | 円形 | 樽 | 1層 | 57 | 55 | 42 | 37 | N－60°－E | 21 | | | | |
| 11 | | T－31 | 不整形 | 盥 | 2層 | － | 126 | (129) | 114 | N－65°－W | 15 | | 縄文土器46g・黒耀石1g | 中期中葉 | |
| 12 | | U－31・32 | 隅丸長方形 | 盥 | 1層 | 72 | 57 | 48 | 42 | N－0° | 25 | | 縄文土器19g | | |

表３　蟹畑遺跡土坑一覧表(1)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 2 | | a・b－9 | 円形 | 樽形 | 三角堆土 | 120 | 105 | 91 | 72 | N－89°－E | 32 | | 土師器坏・甕・灰釉陶器瓶 | 平安 | |
| 3 | | a－9 | 隅丸長方形 | 樽形 | 一層 | 89 | 64 | 50 | 45 | N－8°－W | 15 | | 縄文土器片１・土師器高台付坏２・甕１ | 縄文 | |
| 4 | | a・b－8 | | 皿状 | | 112 | － | 68 | － | N－24°－E | 22 | ２号住居址と重複 | 磨石１・磨製石斧１・有茎石鏃１ | 縄文 | |
| 6 | | b－2 | 不整形 | 樽形 | | 88 | 54 | 70 | 37 | N－2°－E | 37 | | 土師器甕１ | 平安か | ５住 |
| 9 | | b－5 | 隅丸長方形 | | | 118 | 74 | 78 | 41 | N－28°－E | 46 | | | 縄文 | 陥穴 |
| 10 | | a－2 | 円形 | 樽形 | | 126 | 108 | 94 | 90 | N－0° | 37 | ５号住居址と重複 | | | |
| 12 | | b・c－9 | 隅丸方形 | 樽形 | | 64 | 50 | 41 | 33 | N－59°－E | 23 | | | 縄文 | 内部に焼土 |
| 13 | | b・c－8 | 円形 | 樽形 | | 87 | 78 | 47 | 43 | N－68°－E | 24 | | | | |
| 16 | | d・e－7 | 方形竪穴 | 樽 | 一層 | 200 | 147 | 176 | 138 | N－13°－E | 16 | 10号住居址 | 土師器坏３・灰釉陶器椀２・瓶１・須恵器甕１・内耳土器片２・天目茶碗１ | 中世 | |
| 17 | | d－2・3 | 円形 | 盥形 | | 162 | 151 | 124 | 118 | N－89°－E | 33 | | 縄文土器片２ | 縄文 | 内部に焼土 |
| 18 | | c－5 | 柱穴 | | | 27 | 23 | 15 | 11 | N－80°－E | 38 | | 縄文土器片２ | | |
| 19 | | c－5 | 柱穴 | | | 43 | 39 | 17 | 15 | N－18°－E | 31 | | | | |
| 20 | | c－5 | 柱穴 | | | 23 | 21 | 15 | 13 | N－77°－E | 24 | | | | |
| 21 | | c－5 | 柱穴 | | | 22 | 19 | 17 | 10 | N－83°－E | 21 | | | | |
| 22 | | c－4 | 柱穴 | | | 25 | 23 | 15 | 11 | N－82°－E | 28 | | | | |
| 23 | | c－4 | 柱穴 | | | 32 | 28 | 16 | 14 | N－3°－W | 13 | | | | |
| 24 | | c－3 | 柱穴 | | | 34 | 29 | 22 | 21 | N－6°－E | 11 | | | | |
| 25 | | b－2 | 柱穴 | | | 35 | 30 | 20 | 18 | N－2°－W | 14 | | | | |
| 26 | | d－4 | 柱穴 | | | 28 | 22 | 16 | 12 | N－35°－W | 14 | | | | |
| 27 | | d－5 | 柱穴 | | | 30 | 27 | 16 | 12 | N－41°－W | 20 | | | | |
| 28 | | d－5 | 柱穴 | | | 31 | 28 | 15 | 5 | N－62°－W | 72 | | | | |
| 30 | | d－8 | 柱穴 | | | 31 | 22 | 28 | 20 | N－61°－W | 16 | | 灰釉陶器瓶１ | | |
| 31 | | d－5 | 柱穴 | | | 46 | 31 | 20 | 6 | N－87°－E | 52 | | | | |
| 32 | | d－5 | 柱穴 | | | 48 | 33 | 29 | 20 | N－80°－E | 37 | | | | |
| 33 | | c－5 | 柱穴 | | | 28 | 24 | 16 | 12 | N－85°－E | 35 | | 縄文土器片１ | | |
| 34 | | c－5 | 柱穴 | | | 48 | 28 | 20 | 14 | N－83°－E | 34 | | 縄文土器片１ | | |
| 35 | | c－5 | 柱穴 | | | 30 | 25 | 12 | 10 | N－7°－W | 23 | | | | |

表３　蟹畑遺跡土坑一覧表(2)

| 土坑番号 | 枝番 | 検出位置 | 平面形 | 断面形 | 土層状態 | 上端規模(cm) | | 下端規模(cm) | | 長軸方向 | 深さ(cm) | 重複関係 | 出土遺物 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 長軸 | 短軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | | |
| 39 | | c－5 | 柱穴 | | | 23 | 23 | 16 | 11 | N－47°－W | 20 | | 縄文土器片１ | | |
| 40 | | c－5 | 柱穴 | | | 28 | 21 | 21 | 17 | N－42°－W | 23 | | | | |
| 41 | | d－5 | 柱穴 | | | 39 | 32 | 17 | 16 | N－11°－W | 12 | | | | |
| 42 | | d－5 | 柱穴 | | | 35 | 30 | 26 | 21 | N－20°－W | 15 | | | | |
| 43 | | d－4 | 柱穴 | | | 30 | 23 | 14 | 14 | N－70°－E | 19 | | | | |
| 44 | | d－4 | 柱穴 | | | 28 | 20 | 30 | 29 | N－70°－E | 23 | | | | |
| 45 | | c－3 | 柱穴 | | | 32 | 28 | 22 | 18 | N－41°－E | 20 | | | | |
| 46 | | c－4 | 柱穴 | | | 27 | 25 | 18 | 16 | N－７°－W | 8 | | | | |
| 47 | | c・d－4 | 柱穴 | | | 24 | 24 | 14 | 11 | N－82°－E | 17 | | | | |
| 48 | | d－5 | 柱穴 | | | 33 | 31 | 22 | 20 | N－52°－W | 20 | | | | |
| 49 | | d－5 | 柱穴 | | | 30 | 30 | 27 | 25 | N－88°－W | 22 | | | | |
| 53 | | d－１・２ | 隅丸長方形 | 樽状 | 平行堆積 | 122 | 101 | 102 | 70 | N－３°－E | 43 | | | | |
| 54 | | d－3 | 柱穴 | | | 37 | 37 | 30 | 25 | N－87°－E | 27 | | | | |
| 55 | | d－3 | 柱穴 | | | 35 | 35 | 30 | 23 | N－54°－W | 22 | | | | |
| 57 | | c－5 | 柱穴 | | | 20 | 20 | 18 | 14 | N－28°－W | 18 | | | | |
| 59 | | c－8 | 柱穴 | | | 43 | 38 | 31 | 24 | N－42°－E | 33 | | 土師器甕１ | | |
| 61 | | c－7 | 柱穴 | | | 34 | 30 | 22 | 20 | N－４°－E | 25 | | | | |
| 62 | | c－8 | 柱穴 | | | 36 | 26 | 10 | 9 | N－56°－E | 52 | | | | |
| 63 | | d－8 | 柱穴 | | | 47 | 46 | 26 | 23 | N－77°－W | 41 | | | | |
| 64 | | d－8 | 柱穴 | | | 46 | 37 | 34 | 25 | N－82°－W | 15 | | | | |
| 65 | | c・d－７ | 柱穴 | | | 40 | 36 | 25 | 19 | N－78°－E | 29 | | | | |
| 68 | a | d－11・12 | 円形 | 巾着状 | 三角堆土 | 125 | 119 | 132 | 130 | N－56°－E | 48 | 68土b | 加曽利Ｂ１式土器13・条痕文土器１・横刃型石器１ | 縄文晩期後半 | |
| 68 | b | d－11・12 | 楕円形 | 皿状 | | 72 | － | － | － | N－26°－W | 24 | 68土a | | | |
| 73 | | d－11・12 | 柱穴 | | 一層 | 58 | 48 | 32 | 30 | N－38°－E | 26 | | | | |
| 75 | | d－11 | 柱穴 | | 三角堆土 | 62 | 50 | 27 | 22 | N－72°－W | 46 | | | | |
| 76 | a | e－10・11 | 隅丸方形 | 不整形 | 三角堆土 | 64 | 52 | － | － | N－７°－E | 44 | 76土b | | | |
| 76 | b | e－10・11 | | | | 46 | 20 | － | － | N－70°－E | | 76土a | 縄文土器片１ | | |
| 78 | | d－11 | 柱穴 | | 二層 | 55 | 49 | 40 | 38 | N－72°－E | 23 | | | | |
| 79 | | d－12 | 隅丸長方形 | 樽状 | 二層 | 74 | 60 | 52 | 44 | N－49°－W | 34 | | | | |
| 80 | | d－12 | 柱穴 | | 一層 | 51 | 38 | 37 | 33 | N－５°－E | 15 | | 縄文土器片１ | | |
| 81 | | d－11 | 柱穴 | | 一層 | 44 | 39 | 34 | 27 | N－80°－E | 18 | | | | |

(1)　遺跡遠景（北より）

(2)　中村・外垣外遺跡（南より）

(1)　A発掘区（北西より）

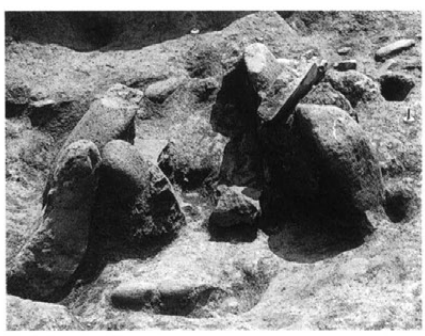
(2)　B発掘区（北西より）

(3)　C発掘区（北西より）

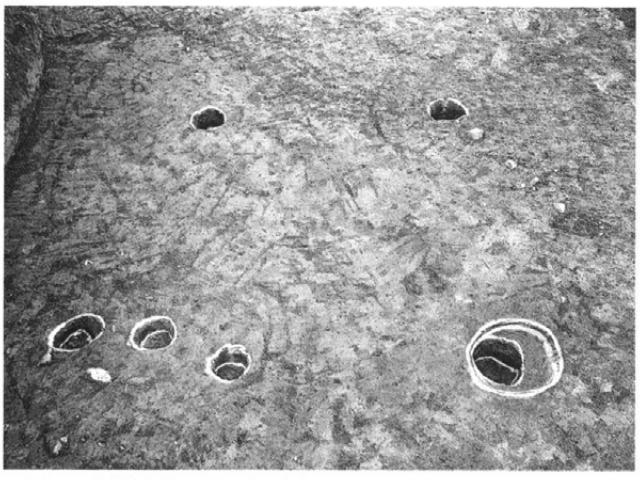
(4)　1号住居址（南西より）

(5)　1号住居址付近出土土器
（南西より）

(6)　2号住居址（南西より）

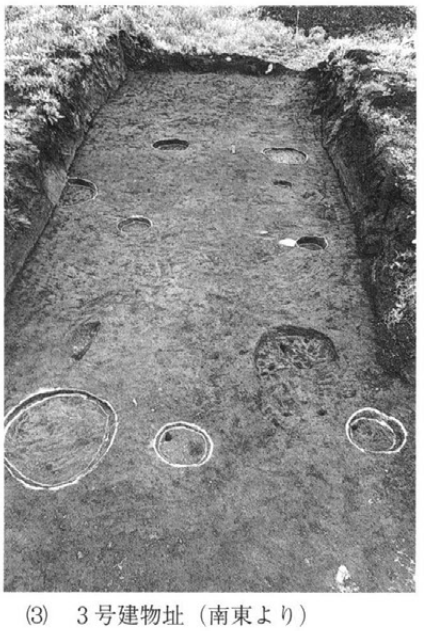


(7)　カマド（南西より）



(1)　1号建物址（北西より）

(2)　2号建物址（北西より）

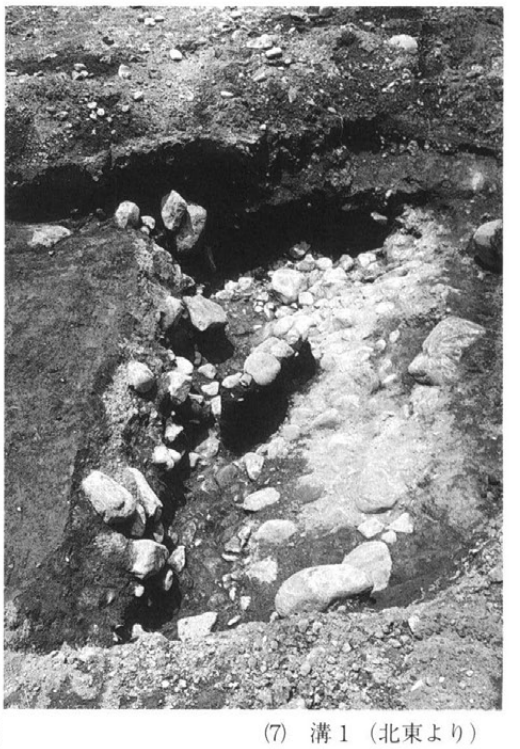


(3)　3号建物址（南東より）

(4)　4号建物址（北より）

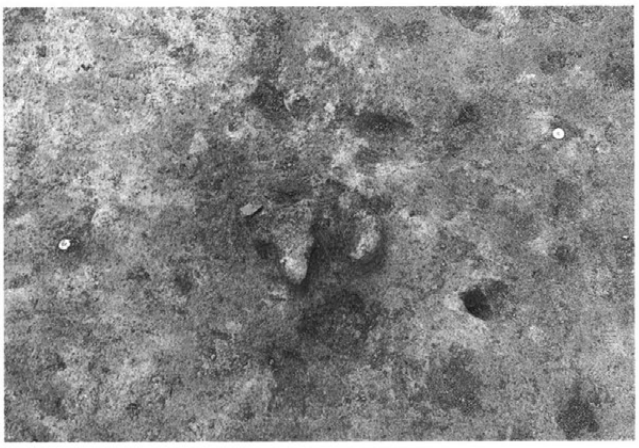
(5)　7号建物址（南西より）

(6)　5号建物址
（南より）

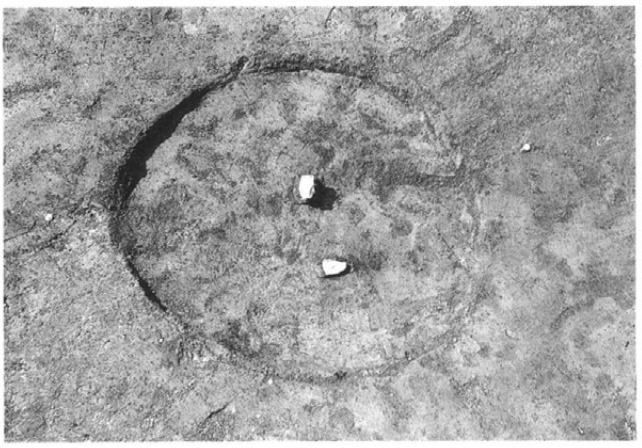


(7)　溝1（北東より）

(8)　溝1（北東より）

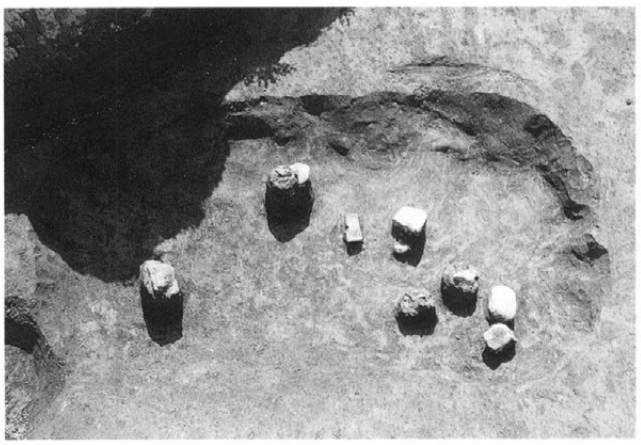


(1)　焼土址１（北西より）



(2)　９号土坑（南より）

(3)　10号土坑（北西より）

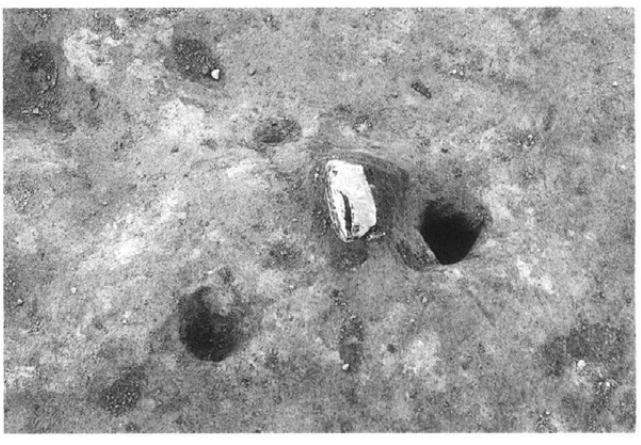


(4)　25号土坑（東より）

(5)　25号土坑（東より）

(6)　30号土坑（南西より）

(7)　85号土坑（北西より）

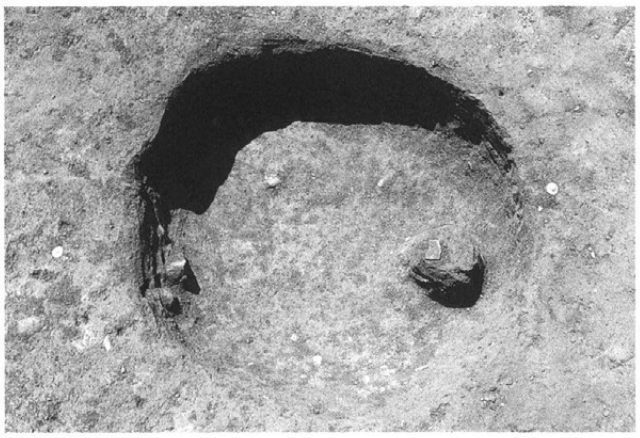


(8)　85号土坑（北西より）

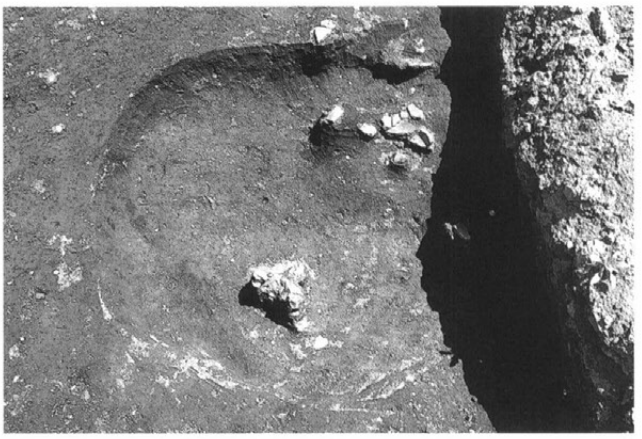
(1)　外垣外遺跡全景（西より）

(2)　1号土坑（北より）

(3)　1号土坑（北より）

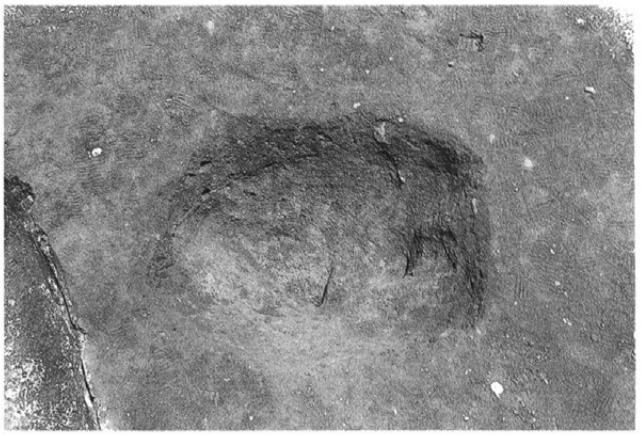


(4)　5号土坑（北より）

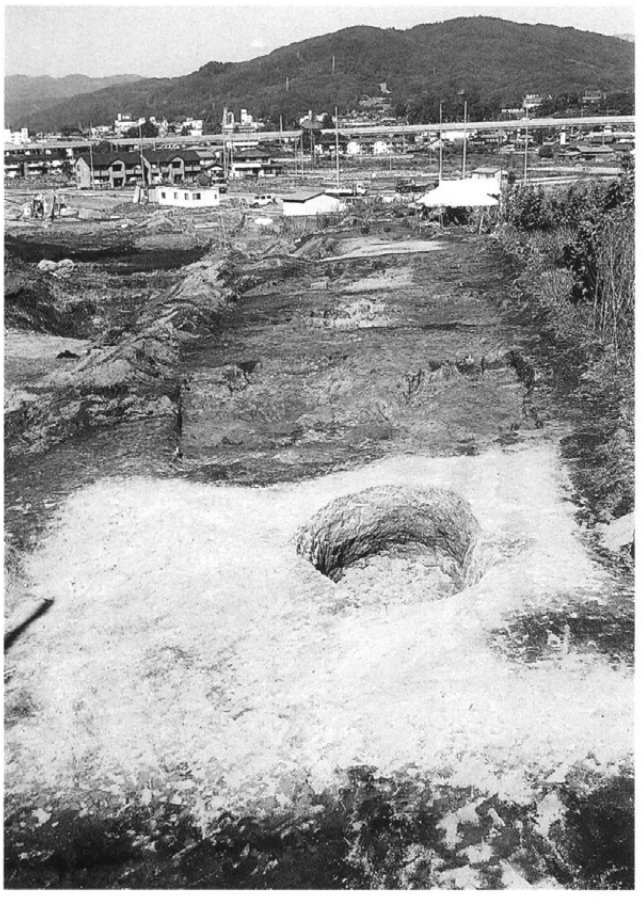


(5)　11号土坑（西より）

(6)　11号土坑（西より）



(7)　12号土坑（西より）



(1)　平成14年度調査区（南より）

(2)　平成14年度調査区（北より）

(3)　平成14年度調査区（北より）

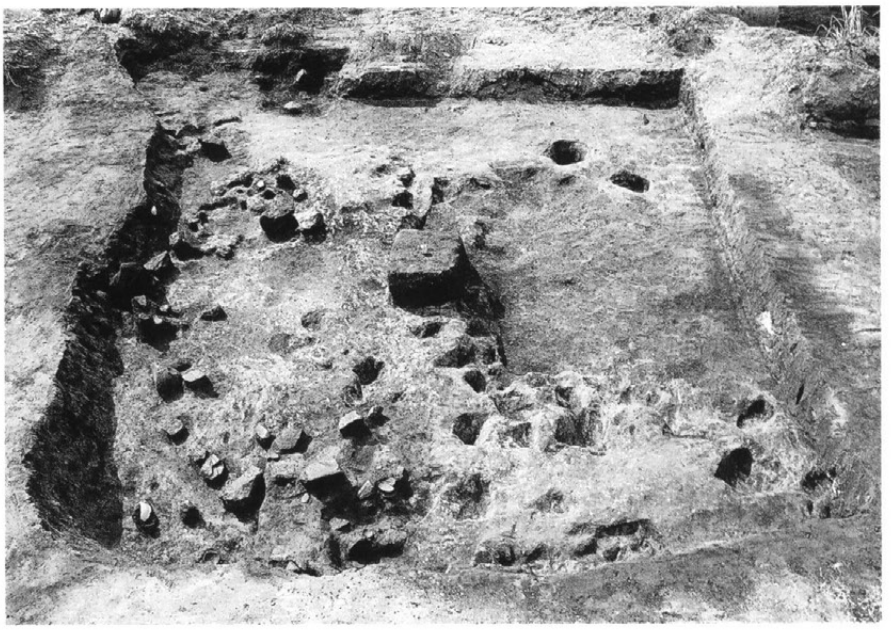
(5)　平成15年度南側調査区（南より）

(4)　平成15年度北側調査区（北より）

(1)　1号住居址（西より）

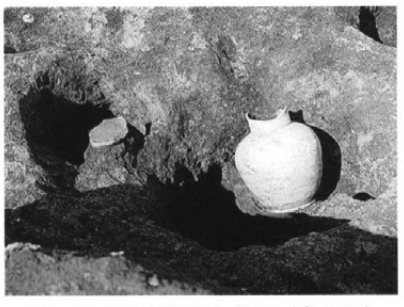
(2)　カマド（西より）

(3)　2号住居址（東より）



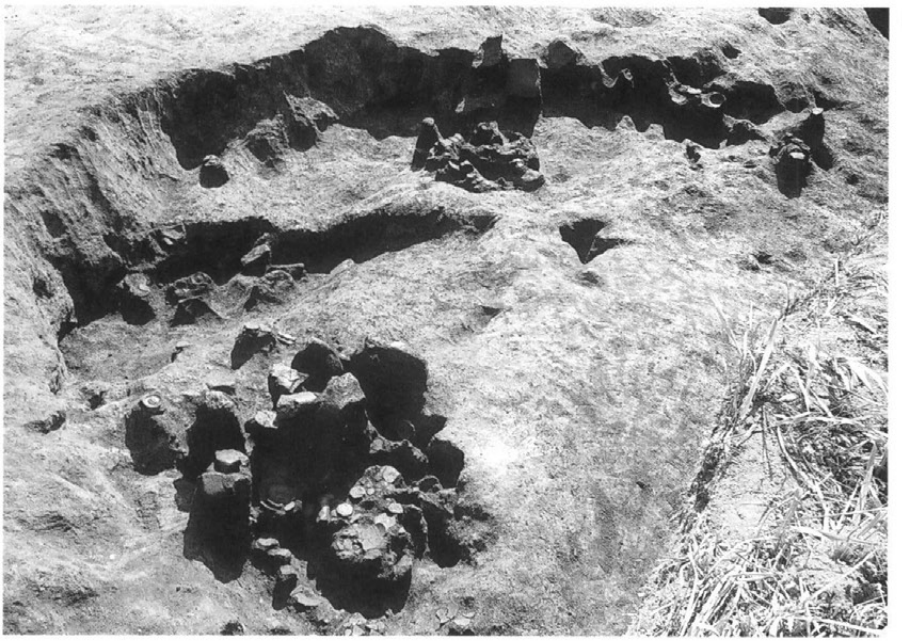
(4)　南側カマド（南より）

(5)　東側カマド（西より）



(7)　灰釉陶器瓶出土状況（南より）

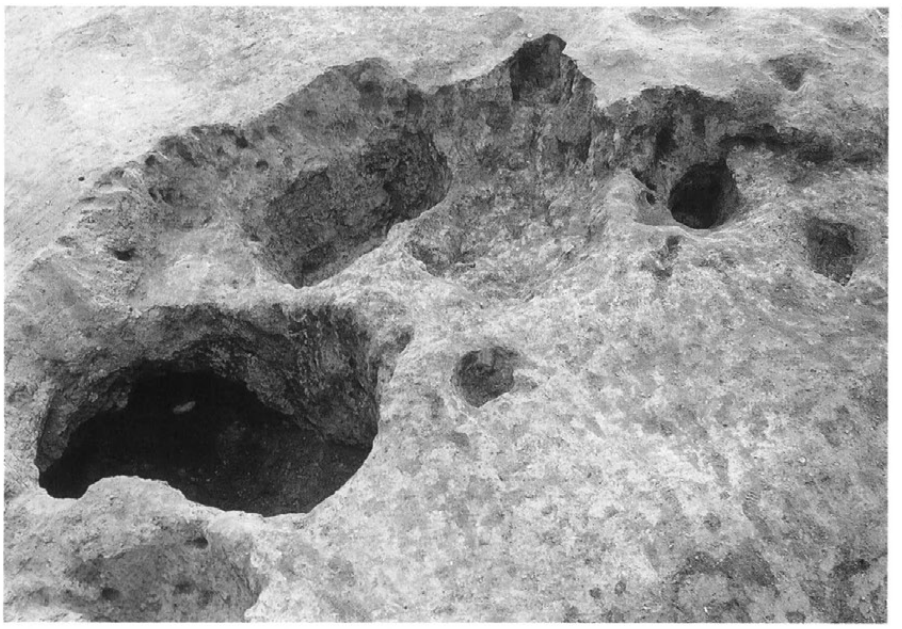
(6)　2号住居址（西より）



(1)　3号住居址（北西より）

(2)　カマド（北西より）

(4)　土師器溜（西より）



(3)　完掘状況（北西より）

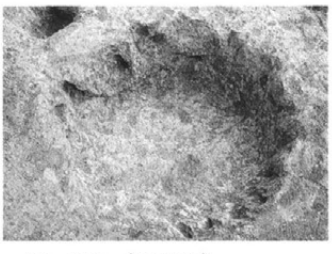
(5)　土師器溜完掘状況

(1)　4号住居址（東より）

(2)　カマド周辺（西より）

(3)　5号住居址（北西より）

(4)　カマド（北西より）

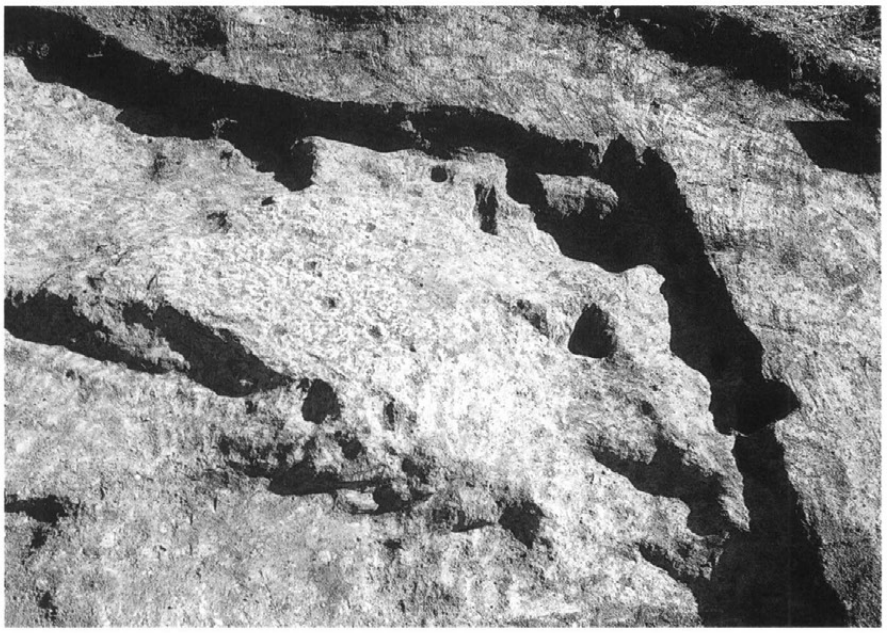


(5)　P1（西より）

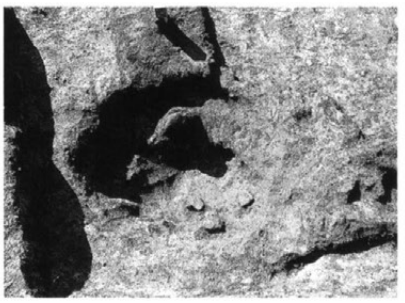
(6)　7号住居址（西より）

(7)　7号住居址（東より）

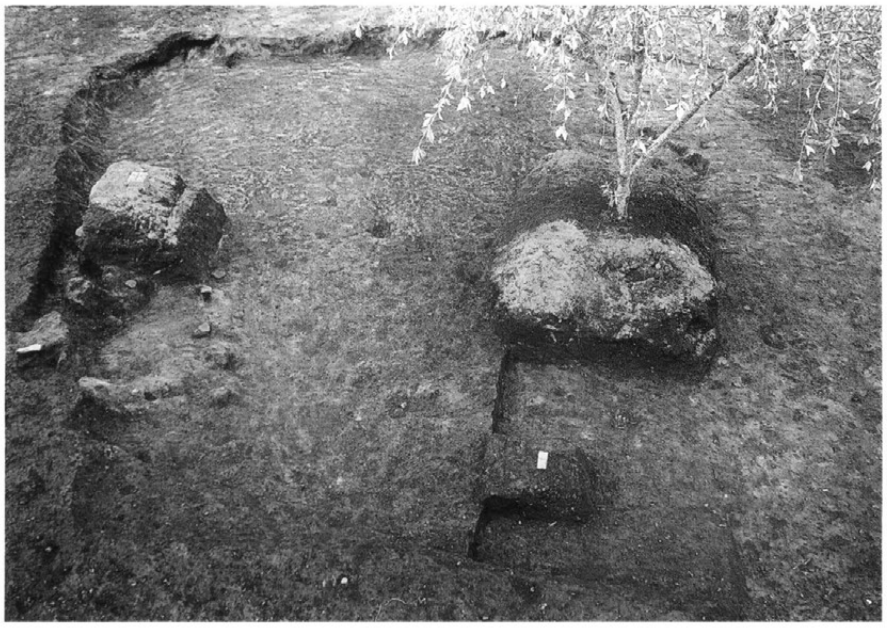
(1)　8号住居址（西より）



(2)　8号住居址（西より）



(3)　カマド（東より）



(4)　9号住居址（東より）

(5)　カマド（北より）

(1)　9号住居址（南より）

(2)　カマド（北より）

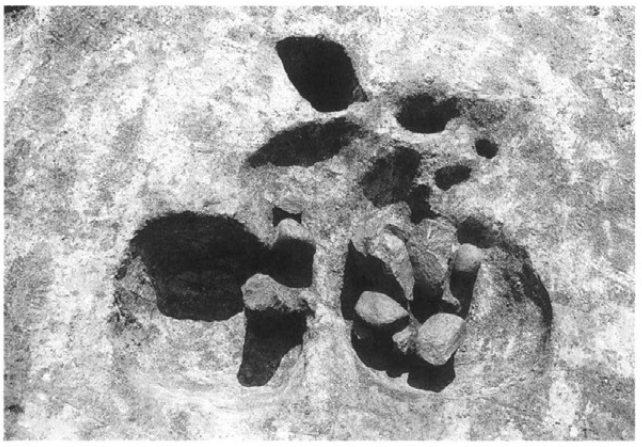
(3)　10号住居址（南より）

(5)　焼土址１（南より）

(6)　焼土址２（南より）

(7)　緑釉陶器出土状況（南より）

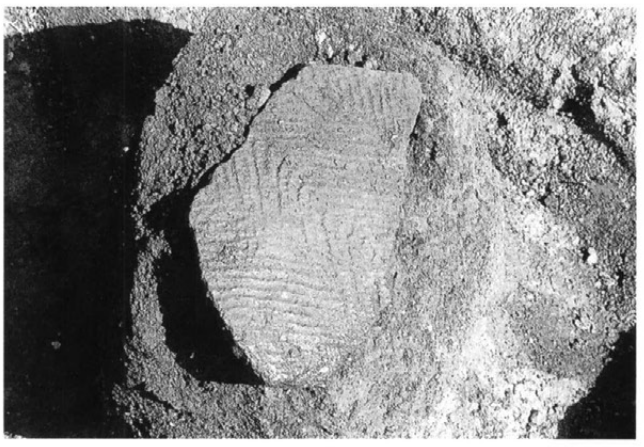
(4)　10号住居址（南より）



⑴　11号住居址（東より）

⑵　11号住居址（東より）

⑶　6 号住居址（東より）

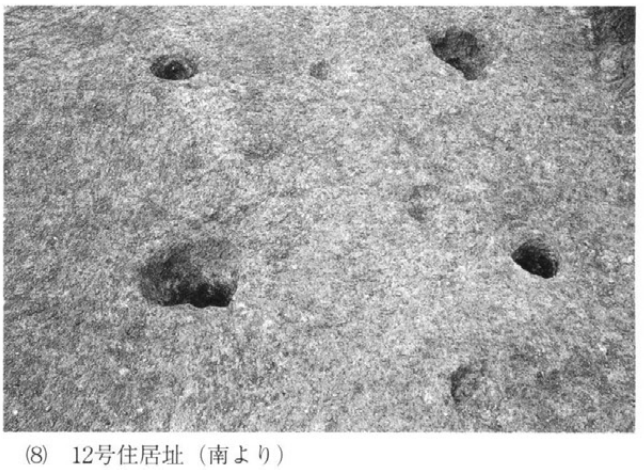


⑷　6 号住居址出土土器（西より）

⑸　6 号住居址（東より）

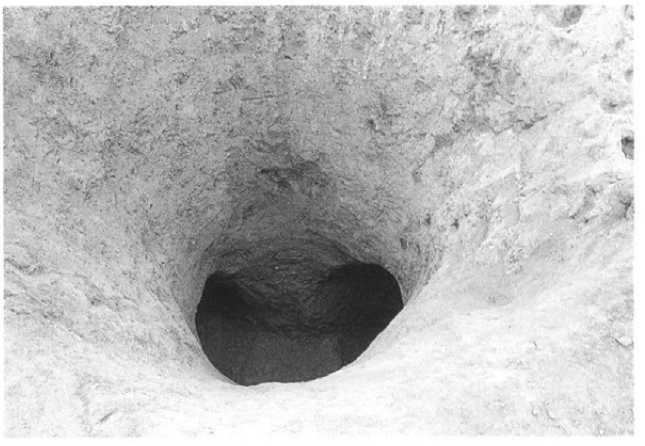
⑹　12号住居址（南より）

⑺　12号住居址出土土器（南より）



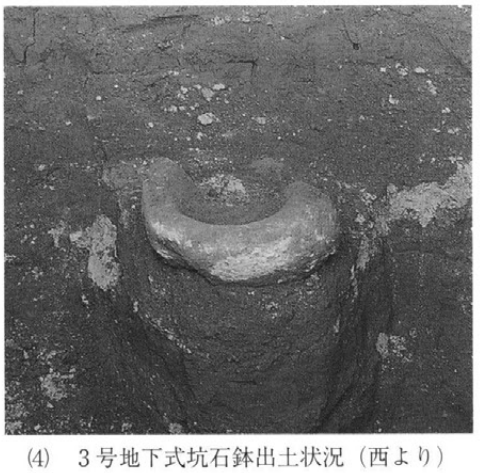
⑻　12号住居址（南より）

(1)　1号地下式坑（西より）



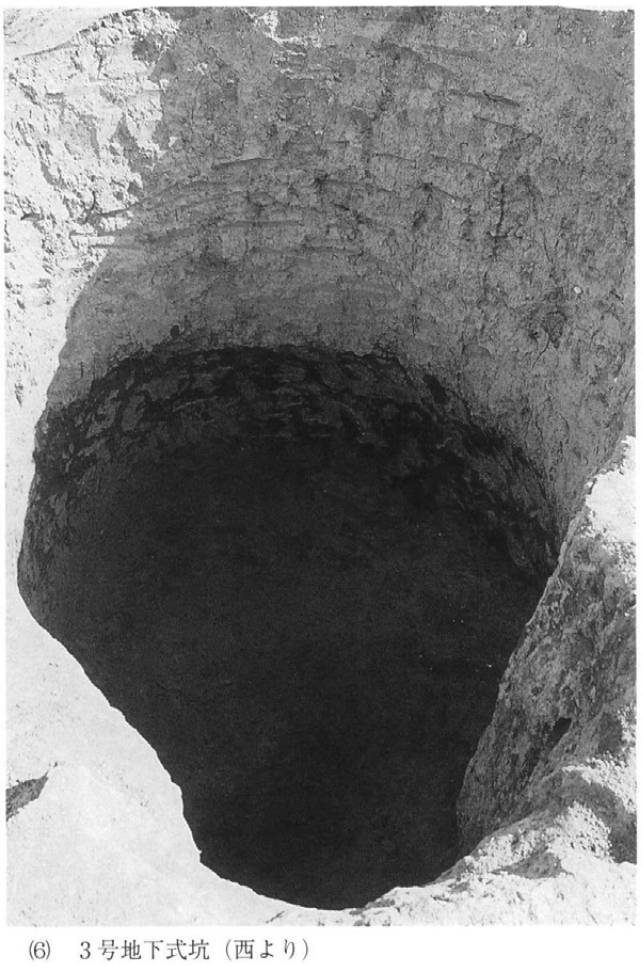
(2)　2号地下式坑（東より）

(3)　3号地下式坑(西より)



(4)　3号地下式坑石鉢出土状況（西より）

(5)　3号地下式坑出土香炉

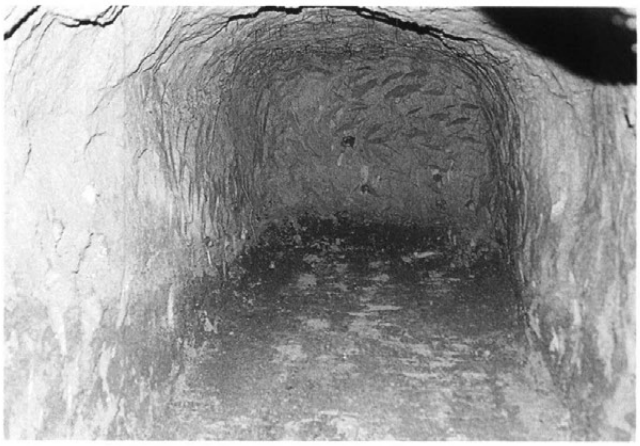


(6)　3号地下式坑（西より）

(7)　3号地下式坑香炉出土状況（東より）

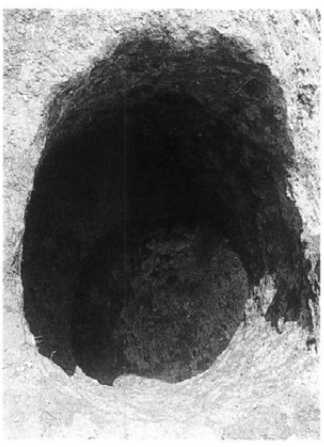
(8)　4号地下式坑入口部（北西より）

⑴　4 号地下式坑（東より）

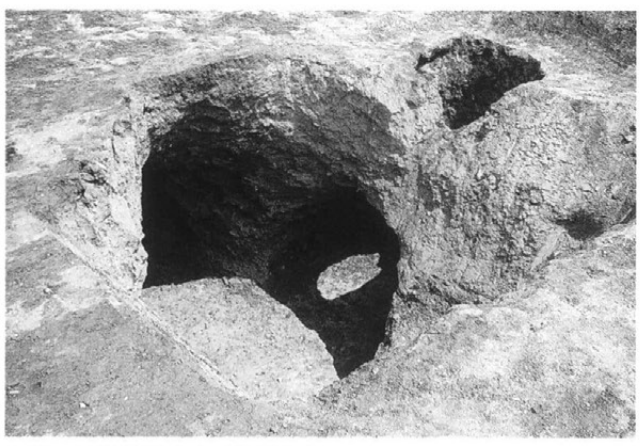


⑵　4 号地下式坑西室

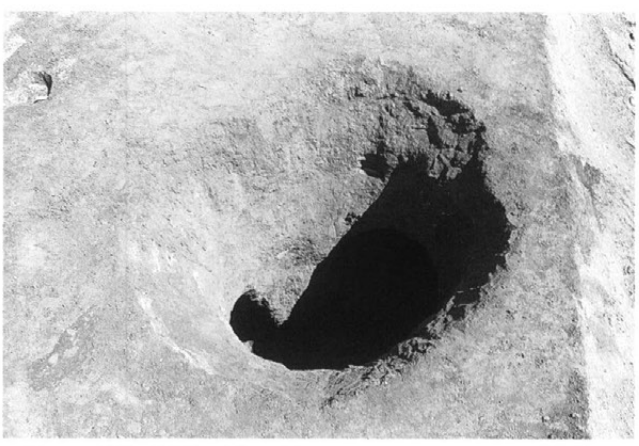
⑶　4 号地下式坑東室



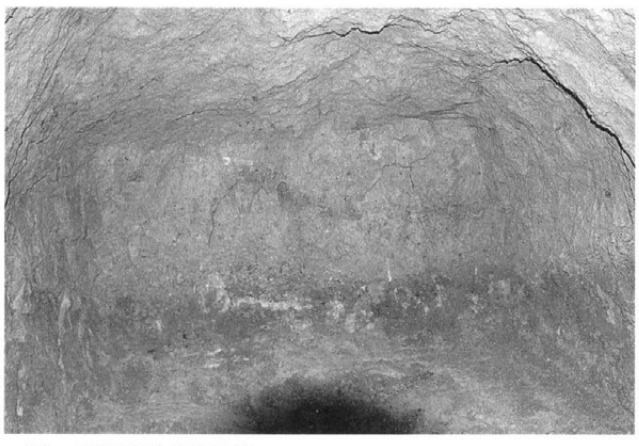
⑷　5 号地下式坑入口部（南より）



⑸　5 号地下式坑（北西より）

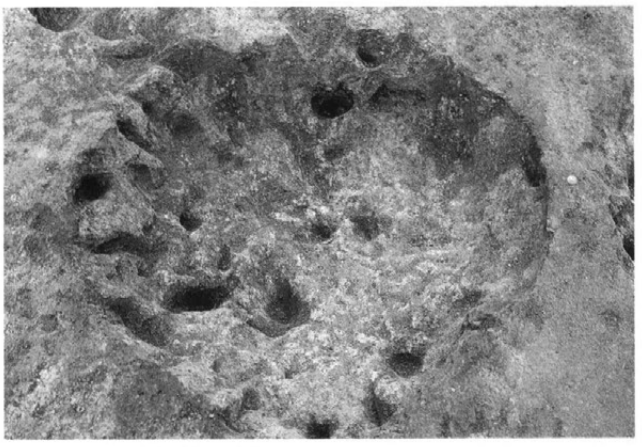


⑹　6 号地下式坑（北より）



⑺　6 号地下式坑西室

⑻　6 号地下式坑東室

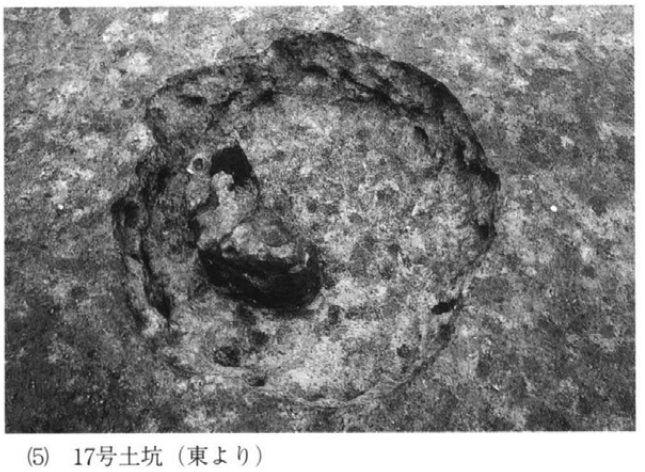


(1)　2号土坑（北より）

(2)　3号土坑（北より）

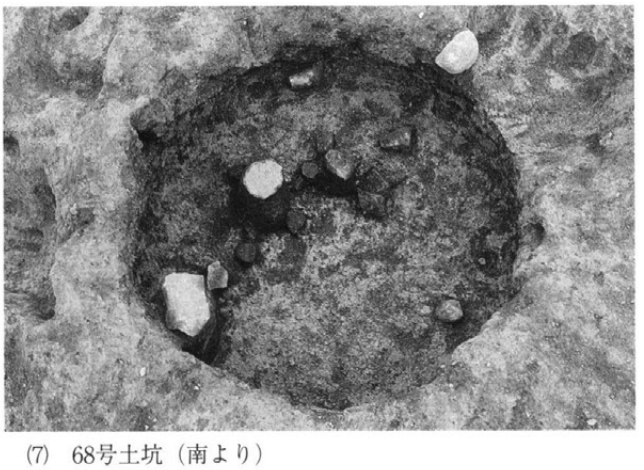
(3)　16号土坑（北より）

(4)　16号土坑（北より）



(5)　17号土坑（東より）

(6)　53号土坑（南より）



(7)　68号土坑（南より）

(8)　76号土坑（東より）

(1)　9号土坑（北東より）

(2)・(3)　平成11年度中村遺跡試掘風景

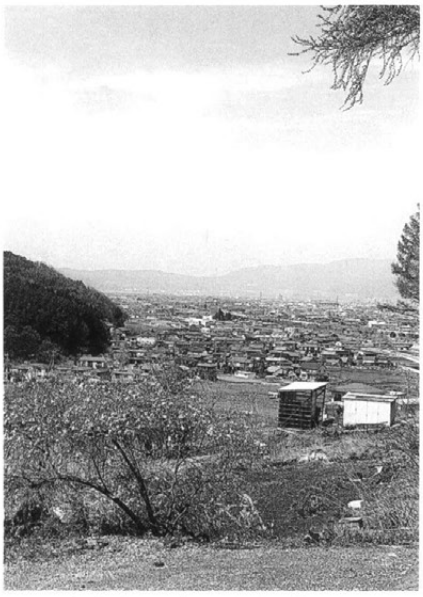
(4)　平成12年度中村遺跡表土剥ぎ

(6)　平成14年度外垣外遺跡試掘風景

(5)　平成12年度中村遺跡発掘風景

(7)　平成15年度蟹畑遺跡表土剥ぎ

(8)　平成15年度蟹畑遺跡発掘風景



(9)　蟹畑遺跡上方より諏訪湖方面を望む

(10)　平成12年度中村遺跡見学会

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なかむら・そとがいと・がにばたいせき |
| 書名 | 中村・外垣外・蟹畑遺跡 |
| 副書名 | 茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書 |
| 編著者名 | 柳川英司 |
| 編集機関 | 茅野市教育委員会 |
| 所在地 | 〒391－8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL 0266－72－2101 |
| 発行年月日 | 西暦2004年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中村 | 茅野市<br>宮川西茅野 | 20214 | 323 | 35°<br>58'<br>43" | 138°<br>09'<br>39" | 2000.04.10<br>～<br>2000.07.24 | 2,400m² | 茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う発掘調査 |
| 外垣外<br>（第1次） | | | 324 | | | | | |
| 外垣外<br>（第2次）<br>（試掘調査） | | | 324 | | | 2002.04.18 | （試掘面積）<br>100m² | |
| 蟹畑<br>（第1次） | | | 325 | 35°<br>58'<br>33" | 138°<br>09'<br>37" | 2002.09.09<br>～<br>2002.10.28 | 800m² | |
| 蟹畑<br>（第2次） | | | 325 | | | 2003.05.06<br>～<br>2003.06.18 | 1,000m² | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 中村 | 集落址 | 縄文中期 | 土坑 6基<br>焼土址 1基 | 縄文時代中期<br>土器・打製石斧・黒耀石石器 | ・沖積地の縄文時代の遺跡 |
| | | 平安 | 竪穴住居址 2軒 | 灰釉陶器椀・皿・瓶土師器椀・皿・高台付坏・釜<br>緑釉陶器椀 | ・中世・平安時代の集落址 |
| | | 中世 | 掘立柱建物址 7軒<br>土坑 134基 | 青磁椀破片・甕破片<br>かわらけ | |
| | | 近世 | 土壙 1基 | 陶器片・硯 | |
| 外垣外<br>（第1次） | 集落址 | 縄文中期 | 土坑12基 | 土器・石器 | |
| 蟹畑<br>（第1次） | | 縄文前期 | 竪穴住居址 1軒<br>土坑 6基 | 土器・石器 | ・平安時代の集落址 |
| | | 平安 | 竪穴住居址 7軒<br>土坑 1基 | 土師器坏・高台付坏・甕・須恵器甕・灰釉陶器椀・瓶・麻皮剥器・雁股鏃・紡錘車 | |
| | | 中世 | 地下式坑 4基 | 瀬戸製香炉・内耳土器 | |
| 蟹畑<br>（第2次） | 集落址 | 縄文前期・後期・晩期 | 住居址 1軒<br>土坑 9基 | 土器・石器 | |
| | | 平安 | 住居址 2軒 | 土師器坏・高台付坏・甕・須恵器甕・灰釉陶器椀・瓶・緑釉陶器椀 | |
| | | 中世 | 方形竪穴 1基<br>地下式坑 2基<br>土坑 42基 | 天目茶碗・内耳土器・かわらけ | |

# 中村・外垣外・蟹畑遺跡
# 発掘調査報告書

――茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う発掘調査――

平成16年３月19日　印 刷
平成16年３月31日　発 行

編　集
発　行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原２丁目６番地１号
☎（0266）72－2101㈹

印　刷　永 明 社 印 刷 所
長野県茅野市塚原２丁目12番30号